平成23年度 文部科学省委託事業
「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」における
実証的共同研究

社会教育でつくるふるさとの未来予想図プロジェクト事業

“熟議”で地域に新しい風を起こそう

事業実績報告書

事業主体

熟議で元気な地域づくりネットワーク

社会教育による地域の教育力強化プロジェクト実証的共同研究

目　　次

公民館における「熟議」の役割 …… 3

第１章　事業実施計画書 …… 9

第２章　新居浜市別子山地区における「熟議」の取組み …… 27
研究実績報告書

第３章　会津坂下町（金上地区）における「熟議」の取組み …… 51
～金上地区地域づくり協議会事業の一環として～
研究実績報告書

第４章　北海道占冠村における「熟議」の取組み …… 81
研究実績報告書

第５章　邑南町における「熟議」の取組み …… 139
研究実績報告書

公民館における「熟議」の役割

熟議で元気な地域づくりネットワーク代表
愛媛大学名誉教授　　讃岐　幸治

社会教育、公民館に何が期待されているか。

限界集落、あるいはそれに近い地域にあっては住民が少ない上に、高齢化している。身近に生活関連施設もなく、買い物するスーパーすらない。そんな不便な地域が多い。安全、教育、医療、福祉などに不安や悩みかかえ、生活におびえながら暮らしているというのが実態だ。

行政に何とかしてほしいと思いながらも、いま財政状況からして行政に頼るのにも限界がある。行政がやれることにも限界がある。愚痴や不平をこぼし、嘆いてみてもはじまらない。これからどう生きていけばいいのか。

さまざまな問題が山積している。それらをほうっておくわけにいかない。何とか解決して、少しでも住みよい地域に創り上げていく必要がある。できたら限界集落からの脱出を図らなくてはならない。それをやれるのはそこに住んでいる住民でしかない。

住みよい地域にするためには、住民自らが主体的に力をあわせさまざまな地域課題を解決していかなくてはならない。それを教育的に手助けするのが社会教育であり、公民館である。それは地域の住民が学びを通して地域の課題を自主的にかつ協働しながら解決していく力を身につける拠点として設置された。こうした限界集落ほど、公民館に期待されてるものはないといえる。

では、住民が地域課題を協働して解決していくが、住民にそうした力を身につけさせるために公民館はどうあればいいのか。地域の課題を住民が協働して解決に向けて取り組んでいくが、公民館はそのプロセスのどこに「熟議」を取り入れていくのか。その場合「熟議」にどんな働きを期待しているのか。「熟議」を取り入れることによって、どのような意識改革が地域社会に起こっているか。簡単に整理してみたい。

住民の地域課題解決への協働化のプロセス

地域の課題は住民自らが力を出し合いながら解決していく必要がある。そういう力を培うところが公民館である。教育的手法を使って、そういう力を育成していくところが公民館だといわれる。

まず地域の課題を解決するために、多くの住民が協働しながら取り組んで行くプロセスはどうなっているのか。「別子山プログラムの流れ」参考にしながら、そのプロセスをを見てみよう。

多くの当事者(住民,NPO、教師など)が集まり、(1).地域が抱えている問題について共に学習し、(2).それへの対策をめぐって意見交換し、(3).あれこれ知恵を出し合い、協働して取

り組むべき目標を決め、(4).共通の目標を達成するための責任を分担しあい、(5).それぞれの持ち味を活かしながら課題解決に取り組んでいく。こういう流れである。

この流れを公民館サイドから捉えなおすと、つぎのようになろう。地域の住民たちがそれぞれの持ち味を活かしながら協働して地域の課題を解決し住みやすい地域をつくっていく。公民館としては、意図的に住民をその方向に意識を向け、行動するように、ゆさぶりをかけていけていくことになる。

つまり公民館としては、つぎの 5 つの各段階をしっかりと踏まえながら、住民が互いに協働して課題解決にあたるように仕向けていくことになるであろう。

(1).地域の問題についての実態調査や講演などを通して、危機意識をもつ段階。

ーーー地域が抱えている問題についての各人の認識はまちまちである。実態調査や講演などを通して地域課題についての学習し、以後同じ土俵で論議できるように情報を共有化しておく必要がある。また、ここでは各人が抱えている生の不安や悩みなどを出し合い、なによりも問題意識を醸成していくことである。ーーー

(2).それぞれ立場や役割の違うものが互いに対応策をあれこれ出し合う段階。

ーーー特定の課題について意見を出し合う段階である。経験、知見、持ち味、立場の違うものが対応策を出すのだから、互いにどうしてそういう意見をいうのか、理解できず、反発したり・小ばかにしたり、無視したり、敵視したりしていたものが、話し合いをしているうちに次第に互いに相手の立場や役割が分かりはじめる段階といっていい。ーーー

(3).あれこれ知恵を出し合い、協働して取り組むべき目標を設定する段階。

地域が抱えている問題は多様で複雑で、単独では解決できるものではない。それらの解決のためには、自分のことだけを主張しているわけには行かない。それぞれの立場を超えて協働して取り組んでいかざるをえない。だれもが納得して取り組める目標、共通目標を設定することになる。ーーー

(4).共通の目標を達成するために、自分が何をすべきかを自覚していく段階。

ーーー掲げた目標が単なるお題目で終わったのでは何にもならない。その目標達成のために各人それぞれ何をすべきか、自分がやらなければならないを自覚し、役割と責任を明確にすることである。段取りをいかにうまくするかが問われる段階である。ーーー

(5).地域の変革者として地域を変えるために協働して取り組んでいく段階。

ーーー地域課題を解決するために、知恵を出し合い、それぞれの持ち味を発揮しながら、それらを活かしながら協働して取り組んでいくか。地域を変革するために、自己変革をしていくとともに他の人や伝統などを巻き込んでアクションを起こしていく段階といってもいい。ー

以上のように地域の課題解決に向けて協働して取り組んでいく、そのプロセスは、こうした 5 つの段階がたどるものである。もちろんそれは長期的にまたは短期的に、あるいは大きくまたは小さく、スパイラルに展開していくものである。より住みよい地域をめざし

てエンドレスに行われる。このプロセスを何回も繰り返し体験していくなかで、次第に自ら地域は自分らで協働して解決していく力、つまり「協働力」や「自治能力」を身につけていくのである。

「熟議」を取り入れる意義と役割

地域の課題に協働で取り組んでいくことを繰り返していけば、次第に住民はそれらの体験を通して「協働力」とか「自治能力」を身につけていくことになる。知識の蓄積ではないが、「学び方を学ぶ学習」をしていることになる。

しかしだからといって、ただ体験すればいいということであれば、公民館でなくてもいい。公民館が地域づくりの拠点として機能していくためには、体験をより確かな学びにする工夫・必要がある。地域力の醸成とか自治能力の育成とか、いいうるためには体験から学びを深める「熟議」をとりいれることである。

体験が素通りしないようにするために、それぞれ体験したことをまず個人でじっくりと「ふりかえり」、それを他者と「分かち合い」、さらに自由に話し合うなかで「学びを深め」ていく、という循環過程をたどる必要がある。熟慮と議論する場がいる。

また地域の課題を住民自らが協働して解決していくためには、目標の共有、情報の共有、資源の共有、関係の共有(顔の見える関係づくり)がなければならない。それらの共有化をはかり、協働できるようにするためには、「熟慮」と「議論」を重ねていく必要がある。

住民が協働して地域の課題に取り組んでいくためには、当事者の間で「熟慮」と「議論」が行われることが大事だ。課題解決に向けての協働化の過程は、「熟議」を中核としてすすめられる。「熟議」を抜きにしては協働化はすすめられないといっていい。

多様なものが協働すべく熟議をするのは、それぞれの立場や役割の「わかり合い」、目標や仕事の「わかちあい」、体験やアイディアの「出し合い」、意見や立場の「支えあい」、互いの考えの「練りあい」などをすすめていくためである。

「熟議」を行うことによって、地域のことは自分らで解決していこうと思いが強まるし、またそれそれが納得して協働しながら取り組んでいくことになる。「熟議」は協働化による地域づくりに不可欠だといえる。なお、同じように地域づくり活動にかかわるものに地域活性化センターと公民館があるが、両者の違いは意図的に「熟議」を取り入れているかどうか、にかかっているといってもいいだろう。

それでは熟議を取り入れることで、どのような効果が期待できるだろうか。熟議は 1.当事者意識を高める、2.相互理解を深める、3.課題解決力をつける、4.発想を転換させる、5.挑戦意欲をもたらする。こうした効果が期待されるであろう。詳しくみてみよう。

(1).当事者意識を高める。

地域が抱えている課題に対して、自分らの経験、悩みや不安、問題意識をさらけ出し、それらを解決するための打開策を自ら立てる。企画立案する段階から主体的に論議にかかわるのが熟議である。地域をどうするか、住みよい地域にするか、ロマンを語り、企画を

練り、段とりをする。すべてに主体的に論議に加わる。熟議は自分がやらなければといった当事者意識を高めることになる。

(2).相互理解を深める。

地域の課題を解決していくためには、多様なものがスクラムを組んむ必要があるが、それぞれ立場や経験が違えば、不信感もあり、なかなか一緒に活動しにくい。熟議は互いの立場や役割を理解しあう機会である。熟議を積み重ねることによって、相互理解がすすみ、さらには相互信頼感、互恵関係、連帯意識が作り出されることになる。話せば分かるという言葉があるが、熟議はお互いを知り、信頼しあう関係をつくりだすものである。

(3).問題解決力を培う。

多様な経験や知識、立場の違うものが意見を出し合う熟議は、互いに自分とは違う経験や知識、知見などに触れて、自分にないものを学びあうものである。それぞれの特技、経験、持ち味を出し合うことによって、複雑な地域課題たって解決できる。みんながそれぞれの特技や持ち味を出し合い協力していけば、地域の複雑な課題だって解決できる。それぞれの持ち味を活かし一緒に取り組んでいけば、自分らの力で解決できる。熟議は地域社会の問題解決力を培っていくのである。

(4).発想の転換を図る。

熟議は自分の意見とは違う意見に出会う。他者の意見に触れることによって、自分の考え方が補強されたり、修正されたり、または触発されて新たな考えを思いついたり、これまでの考え方がゆさぶられる。さらには多様な見方・扱い方、アプローチの仕方があることを知り、複眼的な見方・考え方ができるようになる。特に複雑な課題に対して取り組みでの熟議は、それぞれが従来の枠組みや壁を越えて協働して行かなければならないこともあって、関係者たち発想の転換をもたらすことになる。

(5).挑戦意欲をかき立てる。

熟議は相互に意見を出し合う。相互に刺激しあうことによって、元気やエネルギーを分かち合うことになる。自分らで課題を解決するために知恵を出し企画を立て、段取りを立て行動していくために行われるのが熟議である。熟議はそれに参加しているものに自分らの力で地域が変えられる、そういう自信を植えつける。熟議は自分らで地域を変えよう、住みよい地域にしようとする挑戦意欲をかき立てるものである。

地域社会に起こった意識・行動の変容

別子山村地域における変化をみてみよう。限界集落、過疎化と高齢化がすすみ、住民の間には何かにつけあきらめムードが漂い、暗いイメージに覆われている。家々が離れ離れに点在し、日常的な行き来も少なくなり、それぞれ孤立し家に閉じこもっている。引きこみ思案で、積極性に乏しい。保守的で、冒険をきらい、波風を立てることを極力きらう。こういう地域だった。

この地域を対象とした。熟議を取り入れての協働による地域づくり活動がすすめられた。

熟議は村落共同体で行われていた伝統的な村役主導による「寄り合い」と違って、公民館が民主主義の道場として自主・対等、相互理解、公正・公平を原則として開催していた会合と同じように運営された。地域のことを思うものはだれが参加してもいい、何を言おうとだれに遠慮することもない。

一人ひとりの持ち味が大事されるのが熟議である。うまく協働して取り組むために行われるのが熟議である。共に新たなる創造をめざしておこなわれるのが熟議である。私流にいえば「温故知新」でなく「温故革新」が、「滅私奉公」でなく「活私創公」が重んじられるのが熟議だといえる。

熟議が地域にどのような影響を生み出したか。先ほど熟議がもたらす効果でみたように、当事者意識が高まってきたこともあり、地域の一員として何とかしようとする人が増えつつある。また、熟議によってそれぞれの立場や仕事に対する理解が深まり、また共同作業の機会が増えてきたこともあり人間関係が深まり、気軽に集まり、一緒に活動する場面が多く見られるようになった。

小さい事業ながらも、成功したことことから自信が生まれ、やればできるというムードが漂いはじめている。さらに新たな事業にチャレンジしようとする機運、しくみが生まれてきた。

こうした変化が見られるが、とまれ熟議の影響をどうとらえるか、どういう視点からとらえるか、今後の検討してみたい課題の一つだ。

第1章

社会教育による地域の
教育力強化プロジェクト実証的共同研究

事業実施計画書

平成 23 年度『社会教育による地域の教育力強化プロジェクト』による実証的共同研究
当初企画プラン

これは、４地域で共に取り組むことを確認する際に作った企画書である。実際内容とは変更部分があるが、あえて参考資料として提示する。

社会教育でつくるふるさとの未来予想図プロジェクト事業

～『熟議』で 10 年先のふるさとの姿を描き、実践するための比較検証事業～
全国 4 か所の公民館における実証比較を通じて実践型熟議のプログラムを検討する。

社会教育の拠点である公民館を拠点に、みんなで創る地域づくり計画を『熟議』の手法を用いて取組む。そのことによって、そこに暮らす住民が当事者意識を持って、10 年先のふるさとの将来像を考え、実践する風土へ転換できるかを探る。

「公民館草創の原点であった『郷土を興す喜び』を感じるために、今こそ公民館は地域を甦らせるインキュベーターになるべきであり、そのことが公民館の存在意義を高めるに違いない。」その仮説のもとに、当事業を全国の 4 つのフィールドで展開し、歴史や文化、人的資源、産業などの要素がどのように影響を及ぼすか検証していきたい。

★　対象は敢えて、厳しい状況下にある公民館を選ぶ。
現在、地域の存続をかけて何かを始めなければいけないと思っている地域、公民館
限界集落と呼ばれ、無縁社会の危機感を肌で感じている。
➪　それ故に、このままではいけないという新しい動きが胎動し、
地域力を高めようとする意志が住民にも、公民館にもあることが前提条件。

キーワードは、無縁社会の克服、限界集落からの脱出、郷土を興す公民館、当事者意識
『志』、民主主義の学校、熟議など

想定されるフィールドは…
愛媛県新居浜市立別子山公民館、福島県会津坂下町金上公民館
北海道占冠村、島根県の山間部（邑南町）の公民館

≪事業の概要≫

全国各地の 4 つの公民館を対象に、地域の将来像を熟議を通じて策定していく作業に取組む。ＰＤＣＡサイクルに配慮し、話だけで終わらない、実践に繋げることを重視した事業に取組み、全国に展開できる熟議プログラム策定に繋げる研究を行う。

第１ステージ　地域を知る作業

Ａ現状を数値で客観的に把握する。（行政情報）　地域カルテのフォーマットに基づく。

Ｂ住民の感覚をアンケートで把握する。　住民満足度調査　これも共通フォーマットで

➪二つの調査をもとに、現在の地域の実態を把握する。特に感覚と数字のずれを認識すること。

両者の情報を使ってワークショップを行い、地域のよい所（強み）と悪い所（弱み）を情報共有する。

➪　結果は、公民館の広報誌を通じて全戸配布し、住民すべてが共有する。

第２ステージ　地域づくりの先輩に学ぶ作業

（１）先進的な活動を既に行っている地域の事例を学習する。

映像教材　　例えば　鹿児島県のやねだん、島根県地域力醸成プログラム

（２）これからの地域づくりの方向性を学ぶ。

それぞれの地域の実態を熟知した大学教授、ＮＰＯ等の講師による講演会

（３）先進的な地域を訪ね、人的交流、コミュニケーションを深める。

将来の相互交流のきっかけとなるよう本音の情報交換

第３ステージ　地域の将来像を熟議して策定する作業

（１）まずは、地域課題を絞り込むためのワークショップを実施する。

できれば、５つぐらいまでに集約できるか？

地域・社会の要請の視点から

高齢化・少子化・学校存続・福祉・健康・安全・就労支援など

（２）各課題に対して、地域（公民館）がどう関わるべきかを探っていく。

①まずは、自分一人で何ができるか

②次に、隣近所が助け合ってできることはなにか

③地域全体（公民館）で協力してできること

④行政に協働を求め、共に取組むこと

⑤将来に向けての夢語り。新たな事業化を求めること（主にハード）

★これらの作業には、老若男女・よそ者も含めて参加する仕掛けを作るべき

（１）と（２）をマトリクスにまとめていく作業に取組む。

↓

将来の自分たちのまちの姿をイメージしていくことができるか。

↓

実際に子ども達が未来予想図を絵画化する。あるいは映像化すると面白い。

↓

地域のみんなを集めて、活動の報告会・発表会を開催し、情報発信する。

『１０年先のわがふるさとにタイムマシン行こう会』

第４ステージ　　できることを実践する作業

一年間ではここに至ることは困難かもしれない。小さなことでも、何か実践できればすばらしいが求めることは困難。

次年度に向けて、何をやるかを明確化するまで至ればよいと思う。

これまでになかった新しい施策が生まれれば成功だと考える。

新しいことを興すための、新しい組織が必要になるはず。

地域での熟議を支援する展開の手法　　事例を比較検証する調査研究の視点

（1）検討委員会を設置すること

４つの実施公民館に対して共通のフォーマットを示し、比較検証を行うための機関を設けることが必要となる。同様の対応をする中で発生する地域間格差を研究することで、全国展開できるより実践的なスタイルを構築する。

必要とされる事前作成を要する共通フォーマットは

①ふるさとカルテ（地域の数値情報をまとめた様式）

②住民意識調査のアンケート票

③先進事例を学ぶための教材選定

④熟議（ワークショップ）展開のガイドライン

これらについては事前作成して、各地に提供することが必要である。

構成は　10名程度の委員で

実施自治体関係者・文部科学省・全公連・国社研・ＮＰＯ・大学教授等

基本はネット上の情報交換、年２回（資料作成報告段階）は東京で情報交換会議

（2）情報を全国レベルで共有すること

★活動は現在進行形でインターネット上（公民館海援隊も一案）で共有することで、同様の悩みを抱える全国の公民館が関心を持つよう促すことが可能になる。

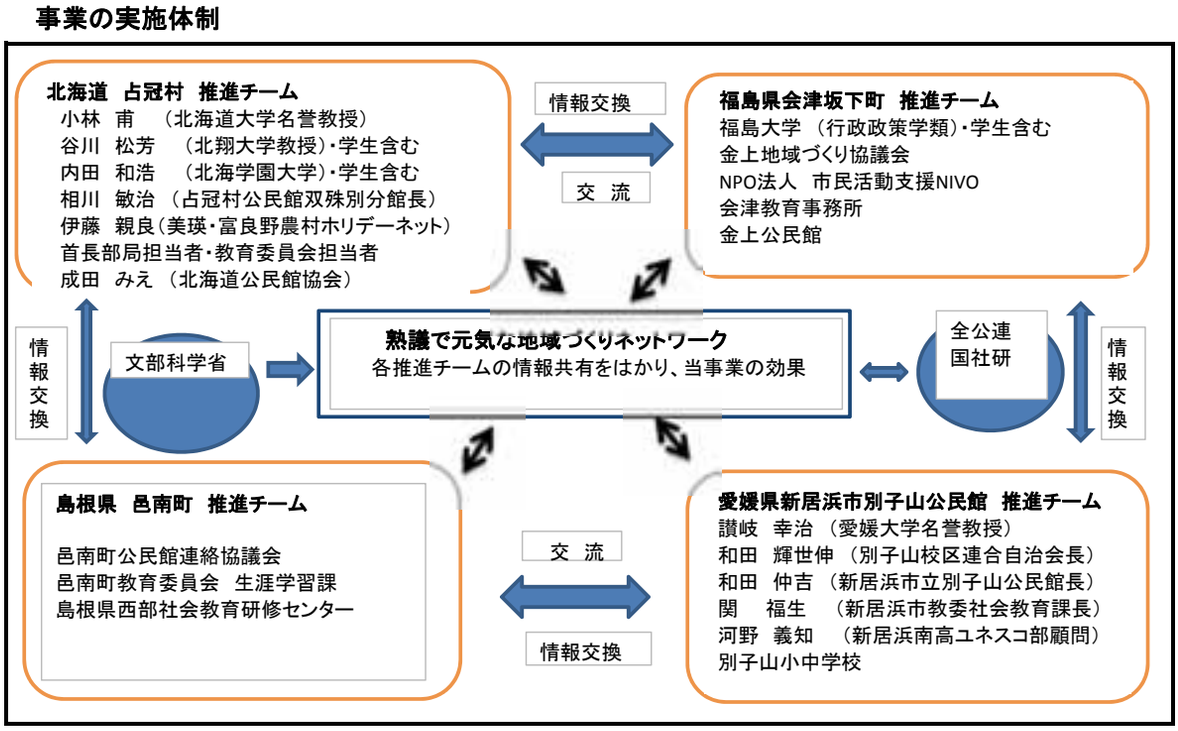
★熟議によって出来上がった成果は、公民館の全国レベルの研修会等の機会で情報発信することができれば有難い。（文部科学省の後押しが必要か）

★成果報告書については、多様な因子によってどのような差異が生じることになったかを分析し、今後、全国各地に同様の実践展開をはかるために必要な『熟議プログラム』的なものを組み込む。インターネット上に成果物は公開する。

実証的共同研究組織の構成

氏　　名	所　属　・　役　職　等	備　考　欄
小林　甫	北海道大学名誉教授	副代表
内田　和浩	北海学園大学教授	
谷川　松芳	北翔大学教授	
相川　敏治	占冠村公民館双珠別分館長	
伊藤　親良	美瑛富良野農村ホリデーネット幹事	
成田　みえ	北海道公民館協会　事務局	会　計
千葉　悦子	福島大学行政政策学類教授	
鈴木　茂雄	会津教育事務所　社会教育主事	
鈴木　伸司	市民活動支援組織NIVO理事長	
山ノ内　貞夫	市民活動支援組織NIVO事務局長	
蓮沼　孝義	金上地区地域づくり協議会会長・金上公民館長	
佐藤　房枝	金上公民館生涯学習推進員・文部科学省社会教育アドバイザー	監　査
吉川　　正	邑南町公民館連絡協議会会長	
能美　恭志	邑南町生涯学習課　課長補佐	
安野　光城	島根県西部社会教育研修センター　所長	
和田　輝世伸	新居浜市別子山校区連合自治会長	
関　福生	新居浜市教育委員会社会教育課長・社会教育主事	事務局
讃岐　幸治	愛媛大学名誉教授	代　表
和田　仲吉	新居浜市立別子山公民館長	

事業の実施体制



別紙1－①

解決すべき地域の課題（地域の現状） 分析

（1） 事業実施に至った背景について

今回のプロジェクトの着想は、社会教育に『志』を持って取組もうとする同志の縁によって生まれたものである。現在、社会教育、公民館を取り巻く環境は決して順風ではない。しかし、文部科学省の提唱によってできた公民館海援隊、さらには全国規模の研修機会において縁が生まれたことで、共に考え、行動することによって、新しい風を起こすことに繋がったのである。単に現状を憂うるだけではなく、現状を変革し、よりよい地域社会を実現する上で、これまで蓄積してきた社会教育の力を信頼し、将来に繋げる一石を投じたいとの思いが共有されたのである。

全国各地の共通の課題を持ったものが、お互いの経験や知恵を出し合って、協働することによって、“文殊の知恵”が生まれる可能性も高くなるはずである。また、一ヶ所の事例では特殊と見られるものも、四つの事例を比較検証することによって、汎用化できるケースも増えるはずと考えた。全国には、過疎化が進行する中、同じような課題を克服しようとがんばっている仲間が多い。当事業によって、それらの力を結び、新たな活動を呼び起こすきっかけができれば何よりであり、この事業の結果を一つのたたき台として、それを越えていくことが可能となれば、全国各地に郷土を興す社会教育の燈火が燎原の火のごとく拡がっていくことを願ったものである。

（2）“熟議”によって地域を活性化するということ

「限界集落」や「無縁社会」という言葉はあくまでも評論家的、傍観者的である。確かに、過疎化、高齢化等に悩む地域の住民にとって、その言葉の意味は理解できるのだが、それを敢えて受け入れたくはないというのが人情である。何とかして、自分達の力を結集して、わがふるさとを元気にしたい、みんなで幸福な人生を送りたいと願っているはずである。

しかし、そのために何ができるかと問われれば、具体的な解決策を明らかにするのは容易ではない。その理由を探ると、やはりこれまでの行政依存体質に流されてきた歴史に行き着くのである。過疎地域に対してこれまで行われてきた支援策は物質的な支援が中心であり、それは時に甘えを助長し、そこに生活する人たちの自立心や志を損なってきたのかもしれない。本来の社会教育の目的は、個人の要望と社会の要請をマッチングさせ、みんなが地域の一員として担うべき役割を自覚し、実践していく社会をつくっていくことにあるはずである。

当事業では、住民のより多くの層が、地域づくりに関与できる場面を拡大することに重点を置き、現状に対する思いを語り合い、それを突き詰めて考え、みんなで目指すべき理想を共有し、その実現に向けて必要なことを積み上げていこうと考えている。その過程において、民主主義の基本である議論の大切さを“熟議”によって学ぼうとしている。「限界集落」と呼ばれる地域にこそ直接民主主義が可能となる土壌がある。みんなの総意を集めて地域を創ることが可能だと
いうことを、むしろプラスに捉え、地域活性化の起爆剤にしていきたいと考える。われこそは、この地域をよりよくしていく当事者、自分のまちをよくしていくのは自分しかいないと思う住民がひとりでも増えることを願い、この事業に取り組んでいきたい。

(3)実施予定地域の現状及び特性について

①北海道　勇払郡　占冠村

従来は、村社会で完結することが多く、他者の視点を導入する風土ではなかったが、今回の事業では特に大学との連携の下に、「よそ者、若者、ばか者」の視点を組み込み、これまでにない新風を吹き込み、地域社会に敢えて掻き混ぜを起こそうとしている。

大学生が地域住民にインタビューを行い、住民の生の声を吸い上げ、その声を記録媒体として将来に保存することは興味深い。

これまであまり聞くことのなかった、村民一人ひとりの意見と、若者の情熱が交じり合うことによって相乗効果が期待できる。北翔大学、北海学園大学の複数大学が関与することが予定されており、活発な議論を期待できる。

北海道の開発は明治期以降であり、その浅い歴史ゆえに、他地域に存在している地域共同体意識は薄く、どちらかといえば行政依存意識が強いという自己評価があるが、果たしてその実態はどうなのか、今回他地域との比較検証によって探ることも興味深い。

また、占冠村にはトマムリゾートを抱え、村の中の租界の感もある。さらには、美瑛町、富良野町など周辺地域との連携も興味深いテーマである。

今回の事業実施にあたっては、北海道公民館協会の関与により、村長、教育長の賛同も得られ、村を上げて積極的に取組む意欲も十分である。

②福島県　河沼郡　会津坂下町　（金上公民館）

昨年度、町の振興計画と並んで、7つの地区公民館単位で『地域づくり計画』も策定された。それぞれの地区ごとに住民からなる地域づくり協議会が作ったものだが、できた計画は抽象的な表現に終わり、果たして自分たちに何ができるのか、何をなすべきかがイメージしがたいものである。

会津坂下町は、平成16年度より住民に公民館事業を委託するという制度を導入し、方向性としては地域住民主導でまちづくりを推進することを目指してきた。そして平成25年度からは、各地区公民館をコミュニティセンターに名称を変更し、それぞれの地域づくり計画ご具現化するために、生涯学習、社会教育に加えて、防災、福祉、環境、産業なども含めた地域活動の拠点とする計画もあるが、まだその方法論は確立していない。当事業においては、福島大学の学生（行政政策学類）との連携も計画されており、ひとりひとりの意見の掘り出しから始めて、民意を反映させた地域づくりの仕組みづくりを目指していきたい。

金上公民館は「だがしや楽校」など小学校と連携した事業などで地域の活性化を図ってきたが、平成25年度には小学校が統廃合され地域の低迷が予想される。これらの課題を克服し、自分たちが地域を変えていく当事者意識を強く持つために、先進的な事例として

秋田市の活動を参考に、自らが関与することで自己実現し、地域社会も元気にしていく手法を学び、自分達の地域づくりに生かしていきたいと考えている。

③島根県　邑智郡　邑南町

人口 1 万 2 千人ほどの町に 12 の公民館を有し、各公民館に正規職員の主事を配置する。「和」のまちづくり、子育て支援日本一をめざし、公民館を拠点に地域づくりを進める戦略を展開しているが、中山間地域に共通に見られる、少子高齢化、脆弱な財政基盤は深刻な課題である。地域コミュニティの拠点である公民館には、福祉、防災、産業振興、子育て支援等様々な課題に向けての取組が求められ、公民館主事への期待は極めて大きいが、正規職員であるが故に数年で異動となり、人材の育成と主事としての専門性の継続が大きな課題である。

その状況を打破するために、当事業を推進することによって、社会教育指導者としての公民館主事の知識と技術を高め、各公民館が住民とともに“熟議”を重ねる場創造することにより、地域課題の解決に向けた取組が進められることを期待している。

現在、島根県では、地域力醸成プログラムを展開しており、公民館が地域を活性化する原動力となることを目指しており、その活動を進化させる上でも、当事業との連動を期待できる。地域住民が主体的に地域づくりに関与し、自らが計画策定に関与するために役立つ汎用プログラムを策定し、公民館職員がいかに関わることができるかを示すことができれば、県全体の足並みを揃え、底上げも期待できると考えている。そのために、社会教育研修センターも積極的に関与し、研修については県教委の支援も求めて事業推進にあたる予定である。

④愛媛県新居浜市　別子山公民館

江戸時代から別子銅山の鉱山集落として発展してきたが、現在は人口 200 人を切る地域であり、高齢化、少子化は地域の存続を危うくしている。平成 15 年に新居浜市と合併したが、従来は山村振興策の恩恵を受けていたものが途絶え、いかにして地域の存続を図っていくかが大きな課題となっている。

その中で、自治会組織が中心になって公民館と連携し、地域再生のために何ができるかを模索している状態である。特に、様々なイベントを展開し、地域以外からの交流人口を増やし、別子山の応援団を増やそうとする努力は高く評価される。

地域には、別子銅山の近代化産業遺産をはじめ、高山植物をはじめとする豊かな自然、伝統文化など豊富な資源があるのだが、それを生かすための方法論は見出せていない。当事業において、地域の強みを再発見し、それを活かす方策を生み出すことで、さらに交流人口を拡大し、地域が元気になる道を探りたい。

別紙1－④

現状では、自治会長の強いリーダーシップに支えられている傾向が見られるが、地域には古くからのしがらみや人間関係も残っており、それを打破する上でも、“熟議の場”を設けることは大きな意義を持つであろう。また、現在、小中学校の児童生徒数は 7 名であり、今後の存続が不安である。山村留学を推進したいという意見もあるが、地域の合意には至っていない。地域の子ども達はとても元気であり、住民の誇りでもある。当事業においては子ども達の力も活用し、地域住民と地域外の応援団の協働作品として地域づくり計画をつくっていきたいと考えている。

別紙２－①

実証的共同研究の実施内容及び実施方法等

≪事業の概要≫

全国各地の４つの公民館を対象に、地域の将来像を熟議を通じて策定していく作業に取組む。PDCAサイクルに着目し、議論だけで終わらない、実践に繋げることを重視した事業に取組み、全国に展開できる熟議プログラム策定に繋げる研究を行いたい。

４ つの実施フィールドすべてで行う共通プログラムと各地域の特性に応じた独自プログラムで構成されている。

≪共通プログラム≫

第1ステージ　地域を知る作業

ア　各地域の現状を数値で客観的に把握する地域カルテを作成する。（共通）

イ　住民の感覚をアンケートまたはインタビュー調査で把握する。　（共通）

➪　調査をもとに、現在の地域実態を把握する。 住民感覚と現実の数字のずれを確認する。
地域のよい所（強み）と悪い所（弱み）を情報共有する。多様な地域課題の掘り起こし

➪　分析結果は、公民館の広報誌等を通じて全戸配布し、すべての住民が共有する。

第２ステージ　地域づくりを学ぶ作業

（1）先進的な活動を既に行っている地域の事例を調査研究する。
映像教材、インターネット、研究機関からのヒアリング

（2）これからの地域づくりの方向性を講師から学ぶ。
先導的な指導者、大学教授、文部科学省の社会教育アドバイザー活用

（3）先進的な地域を訪ね、人的交流、コミュニケーションを深める。
相互交流のきっかけとなる本音の情報交換会

第３ステージ　地域の将来像を『熟議』して策定する作業

（1）地域課題を絞り込むためのワークショップを実施する。KJ法や BS （5 つ程度に集約？）
社会の要請の視点から　高齢化・少子化・学校存続・福祉・健康・安全・就労支援など

（2）各課題に対して、新しい公共の視点で、地域社会（公民館）がどう関わるべきかを探る。

①まずは、自分一人で何ができるか？

②次に、隣近所が助け合ってできることは何か？

③地域全体（公民館）で協力してできることは何か？

④行政に協働を求め、共に取組むことは何か？

⑤将来に向けての夢語り。新たな事業化を求めることは何か？

★これらの作業には、老若男女、新参者も含め、あらゆる層が参加する仕掛けをつくる。

『熟議』の流れとしては・・・

まちづくりの課題と役割分担をマトリクスにまとめていく作業

↓

将来の自分たちのまちの姿をイメージしていくことができるか。 **まちづくりビジョンの明確化**

↓

実際に子ども達が未来予想図を絵画化する。あるいは映像に **目標がイメージできること**

↓

地域のみんなを集めて、活動の報告会・発表会を開催し、情報発信する。 **ベクトル合わせ**

次年度以降の対応課題　　第4ステージ　できることを実践する作業

一年間では計画段階で止まるため、みんなで決めたことを着実に積み重ねていくことが必要。その評価を、設定した目標との距離で毎年確認しながら、10 年先を目指す感覚が重要である。事業を通じてできた全国のネットワークを活用し、定期的に情報交換することが重要である。

★ 4 つの事例を比較検証する上で重視すべき視点

(1)各地の情報を集約、検討するための会議を設置する。

4 つの実施公民館に対して共通のフォーマットを示し、比較検証を行うための機関を設けることが必要である。同様の事業展開で発生する地域間格差を研究する上で、将来、全国展開できる実践的なスタイルを構築する。

みんなでつくる共通フォーマットは次のようなもの

①ふるさとカルテ(地域の数値情報をまとめた様式)

②住民意識調査のアンケート票

③先進事例を学ぶための教材選定

④熟議(ワークショップ)展開のガイドライン

基本はインターネット上の情報交換、報告段階には東京で情報交換会議を開催する。

(2)各事例の情報を全国レベルで共有すること

★現在進行形の情報をネット上(公民館海援隊も一案)で共有することで、同様の悩みを抱える全国の公民館が関心を持つよう促すことが可能になる。

★各地域の熟議の状況を公民館の全国レベルの研修会等の機会で情報発信する。

(3) 日常的に関係性を持つアドバイザーとの連携を確保すること。

大学教授等、識見を有する人材からの指導助言を求めながら、事業のレベルを高める。

○ フィールド1　　占冠村

北海道大学名誉教授　小林　甫

北翔大学教授　　谷川　松芳

北海学園大学　　内田　和浩

○ フィールド 2　　会津坂下町

福島大学　行政政策学類教授　千葉　悦子

○ フィールド3　　邑南町

島根県立西部社会教育研修センター所長　安野　光雄

○ フィールド4　　別子山公民館

愛媛大学名誉教授　　讃岐　幸治

≪独自プログラム≫　各地域が独自性を持って取組む活動領域

◎ 北海道　占冠村

○ 大学との協働（北翔大学及び北海学園大学）

○ 首長部局との連携強化

○ 周辺自治体との協力体制

◎ 福島県　会津坂下町

○ 大学との協働（福島大学）

○ 先進地域との交流（秋田市）

○ NPO との連携

◎ 島根県　邑南町

○ 公民館職員の資質向上

○ 県社会教育研修センターとの連携

○ 同志との交流事業（新居浜市別子山公民館）

◎ 愛媛県新居浜市別子山公民館

○ 地域外の住民との連携（別子山応援団・サポーター）

○ 高校生、小・中学生の参画

○ 同志との交流事業（島根県邑南町）

別紙３

事業実施により得られることが見込まれる成果・効果

1．地域活性化に向け、全国で実施可能な社会教育的手法による事業プログラムが開発される。

- 見せかけの議論ではなく、本音の議論を盛り上げる手法
- 住民それぞれが持った個性、特性を活かす手法
- 相互学習の仕組み、だれもが主人公になれる手法
- 行政に依存しない、自立のための手法

★ 公民館の持つ、特定地域の社会教育施設としての意義を高めることができる。

2．それぞれの地域が持つ特性に応じて、有効な社会教育的アプローチを例示することが可能になる。

アンケートによって地域住民の意識を類型化する。その上で同じプログラムを実施した際に事業結果にどのような差異が生じるかを研究することができる。

3．全国の社会教育関係者のネットワークが強化される。

公民館海援隊（過疎地域や課題解決重視）の加入者の増加が期待される。

全国には、同様の地域課題を抱えている自治体は多い。悩みを語り合い、情報交換を行うことの意義は大きい。

4．『役に立つ社会教育』が展開され、首長部局と連動した社会教育が展開される。

社会教育的なアプローチが地域づくりに果たす役割が認識され、単に趣味教養を満足させる場でなく、新しい公共の担い手としての社会教育の意義が高まる。

自助・共助の領域と公助の領域の線引きを、住民の議論の中で決定する仕組みをつくることができれば行政課題解決の手法の転換もできる。

5．自分の考えが主張でき、実践できる、地域人材の育成が期待される。

住民の意見を吸い上げ、地域づくりに結び付けるファシリテート能力を有する専門職員や地域人材が育成される。また、自分達の意見を表現し、実践できる住民の増加が期待される。

6．その他

・交流人口の増加による地域活性化
・地域以外の応援団（サポーター）の増大
・大学生や子ども達の社会参画機会の拡大
・現在の地域の状況を記録し、将来に残すこと（映像番組等）

社会教育でつくるふるさとの未来予想図プロジェクト事業

～“熟議”で地域に新しい風を起こそう～　　実証フィールド　Map

『公民館海援隊』、全国規模の研修会で出会った仲間が“志縁”を結ぶ。

フィールド１　　北海道勇払郡占冠村

人口 1,179 人　面積　571.31 ㎢

北海道は明治以降の歴史のため、地域共同体意識が薄く、行政依存傾向が強い。現状変革によって地域を元気にしたいという意識が強く、大学生と共に地域計画を策定することで、新しい風を起こしたい。

フィールド３　　島根県邑智郡邑南町

人口　11,865 人　面積　419.22 ㎢

町内に 12 の公民館を有し、すべてに正規職員主事を配置している。島根県では地域力醸成プログラムを展開しており、当事業を通じて、住民の意識を高めると共に、職員の資質向上を目指したい。

フィールド２福島県　会津坂下町

金上公民館ほか

人口 17,226 人　面積　91.65 ㎢

平成 16 年度から公民館事業を委託化し、今後は地域課題解決型のコミュニティセンターへの移行も視野に入れているが、そのためには地域力の向上が求められ、当事業に取組む。

フィールド４　　愛媛県新居浜市

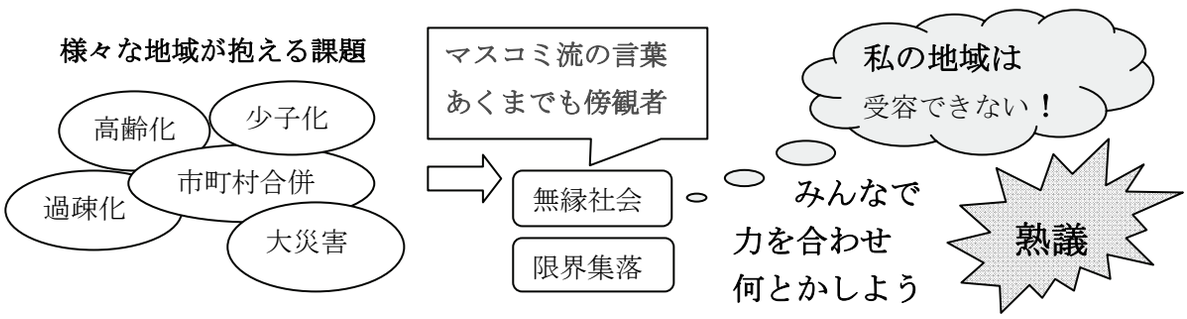
別子山公民館　人口 200 人　面積 73 ㎢

別子山村は平成 15 年に新居浜市に合併した。別子銅山の最盛期には 1 万人を越えたが、現在は 200 人、さらに減少傾向にある。イベントを開催し、交流人口を増大させ、地域外の応援団を募集中

4 つの地域が取組んだ成果を比較検証することで、全国に事業展開を目指す。

実証的共同研究の全体イメージ

提案の背景は…　“わが地域を何とかしたい”という社会教育人の“志”が繋がったこと



≪事業の概要≫

全国各地の４つの公民館を対象に、地域の将来像を“熟議”で策定していく作業に取組む。ＰＤＣＡサイクルを踏まえ、話だけで終わらない、実践を重視した事業に取組み、全国に展開できる熟議プログラム策定に繋げる研究を行う。

地域の実証的共同研究　＝　共通プログラム　＋　個別プログラム

共通プログラム　４つの地域で同じ内容に取組む

第１ステージ 地域の現状を知る	第２ステージ 地域づくりを学ぶ	第３ステージ 熟議で将来像を描く
①地域カルテの作成 地域の数値データ ②住民アンケート調査 （住民インタビュー） ③現状認識を共有する ☆地域の良い所探し ★地域の弱み発見	①先進事例を調査研究 映像教材・Internet ②講師・先輩から学ぶ 先進地の情報 ③社会教育アドバイザーの活用 ④同じ悩みを抱える地域との情報交換	①地域課題を集約する ワークショップ実施 ②公民館の関わりを学ぶ 自助・共助・公助 ③まちづくりのビジョン 目指す目標の明確化 ④結果を周知するための報告会の開催

個別プログラム　各地域の特性に応じたアプローチ

北海道　占冠村 ・大学との協働（北翔大学・北海学園大学） ・首長部局との協働 ・周辺自治体との協力（富良野・美瑛など）	福島県　会津坂下町 ・大学との協働（福島大学） ・先進地域との交流（秋田市） ・NPO との連携
島根県　邑南町 ・公民館職員の資質向上 ・県社会教育研修センターとの連携 ・他地域との交流（新居浜市　別子山）	愛媛県新居浜市（別子山） ・地域外の住民との連携（地域サポーター） ・高校生・小中学生の参画 ・他地域との交流（島根県　邑南町）

調査研究の手法と目指すべき成果について

熟議の手法	地域の目指すべき将来像をみんなで議論して創造する
地域課題の絞込	・アンケート調査やインタビューで得られた住民の声を集約すること。 ・ワークショップを活用（KJ法・BS)して、誰もが参画できること。
目標の明確化	・目指すべきまちづくりのビジョンを描き、どこに地域が向かうのかを確認する。 ・抽象的な理想ではなく、達成可能な具体的な計画を策定する。
役割分担の確認	・新しい公共の視点で、地域課題解決に向け自助・共助・公助の線引きを見直す。 ・社会教育の立場でできることを考え、公民館が何をなすべきかを明確にする。
情報の共有	・住民すべてに熟議の状況を伝え、今、地域がどこに向かっているかを周知する。 ・みんなで議論して意思決定した内容を報告会や情報誌によって情報提供する。

★この研究を全国の 4 か所で行うことの意義は何か・・・　　社会教育の絆づくり

① 同じ問題意識をもった自治体が協働することで、多種多様な知恵が活用できるはず…

② 一か所では特殊と見られる事象も、4 か所で検証することで一般化できるはず…

③ 単独では取組みにくいことも、仲間がいれば共に助け合うことで解決できるはず…

★ 実証的共同研究組織『“熟議”で元気な地域づくりネットワーク会議』の任務は・・・

各推進チームが行うプログラムの情報共有をはかり、当事業の効果的な運営を協議し、成果物として全国どこでも活用できる新しいプログラムを開発すること。具体的には次のとおり

・事業推進に必要な共通フォーマットを策定する。

①ふるさとカルテ（地域の現状を客観的に評価するための数値情報をまとめる様式）

②アンケート調査票（各地域の住民意識を把握して類型化する作業と住民の声を引き出す）

③先進事例を学ぶための教材選定（どこが最適な参考事例なのか情報を提供する。）

④熟議（ワークショップ）を展開するためのガイドライン策定（誰でもできるものを）

・日常的な情報交換はメールで対応し、報告書作成段階に一度は合同会議を実施する。

・研究の**情報を全国レベルで共有すること**　現在進行形の情報を“公民館海援隊”に提供

・文部科学省の社会教育アドバイザーの積極的活用を図る仕組みをつくる。

当事業のアウトプットは

『地域特性を踏まえた社会教育による地域活性化のための事業プログラムの開発』

その成果（アウトカム）として、

1．全国の社会教育関係者のネットワークが拡大・強化される。

2．社会教育の存在意義が認知され、首長部局と連動した地域づくりが展開される。

3．自分の考えが主張でき、実践できる当事者意識を持った地域人材が育成される。

限界集落から脱却し、無縁社会とは無縁の、共に支えあう幸福な地域が生まれる。

アンケート調査の実施方針

アンケートの位置づけ	・単に事業の実施前後の評価の観点だけでなく、事業を推進するための基礎データとしての意味を持つ。 ・地域特性を把握することで、地域風土に応じた新しいプログラム策定に繋げると共に、住民のニーズやウォンツを集約するための手法として活用する。
実施対象方法	・4つの実施地域全部が同じ調査票で実施する。 ・できる限り多くの住民の意見を調査する。最低でも各地域100の標本数を抽出する。据置もしくは面談で実施する。事前事後、同対象で実施
調査内容	・事前調査の内容は、住民の地域の現状を見ているかを把握することで地域類型を判断するための質問事項と地域づくり計画策定の基礎データとなる情報を収集するものとする。 ・事後調査は当事業によって住民意識にどのような変化が起こったかを知るために実施する。

アンケート調査の質問項目

（事前調査）

1．自分の住んでいる地域に対する愛着度

2．地域の現状に対する満足度

①自然　②就労　③教育　④福祉　⑤交通　⑥娯楽　⑦商業　⑧行政　等

3．自助・共助・公助の線引きについて（新しい公共の捉え方）

①ゴミ問題　②自主防災　③地域美化　④子育て支援　⑤高齢者介護　等

4．過去志向が強いか、未来志向が強いか　楽天的か悲観的か

5．隣近所の人間関係について　プライバシー重視か信頼感重視か

6．自分にとって、生活上の優先事項は何か、幸福を感じる点について

7．公民館（地域拠点）の認知度や必要度について

これらの事項について全地域で調査し､ある程度の地域特性､行動パターン等を把握する。

➪　質問内容については、4 地域で情報を持寄り、協議の上で決定する。

≪熟議のための基礎データとする調査項目≫　～地域に暮らして感じていること～

①　私のまちの好きなこと（誇りに思うこと）　3 点程度

②　私のまちの嫌いなこと（不安や不満なこと）　3 点程度

③　10 年先の私のまちに望むこと（こんなまちになったらいい）　3 点程度

（事後調査）

1．当事業を実施したことで、地域が変化したと感じるか

2．当事業を実施したことで、自分のものの考え方や行動に変化が生じたか

3．今後、自分が地域のために地域のためにやっていこうと思うこと　3 点程度

第2章

社会教育による地域の
教育力強化プロジェクト実証的共同研究

新居浜市
別子山地区における
『熟議』の取組み

研究実績報告書

（社会教育による地域の教育力強化プロジェクト実証的共同研究）

新居浜市別子山地区における研究実績報告書

１．対象地域の概要

別子山地域は**平成 15 年 4 月 1 日に新居浜市に合併**した。南の四国山地の峯には平家平の名が残るように、平家の落人部落の歴史も残る急峻な山に集落が点在する山村である。江戸時代元禄期に別子銅山が発見され、日本の三大銅山の一つに数えられる繁栄を遂げる。明治時代には、県都松山市に次ぐ 1 万人余の人口を抱える街であった。しかし、昭和 48 年の別子銅山休山以降、人口の減少は止まらず、**30 年前には 400 人だった人口が現在は 200 人を切っている**状況である。**高齢化率も 48%**となり、限界集落の境界である 50%直前の状況である。

合併にあたっては、生活圏としては伊予三島市（現四国中央市）と強かったにもかかわらず、歴史・産業面で関係が深かった新居浜市との関係を選択したので、現在でも消防警察、医療などでは新居浜よりも四国中央とのつながりが強い。また、合併直前に造った施設も多く、その維持管理は課題を抱えている。

産業は、農林業が主体であるが販売されるものは少ない。第 3 セクターで運営する宿泊施設「ゆらぎ」、木材加工センターなどもあり、若手の就労機会が提供され、その成果として**Ｉターン、Ｕターン者**も生まれてきている。

公民館は別子山村時代、昭和 59 年新築された鉄筋 2 階建ての 631 ㎡の建物、職員は正規職員が館長・主事職を兼務し、非常勤の主事補１名との２人体制であり、独自の公民館運営審議会を有する。施設面では、市内の公民館よりも優れた設備となっている。公民館に隣接して、**小・中学校があり、現在は児童 2 人、生徒 5 人**である。来年度は中学生がすべて卒業する予定で、おそらく**中学校は休校**となる。学校の体育館は冷暖房完備で、社会体育にも活用されている。また、同地域には別子ふるさと館、社会福祉センターなどの施設が集中しており、地域づくりの拠点となっている。

別子山のコミュニティは 4 つの単位自治会が集り連合自治会を構成している。各々が点在しており、**東西に細長い地形**、移動手段がない高齢者にとっては不便な状況である。

現在、合併後 9 年が経過し、10 か年を目途に推進してきた**新市計画が終了**し、今後の目標を設定すべき時期にあたっている。

２．当事業に取組むに至った経緯

（１）現在抱えている地域（公民館・社会教育）の課題は何か。

①　いつの間にか生まれた行政（公民館）への依存体質

特に、合併前後を比較し、以前の手厚い行政サービスを当然の権利と感じる風土になってしまった。言えば何でもやってもらえると考える住民は多い。

②　公民館活動そのものが縮小していること

地域住民の高齢化によって、移動手段がない住民は公民館に集まることができない。趣味的なものでも人は集まらず、グループサークルも休眠状態である。

③　事業のマンネリ化

毎年同じ事業の繰り返し状態である。前年度踏襲では事業は先細りになり、新規人材の参加も少ない。

⇒　上記の結果、**地域の活力が弱体化**している。しかし、**同時に新しい力を求める**動きが芽生えつつある。その動きには、閉鎖的な活動ではなく、**地域外に**対して積極的に働きかけ、地域住民以外のパワーを導入しようという動きが見られる。しかし、これまでの取組みの延長線上では、大きな転換は困難であり、いわば不完全燃焼の状況である。

（２）課題解決のために取組むべきテーマは何だったか。

①　地域の中を一度かき混ぜてみること

今まで、当り前にやってきたことをもう一度見直してみる時期が来ている。

②　他地域から新しい血を流入すること

自分達以外のものの考え方を寛容に聞き、受け入れること。講師を招き、新しい知識を学び、客観的に自分達のことを見る目を養う。

③　当事者意識を高めること

自分達の地域を良くしていくのは、そこに暮らすものをおいて他にない。自分が地域づくりとどれだけ関係を持つか。その接点を増やすのが『熟議』である。

④　交流人口の拡大をはかること

地域の定住人口を増やすことは理想だが、それは困難な課題である。別子山のことを好きになって、気にかけてくれる人を増やすことにまずは取組む。

⑤　地域のみんながまちづくりの主人公になること

自分達の持っている知恵や技術などにプライドを感じられる場を提供すること。誰もが認められ、活躍できるような仕組みをつくること。

（３）事業に取組む際に生まれた協力体制について

①　新居浜市の他地域との繋がり　　泉川まちづくり協議会

②　若者との繋がり（別子銅山関連）　　新居浜南高等学校ユネスコ部

③　行政との連携

愛媛県…愛媛県地域課題解決活動創出支援事業（新しい公共創造の提案事業）

近代化産業遺産保存事業（東予地方局の広域的観光振興事業）

新居浜市…新居浜子ども環境キャンプ

④　ボランティアグループとの繋がり　　傾聴ボランティア・民話の里すみの

⑤　芸術文化活動　歌劇「天空の町」を通じての交流　（別子銅山の植林がテーマ）

⑥　大学教授やまちづくり活動家　　従来は別子山で招聘することは皆無だった。

⑦　新居浜市内の中学校の部活動　　駅伝練習等で公民館において合宿

⑧　福島市の子ども達との交流

（４）その他特記事項

今回の事業推進にあたって**最も影響力を持ったことは、コミュニティ組織のリーダーの『志』**であった。連合自治会長に就任後、様々な取組みを行い、地域を何とかしようという思いを持ってソーシャルキャピタルを蓄積させてきたことが事業の導入を円滑にした。この地ならしの有無は意味が大きい。成功体験が徐々に蓄積されてきた。

① 県道の草刈りを地元自治会が受託して実施している。年間 80 万円ほどが支払われ、地域活動の原資となっている。

② 郷土出身者（高見知佳氏）を招いての読み語り会、コンサートなどのイベントに取組む。

③ 地域にあるエドヒガンザクラの開花期に合せ、周辺整備を行い観光客を集めた。

３．地域の現状把握（アンケート調査結果を踏まえて）

（１）アンケートに見られる地域の特色

標本数　　別子山地区全住民　１９８名

回収数　　１０１名（男４４名・女５７名）　回収率５１％

○地域に対する愛着は強い。ただし女性には愛着の薄い人もいる。

○現状の生活への満足は、男性の方に不満が強い。

○まちづくりを促進するのは情報提供。リーダー不足・財政支援を求める声もあり

○まちづくりは住民主導でという声が大きく、完璧な行政依存は少数派

○今後も別子山に住みたい人が約９割

○積極的にコミュニティ活動に関わろうとするのは４分の１、言われればが半分

○地域活動の財源は、公費と住民が一緒に負担するとするのが３分の１。しかし、自己負担を望まない層（助成金・経費不要も含む）が３分の２

（２）地域の諸要件に対する満足度

プラス要素

① 自然環境に恵まれていること

② ゴミの収集

③ 防犯や見守りなどの安心面

マイナス要素

① 医療機関

② 日常の買い物

③ 公園や緑地など

福祉サービスや交通安全なども比較的プラスイメージである。

地域コミュニティの人間関係については、想像よりもポイントが低い。地域の人間関係は濃いがゆえに、確執もある。

４．実施した事業内容

（１）事業プログラムの詳細

No.	事　業　内　容	日　時	講　師	参加人数
1	オープニング会議 当事業の目指すべきもの・手法確認	平成 23 年 7 月 15 日	社会教育主事 関　福生	17 名
2	アンケート調査票作成と実施方法 子ども環境キャンプの支援	平成 23 年 7 月 29 日	市社会教育課 社会教育主事	12 名
3	これからの地域づくりについて 熟議①地域の強みと弱みを探る	平成 23 年 10 月 3 日	愛媛大学名誉教授 讃岐　幸治	22 名
4	熟議の風土づくり　手法を学ぶ 熟議②自分達にできる地域づくり	平成 23 年 11 月 8 日	香川大学教授 清國　祐二	16 名
5	先進事例研修　島根県邑南町訪問 熟議③地域の違いと共通点を学ぶ	平成 23 年 11 月 26 日	島根県邑南町の みなさん	13 名
6	他地域との交流　福島キッズ 福島県の子ども達を地域で歓迎	平成 23 年 12 月 28 日	別子山地域住民	40 名 28 名
7	熟議から実践への橋渡し 自分達にできることの抽出作業	平成 24 年 2 月 7 日	社会教育主事 関　福生	11 名
8	子ども達の夢語り会 熟議④7 人の子ども達の本音を聞く	平成 24 年 2 月 12 日	別子山小中学校 教諭他	30 名
9	別子山の活性化方策 空き施設の効果的な活用を考える	平成 24 年 2 月 26 日	聖徳大学教授 福留　強	24 名
10	これからの別子山改造計画 花いっぱいの美しい里づくり	平成 24 年 3 月 13 日	園芸指導者 武井　道夫	18 名

★上記以外に実施した取組みとして

１．**愛媛県地域課題解決活動創出支援事業（市町モデル事業）**への企画提案（詳細別紙）

事業申請に向けての企画立案のミーティング　3 回実施

公開審査会でのプレゼンテーション

平成 24 年度事業の具体的なプランニング・関係者との協議

別子山プログラムの流れ

① 現状を知る。　全住民を対象にしたアンケート調査を実施

⇩

② 学習する。　これからの地域づくりの方向性・ノウハウを講師から学ぶ。

⇩

③ 熟議する。　その１　みんなが知恵を出し､みんなで協力して練り上げる。
その２　目指すべきビジョン・方向性を見出す。
その３　具体的な事業計画を立案する。

⇩

④ 実践する　　自分達でできることにチャレンジする。

⇩

⑤ 評価・反省　色々な立場、視点で検証する。事後アンケート調査の実施

⇩

⑥ 次のステージ新規事業へ　　熟議に戻っていく「知の循環」システム構築

（２）事業によって得られた成果は何か。

① 自分達で**何かをやってみよう**という意識の芽生え　　依存体質から**自立体質へ**
○講師からのアドバイスがモチベーションを高める。勇気を与える。
○『熟議』で自らの意見を語ることが、**責任意識**を生みだす。
○自分達の**目指すべき目標**が明確になり、どうすればよいかを考えるようになる。

② 人と人、団体と団体が結び付くようになった。　　**ネットワーク**を尊重する
○様々な場面で気軽に話し合うようになった。**雑談**が至る所で生まれる地域に
○新しい事業であっても、活動に協力してくれる人が増えた。
○若い人が集って、**新しい青年団**を組織し、何かを始めようと動き出した。

③ 旧来の枠を破って、新規事業を創造する**チャレンジ精神**が芽生えた。
○これまでは与えられたものを消化することに終始していた。物足りない
○みんなで知恵を絞って、愛媛県の公募に応じることができた。

④ 今まで見なかった人が、活動に加わってきた。　　**新規人材**の発掘
○別子山地域以外から、別子山のことを応援しようという人がやって来る。

○定住人口は増やせないが、**交流人口**は無限に増加する。
○地域、個人のプライドを持ち寄って、**自分を主人公に**できる仕掛けが大事

（３）事業を促進した要因

○　**住民の気持ちが前向き**になっていれば、**新しい事業が結び付いて**くる。
やってみようという好奇心さえあれば、チャレンジできる機会は発見可能。
（例）福島キッズ・ポルトガルのギタリスト演奏会・歌劇「天空の町」・子ども環境キャンプ
これらに取組むことによって、住民が別子山の良さを再認識できた。
今まで何の珍しさも感じず、当たり前に思っていたことが、他地域から見ると素晴らしい財産に見えることを実感した。

○　愛媛県の『新しい公共』のモデル事業に取組むことで、事業が次年度に発展する契機を得る。
『予算を獲得する』ために何が必要かを真剣に考える機会になる。
自分達で獲得したことが自信に繋がる。140 万円をどう使う。
基本戦略は「交流人口の拡大」
その戦術は　①地域の宝物を発掘し、舞台に立たせる。
②別子山応援団の結成
③一人一品運動の展開

（４）事業の中でぶつかった阻害した要因

★　地域内の**濃い人間関係**　派閥意識
★　地域内で発生した事件　　マスコミによる**マイナス報道**　イメージダウン
同時に、これを跳ね返す**反作用**も生まれつつあるので、結論はまだ先
★新たな仕事が増え、過重になるという不満
イベントが増えすぎた結果、**やらされ感**を持つ人が生まれる。

（５）今回『熟議』の運営において感じたこと

熟議①　地域のよいとこ、悪いとこ探し

○講師陣の話には他地域での成功例、失敗例がある。これだったらできるかも
○これまで見過ごしてきたことに、大きな値打ちがあることを知る。
○みんながとにかく発言する場が大事。人数はやはり 6 人がベストか。
○これまでの受け身の学習から、能動的な学習意識に変わる。全員が発言
○熟議ワークショップは、20 人程度までが限度　６人×３グループ
○子どもを会議に混ぜることは、会議の責任意識を高める。
○閉鎖された住民の中に、地域外の新しい人を組み込むことが必要

熟議②　地域の資源をどうやって活かすか。

○できるかできないかを先に論じることは止めよう。

「為せばなる、為さねばならぬ何事も、為せぬは人の為さぬなりけり」

○リスクを先に考えるのではなく、肯定的・楽観的な話し合いから入ること。

○目先のことよりも、１０年先の未来図を考えたことで、建設的な議論ができた。

○住民アンケート・熟議から導き出された柱、「自然の豊かさ」「あたたかい人情」「進取の風土」を現在の状況と対比させて話し合うことで、具体的な事業が見えてきた。

具体的には…別子銅山産業遺産群・明治期に行われた伊庭貞剛による植林
高山植物群・小規模発電所・湧水・平家ゆかりの伝統芸能・郷土料理

熟議③　新たな挑戦『愛媛県地域課題解決活動創出支援事業』への企画提案

みんなの力を結集し、新しい事業を創出する。従来はなかった試み

○地域のよきものを残そう、新たなものを生み出そうという動きが生まれる。

○公民館主事は従来、市の予算の枠を越えて予算獲得に挑むことはなかった。今回は地域の有志と共に取組む。それが、存在感・信頼感を高める。

○地域住民の地域を何とかしたいという思いが、プレゼンにおいて審査員に評価される。認められることが、次への励みになる。

○予算が確保されたことで、自分達が『熟議』で描いた目標達成に向けて、実践していく責任が生じた。そのことが新しい事業展開に結び付いている。

★その他：『熟議』によって呼び起こされた『新しい公共』に向けての取組み

○地域の様々な仕事を引き受け、コミュニティビジネスの受け皿になる企業組合を起こそうという動き…高齢者も元気で、社会に必要とされる存在になる。

○別子山の観光施設（ゆらぎの森）を花の公園に造り上げようという動き
地域内に自生している花を持ち寄って、ゆらぎの森を花が絶えない公園にする。
☛花を育て、花を愛でる人々で別子山を元気にする。

＊地元の力だけではできないので、地元以外の協力者を募り、協働で新しい地域の宝に育て上げる。

＊一年では決してできない。予算をかけて行政が造るのではなく、住民の力を結集し、地域のマイナスイメージを払拭する起爆剤に。ゴミ減量を併せて

＊現在あまり利用していない大規模な温室を有効活用して、苗を育てる。

（６）他地域との連携・交流・情報交換の成果

熟議④　他地域の有志との交流　　島根県邑南町出羽公民館

『日本一の公民館』を目指しているという心意気に刺激を受ける。

○銀山跡を活かす。別子銅山との比較対照ができる。

○『民宿』ではなく『民泊』という手法　グリーンツーリズム　新しい観光

○酒を交わしながら、初対面の人間が地域づくりについて語り合う。
☛別子山からは、若い世代が参加

○四国にはない『神楽』を邑南町の有志が別子山で上演すること。
☛相互交流へ発展する可能性　“友好公民館”

５．当事業によって導き出された新しい社会教育の手法

（１）全国各地で同様の事業を実施することの可能性

『熟議』を組み込むことによって、『知の循環型社会』構築は拍車がかかる。

“学び”→“熟議”→“実践”→“評価”→“次のサイクル”へ

一人ひとりの活動に循環サイクルが生まれ、地域づくりに循環サイクルが生まれる。
個人が豊かになるだけで終らず、熟議によって**地域が“豊か”**になる。
『熟議』は人と人を繋げ、人の心に火を点す。
『参画意識』を『当事者意識』に高めるために必要なのは、実践と小さくてもいいから成功体験を積み重ねること
別子山のような『限界集落』といわれる地域ゆえに、必要性に迫られ動こうとする住民もいる。何かのきっかけがあれば、そこに新しい風が起こる。

（２）社会教育主事の果たすべき役割

①その気にさせるマジックをかける役割。ファシリテーターとして
なぜ、今やらなければいけないか。やる気の人を見つける。その人の思いを高める。

②思いを実現に繋げる役割。　アイデアをプランに仕上げる。
どんな制度や資金があるかについて情報を収集し、それを地域に繋げる。
どうすればチャンスを活かせるか、学びの場を提供する。

③ネットワークを活かす。　人脈をいかに有効活用するか。
自分の持っているネットワークを起点に、人や組織のつながりを拡げていく。
特に、行政内部のつながりを担うのは社会教育主事の務め

④『熟議』を醸成する場を設定する。　いつでもどこでも話は始まる。
熟議に金は要らない。その場を生み出し、人を送り込むこと。
誰もが持っている自分の思いを伝えたい欲求を満たしてあげる仕掛けをつくる。

⑤役に立つ学びの手法を伝える。　　個人の充足と社会の要請のバランス感覚
自分のためになるだけではなく、誰かのためや、地域のためになることによって、承認の欲求を満たされ、さらには自己実現の欲求にステージアップすることができれば、学びの質は変化する。

６．おわりに　～『熟議』は社会教育の現状打破のための処方箋～

今回の事業を行うことによって、別子山地区の住民意識に大きな変化が生まれたと確信している。その要因は『熟議』によって、これまでは沈黙していた多数派の中から、自分の言葉で語り始めた住民が生まれたことによるところが大きい。また、これまでは点であった各人の意見が集約され、意思決定に繋がるサイクルが形成されつつあることも大きい。

確かに、別子山地区に公民館は存在し、社会教育は行われていた。しかし、地域の高

齢化の進展、人口の流出によって活動は年々低下してきていた。過去のやり方を踏襲した学級講座やイベント、個人の要望を充足するグループサークル活動は別子山の場合は皆無に近い状況であった。学習形態は講師と受講者の一方通行のものがほとんどであり、話を承ることに終始し、学習者の意見が発せられるものはなかった。

『熟議』の手法は、これまでの流れを根本的に転換するものであった。みんなが集り、そこで一定のルールの下で話し合える、議論するということはまさにこれまでのパラダイムを覆した。これまでは、話し合いといえば慣例によって無言のルールが支配するものだったからである。今回の『熟議』はみんな平等、同じ立場で老若男女が参加し、臆することなく意見を言うことができ、地域づくりの中でも自分のポジションを確認でき、自信に繋がったものと思っている。とりわけ、別子山地区のようなコミュニティが維持困難な状況にある地域にとって、依存から自立（自律）へと舵を切ることは大きな意味を持つ。自分達に何ができるのか、何はできないのかを見極め、その上で対処すべき術を見出す作業を行うことが、何よりも地域を変革する大きなエネルギーになり得ることを感じたのである。ちなみに別子山地区の人口は約 200 名、この中の 50 名が熟議をすれば地域の風土は大きく変わるのである。

今までも地域づくりに積極的、主体的に関与している住民はいた。しかし、その熱意が強ければ強いほど周りから孤立し、折角の新しいアイデアが実現するには至らなかった。その原因は、『志』を共有するための仕掛けの不足によるものと考える。『熟議』を通じて、現状認識の統一、共に学ぶことで情報を獲得し、目指すべき方向性が整えられることによって、実践における共通のベクトルを獲得できたのである。現段階では、果たして実践活動にどれだけ反映されるかは実証されていないが、既にこれまでにはなかった行動が生まれてきているのである。

自分達の思いが高まり、地域が燃え上がる状態になると求心力が働くようである。これまでは見向きもしなかった様々な公募事業や新規事業の誘いに積極的にチャレンジしようとするのである。余計な仕事は拒絶するのが当たり前だったのが、何とかやってみようと前向きになるのである。とりわけリーダーの姿勢が大きく変化したのは驚きであった。別子山で明治期に年間百万本の植林に取組んだ伊庭貞剛の事績をテーマにした歌劇、さらにその繋がりでポルトガルのギタリストのコンサート、傾聴や読み聞かせグループと地域の高齢者の交流、福島県の子ども達の受入、そして新居浜市の小中学生の受入など、様々な縁結びに積極的に地域住民が動き始めたのである。そのことで、交流することの意義をみんなが感得し、地域の活力が生まれてきたのである。人を迎え、おもてなしをするには労力が必要となるし、時間や経費も使わなければならない。しかし、その負担を越えた大きな感動を得られることを知ったことは、別子山のソーシャルキャピタルを蓄積する上で、何よりの力になるであろう。

これまで知らなかった人との出会いによって、未知の世界が見えることもあるし、全く異なる価値観があることを知ったのである。特に、自分達が努力して取組んだことが認められ、評価を得ることができれば、その達成感が次の行動を呼び起こすことを知った。これまでは与えられた予算の枠内で活動することが別子山の社会教育だったのだが、自分達で決めた目標を達成するために必要な事業をやりたい思いで、愛媛県の公募事業にチャレンジしたのである。今までにないチャレンジだった。どうせダメでもともとと

いう雰囲気で始めたが、いつの間にか何とか獲得してやるという気持ちに変わり、採択されることで大きな喜び、そして責任感が芽生えたのである。『熟議』が単なる言葉遊びに終わらないよう、その後の実践が結び付くことで、その意義を持つということを言いたい。

一つの成功体験は、次のステップに繋がる。何とかして地域を良くしようという動きが次の『熟議』を生んだのである。地域の観光施設である「ゆらぎの森」は第三セクターが経営している施設で、現在住民の関与は少ない。これまで他人ごとだった公園を、みんなの力で何とか地域の誇れる資源にしようという動きが生まれたのである。「公園には花が無いな」というある住民の声を契機に、『熟議』が始まった。「地域住民だけじゃできないから、地域外の応援団を募ろう。」、「無理にきれいな花を集めるよりも、別子山に自生する花を集めてこよう」そして 10 年を目途に、全国にも誇れる手づくりの花の名所にしようというのが現在の話し合いの地点である。決して、大きな予算を投入して業者に任せようとは思わないのである。自分達で何とかしたいという気持ちが基盤にあるのである。このような事業を継続していくことができれば、そこに人のつながりが拡がり、別子山への来訪者、支援者も増えるはずである。花にあふれた公園を舞台に、別子山の人々が主人公として活躍し、他地域の人々が喜々として戯れる姿を夢見ることができるのである。

肯定的な話ばかりを書き並べてきたが、今年度の事業期間中に別子山地域にとってマイナスとなる事象も発生した。ゴミの不法投棄が発生し、美しい自然を守ることを宝にしてきた地域にとっては致命的なダメージを受けた。普通であれば地域分裂という心配があったのですが、これが回避できそうなのは今回の『熟議』のお陰だと思っている。参加していた住民からは、何とかしてマイナスイメージを払拭しようという方向性が見えてきたのである。地域内の道路端にも花を植えよう、ゴミそのものを減量しよう、不法投棄や野焼きなどしないように啓発をしようという声が上がってきたのである。これこそが地域力だと思うのである。「自分達のまちを良くするも悪くするも、それは自分達に他ならない。」決して責任転嫁しない姿勢を持つ住民が増えていくことこそが、究極の『熟議』の目的だと考えるに至ったのである。『新しい公共』というとＮＰＯに焦点が当てられがちだが、コミュニティは昔からその力を持っていたはずである。公民館が戦後できた時には、洗練されたものではなかったかもしれないけれど、『熟議』が毎夜行われていたのである。その意味で、公民館の原点に最も近い学習形態である『熟議』の火を全国に点していきたいものである。

未定稿　文責　関福生

報　告　　「“熟議”大人と子供の夢語り」

今回の「別子山地域の希望する将来像を描く」では、別子小中学校児童生徒の皆さんと校区住民が、共に語り合い地域の将来を描けるよう、簡単な題を用意し語りあいました。

別子小中学校、児童生徒の皆さんには、事前に「別子山の未来」と題して作文を書いていただき、当日発表をお願いしました。

児童生徒の皆さんの発表の後、５つのグループに分かれ、皆さんの想いを語り合ってもらいました。

内容は次の６項目で、話し合う。

「別子山の良いところ」・・・・・・・・・・・これから世に出したい。
「別子山の悪いところ」・・・・・・・・・・・これからなおして行きたい。
「別子山にほしい施設・人物・物など」・・・地域に無いものを掘り出しそれを作り出す手立てを模索する。
「別子山に無くてはならないもの」・・・・・生活の根本を考える。
「別子山に将来住みつづけたいかどうか」・・現状での個々の意識確認。
「あなたが描く別子山の未来予想」・・・・・それぞれの想いや夢を知る。

（別紙会議録のとおり）

１０年、２０年後、まず別子山が存在するのかを考える時、学校の存続ですら危ぶまれる現状ではあるが、地域を起こす支えとなるものがなければ環境は変えられない。今出来ることをやらなければ先が見えないのは明らかであり、その為には何が必要で何をするべきなのかなど、今回の“熟議”をとおして、それぞれの地域に対する想いを改めて確認することが出来、ひとつ考えを出し合う事で、また新たな道が開け、地域力を高める事に繋がり、地域再生の一歩となることを期待するものであり、その実践結果はこれから証明されるとものと思います。

別子小中学校児童生徒が希望する別子山の将来像≪作文簡略記入≫		
学年	氏名	内　　容
小 4 年	伊藤美紀	「私の夢の別子山」 　昔、銅山で発展した別子山は現在、人口 200 人児童生徒 7 名になりました。私は、別子山を世界自然遺産か文化遺産にして、有名になり観光客にたくさん来てもらいたいです。 　植物などの自然を大切にしながら、有名になればいいと思います。
小 6 年	吉野晃晴	「別子山の未来」 　僕は、別子銅山が世界遺産になって有名になり、観光客がたくさん来て有名になっていればいいと思います。ゴミで汚さないよう自然を大切にしてほしい。 　お店や施設がほとんどないので、病院や大きなお店ができるように発展してほしいです。
中 2 年	筒井　駿	将来もっと観光客が来て、今よりも賑わっていてほしいです。 　そのために、道路の整備や施設などの充実をすればいいと思います。 　冬に観光客が来ないので、道路の除雪や凍結防止に力をいれてほしいです。 　自然があまり減らないよう気をつけながら新しいものを作って発展してほしいです。
中 2 年	高橋悠馬	別子山は将来、お年寄りが増えて、移住してくる人は少なくなると思うので、いいところをアピールして、観光客が来るようにすれば賑やかになると思う。 　自然を活かした行事をもっと増やすと良いと思います。 　観光に力を入れて若い人が遊びにきやすい場所にしてほしいです。
中 2 年	秋山明泉	将来、観光客がたくさん来てくれるようになってほしいです。 　観光目的になるものが少ないので心配だし、施設の定休日の徹底をしてお客さんに信用してもらえるようにすることも大事だと思います。 　地域の人たちが協力し、助け合って絆を深めて発展してほしいです。
中 3 年	北田佳子	「別子山の未来」 　今の別子山は不便だと感じています。 　病院やスーパーがあれば便利になると思います。しかし、自然をなくすことにつながるかもしれないので、必要な施設だけをつくり、山や緑は大切に守っていけたらいいと思います。
中 3 年	吉野晴香	「私の思い描く別子山」 　一番心配していることは人口の減少です。 　人口が増えて学校も無くなることがない、賑やかな別子山がいいです。 　スーパーができて、便利で働く所も増えるといいと思います。 　観光施設を作って別子山をもっと知ってもらえるといいです。

ふるさとの未来予想図プロジェクト事業

“熟議”大人と子供の夢語りワークショップ記録

平成２４年２月１２日実施

参加者　２５名

（児童・生徒・教員・保護者・校区住民）

題	意　　見
別子山の良いところ	自然豊か（空気、水、星） 産業遺産がある。 地域の助けあいがある。 子供たちが素直（小中学校が一緒で家庭的） 季節を随所で感じることができる。（匂い、空気、雪） 野菜や季節の食物がおいしい（松茸、山菜、栗など） 学校・行政・地域の連携がある。（行事など）
別子山の悪いところ	交通の便が悪いし、道路状況も悪い（路面凍結など） 施設が少ない。（お店・観光施設・医療機関） 子供や若者が少ない。 就業場所が少ないので永住が困難 雪が中途半端で活かしきれない。
別子山にほしい施設・人材・物など	病院・介護施設・スーパー・企業 金融機関 学校 温泉 外部から永住してくれる人（子供のいる人若い人） 交通手段（トンネルで道路状況改善） お土産
別子山に無くてはならないもの	学校 金融機関 病院・介護施設 バス・タクシー 人の力 自然・産業遺産 お土産になる物 職場（企業など）
別子山に将来住み続けたいかどうか	仕事や交通手段など住める環境であれば住み続けたい。

あなたが描く別子山の未来予想	温泉がでて仕事があり、人が増えて賑やかになる。 学校が存続できるよう人口が増える。 産業遺産に力を入れて人が増えるようにする。 子供が胸を張って「別子山」と言えるような故郷にする。 企業の誘致で活性化する。
その他	キャビンを利用した短期滞在制度 民泊体験 気軽に生活を体験できるシステム 別子山の情報を広く発信して興味を持ってもらう。

報　告　　島根県邑南町との交流研修会

日	場　　所	時　　間	内　　容	記　　録
２６	出羽公民館	１３：３０～ １５：３０	情報交換会 　第１部	別紙①会議録のとうり
	町内視察	１５：３０～ １７：００	瑞穂ハンザケ自然館 道の駅瑞穂	オオサンショウウオを邑南町内ではハンザケと呼んでおり、その生態を学習するハンザケ自然館を視察した。 　大きなものは１mを超えており、その不思議な生態を観察できる施設でした。 　道の駅「瑞穂」では、地域内でとれた野菜など特産品が格安の値段で販売されており、また誰が生産したのか出品者がわかるよう工夫されており、年間一億円以上の売り上げがあり、黒字経営が続いており、販売体制も整った環境でした。

日	場　　所	時　　間	内　　容	記　　録
２７	邑南町内	８：３０～ １２：００	久喜大林銀山跡視察 久喜林間学舎視察	この銀山跡については、２００を超す間歩群、２４の精錬所跡、からみ原、レンガ造りの煙道跡と、遺跡を自由に散策する事が出来、坑道（間歩）が至る所に点在している。 　その間歩をたどるコースも充実しており、世界遺産に登録されている石見銀山と遜色の無い素晴らしい遺跡群でした。 　また、久喜林間学舎で行う、合宿や研修生の受け入れは、閉校となった学校を利用したもので、現状の施設を錆びつかせるのではなく有効利用するなど取り組みの幅を感じるものでした。

この視察研修をとおして

今回の視察研修は、ふるさとの未来予想図プロジクト事業と言う事で、10年、20年後の未来を今一人ひとりが考え気持ちを出し合い、その中から課題を見つけその課題を解消していくための一環として行われたものではありますが、出羽町の取り組みの素晴らしさは、組織すべてをオープンにしていることと、みんなで考える体制づくりであり

「出羽、その課題と夢。」の冊子中にもある通り

地域は人と人の絆で出来ている。農業者である前に。商店主である前に。
事業主である前に。サラリーマンである前に。主婦である前に。学生である前に。
みんなひとりの出羽人、みんなが地域の宝です。
みんながしっかりつながって力を合わせて、共に生きている。
一緒になってつくる。それがみんなの出羽、20年後
「いい町だね」そう言える事を願って・・・

この言葉が表すように、地域づくりに必要なものは、人づくりであり、まちづくりには人と人の絆が必要であり、誰もがお互いを尊重し、共に助け合い協力して、世代を越えて支え合う事等、地域住民が一つになり課題に立ち向かう事の大切さを表している。

地域の課題は、出羽町も別子山も同じで、地域課題は現実を直視し、今何が足りないか何が必要なのか、一人ひとりの想いを出し合い、その課題をみんなが一つになり解消していくこの取り組みが、出羽と別子山の違いであり、別子山にとって以前から見えていた課題解決を、先延ばしにしてきたことにより、今地域が一つになっていないのが現況である。

別子山では、今前を見るしかない状況であるので、ひとつひとつの取り組みが、またひとつのステップアップに繋がると思います。

また、出羽町の取り組みの中で注目したいのは、「民泊体験、田舎ツーリズムを展開している。民泊で広島方面からやってきている。自分たちの生活は珍しくもないが喜んで帰っていく。民泊は体験料金しか取れない。」

民泊により、地域の衣食住、暮らしを体験してもらい、地域の根本を知ってもらう。

この事で住民の暮らしを有意義にし、またＩターンＵターンの足掛かりとし定住促進に繋げる。

出羽町のこの取組みについて、別子山でも出来ない事ではなく、かざりの無い地域の独特の暮らしを知ってもらう事が大事であり、この様な事が地域住民のやる気につながるものと思われる。

この研修によって得たものは、出羽町の組織体制づくりや取り組みの良さであり、別子山の今後のまちづくりへの取り組みに大変参考となるものでした。

別紙①

島根県邑智郡邑南町出羽公民館での交流会記録

平成 23 年 11 月 26 日
午後 13：30~

森岡課長（邑南町教育委員会生涯学習課　課長）
　一度非公式にでも別子山に行ってみたい。日本一の公民館を目指すうえで協力してゆきたい。

和田連合自治会長（別子校区連合自治会長）
　どういった動きをして石見銀山が産業世界遺産登録されたのか？

森岡課長
　大森のみが産業遺産登録であり、邑南地区は該当していない。

吉川館長（邑南町公民館連絡協議会　会長・田所公民館　館長）
　景観が重視されるが、邑南地区の遺産の方が歴史的に面白い。一番重要なのは地域住民の思いや子供たちへの周知が大切である。別子山地域には面白い遺産が多いのでは？
　Ｉターン人材は大切である。北野さんはＩターンらしいが、経緯を教えていただきたい。

北野（別子木材センター　社員）
　いろいろ自分でやってみたいから別子山に来た。

筒井（別子木材センター　工場長）
　北野君は別子山に魅力を感じて来てくれた。その事実は大事。

荒井（別子山中部自治会員）
　山で出来ることを探しいろいろと勉強して別子山に戻ってきた。山歩きを出来ない人々に木や山の素晴らしさを知ってほしい。そのために人材育成は不可欠である。人材育成について教えて頂きたい。

森岡課長
　教育の観点からよい隣人として育成いてゆきたい。世界のどこでも生活できる人材を育成してゆきたい。今までもやってきたが、大変難しい問題である。
　昨今、Ｂ級グルメが全国各地で話題になっているが、邑南ではＡ級グルメの町造りに取り組みたい。しっかりと勉強と修練した人間が帰ってきたくなる町造りを進めたい。

荒井
　低価格で宿泊できる施設がほしいので自分でやってみたい。が、人材がいない。人手不足でどうしようもない。

森脇会長（久喜大林銀山保全委員会　会長）

田舎ツーリズムを展開している。民泊で広島方面からやってきている。自分たちの生活は珍しくもないが喜んで帰っていく。民泊は体験料金しか取れない。

能美課長補佐（邑南町教育委員会生涯学習課　課長補佐）

明日の昼に行く店は民泊でUターンの人がやっている。

森岡課長

夢づくりプランだが、立候補自治会単位に補助金 10 万を渡し１年かけて計画してもらう。マスタープランを作成するにあたり、小学生からお年寄りまでアンケートをとっている。地域からでた声を形にするための事業費を補助している。３年でワンクール。マスタープランの審査が通れば５年間地域マネージャーを採用し、事業費の半分は補助している。その５年間で事業化し、ゆくゆくは法人化を目指している。

吉川館長

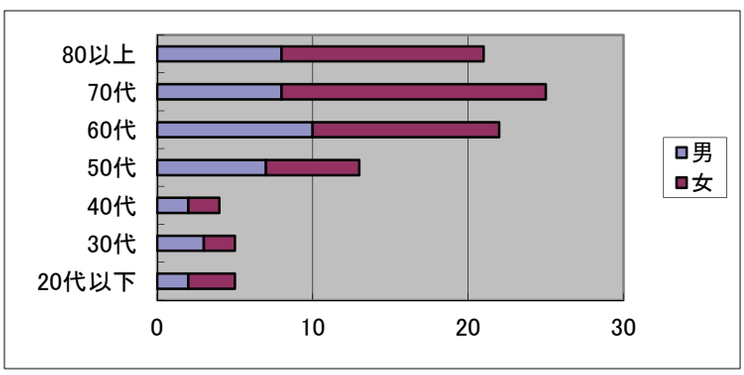
荒井さんが言っていた植林プランはいいと思う。人に植えてもらうのはいい考えではないのか？何十年後でも自分が植えたことは覚えているという。そうやって少しでも関わりを繋げておくことは大切だと考える。

以上

別子山まちづくりアンケート調査結果報告書

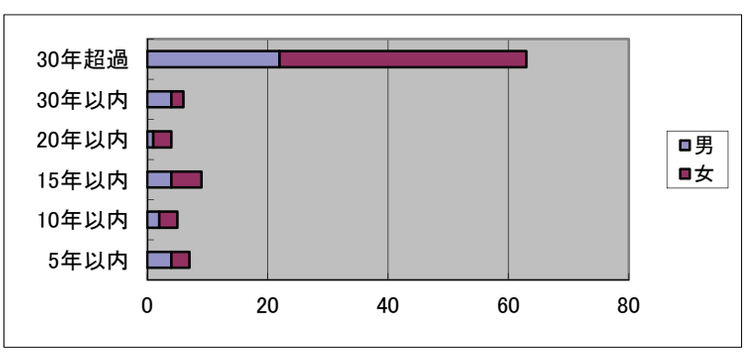
調査実施期間　平成23年10月1日～31日
調査対象者　別子山地区全住民　198名
調査票回収数　101名（男44名・女57名）回収率　51%

基礎情報1　あなたの年齢は



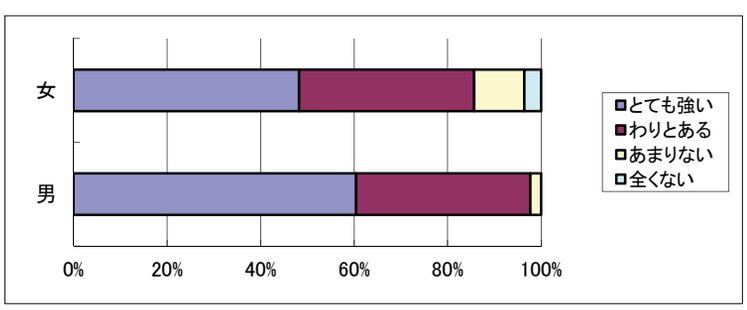
	20代以下	30代	40代	50代	60代	70代	80以上	合計
男	2	3	2	7	10	8	8	40
女	3	2	2	6	12	17	13	55
合計	5	5	4	13	22	25	21	95

基礎情報2　あなたの居住年数は



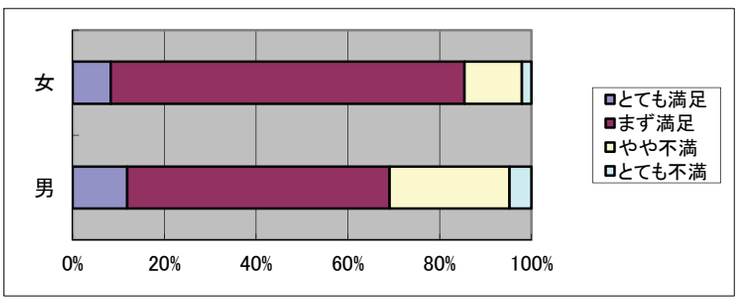
	5年以内	10年以内	15年以内	20年以内	30年以内	30年超過	合計
男	4	2	4	1	4	22	37
女	3	3	5	3	2	41	57
合計	7	5	9	4	6	63	94

問1　別子山を「自分のまち」として、どのくらい愛着を感じてますか。



	とても強い	わりとある	あまりない	全くない	合計
男	26	16	1	0	43
女	27	21	6	2	56
合計	53	37	7	2	99

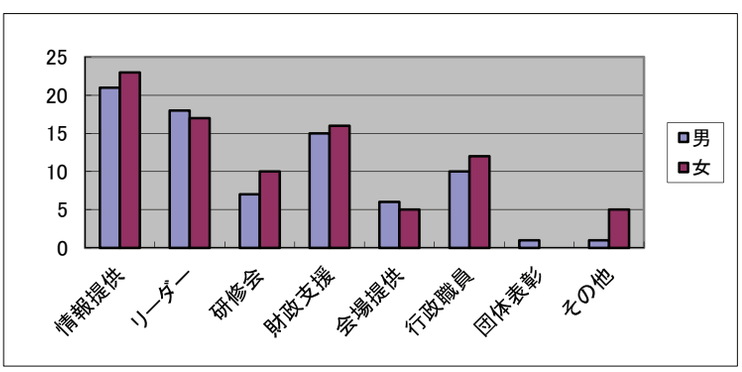
問2　現在の生活に満足していますか。



満足度

	とても満足	まず満足	やや不満	とても不満	合計
男	5	24	11	2	42
女	4	37	6	1	48
合計	9	61	17	3	90

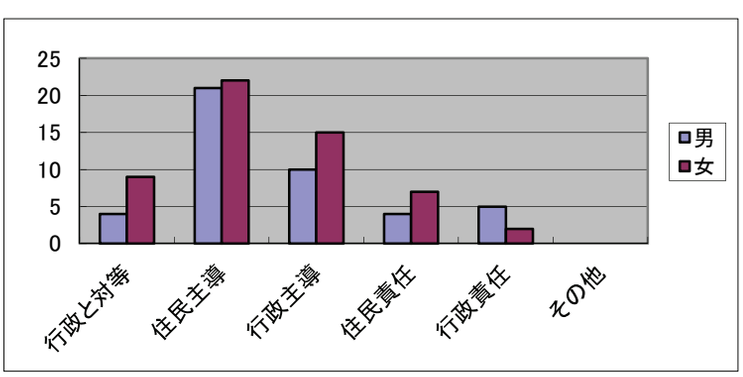
問3　まちづくり活動の促進には何が重要と考えますか。



まちづくり促進要因

	情報提供	リーダー	研修会	財政支援	会場提供	行政職員	団体表彰	その他	合計
男	21	18	7	15	6	10	1	1	78
女	23	17	10	16	5	12	0	5	83
合計	44	35	17	31	11	22	1	6	161

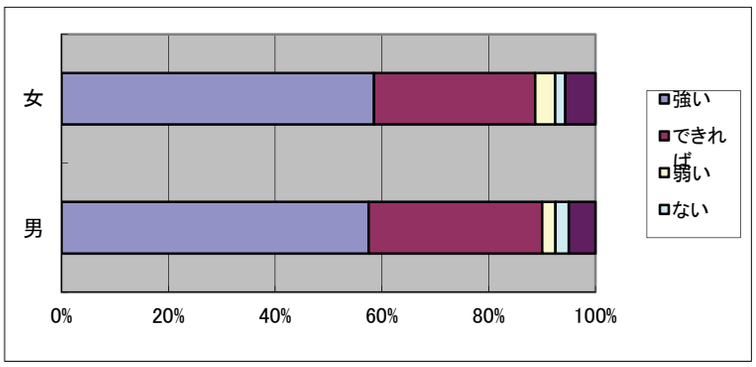
問4　あなたが思う望ましいまちづくりの進め方は。



まちづくり主体

	行政と対等	住民主導	行政主導	住民責任	行政責任	その他	合計
男	4	21	10	4	5	0	44
女	9	22	15	7	2	0	55
合計	13	43	25	11	7	0	99

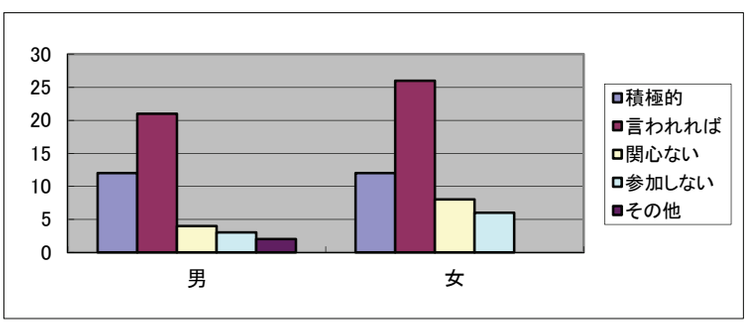
問5　あなたはこれからも別子山に住み続けたいか。



永住希望

	強い	できれば	弱い	ない	不明	合計
男	23	13	1	1	2	40
女	31	16	2	1	3	53
合計	54	29	3	2	5	93

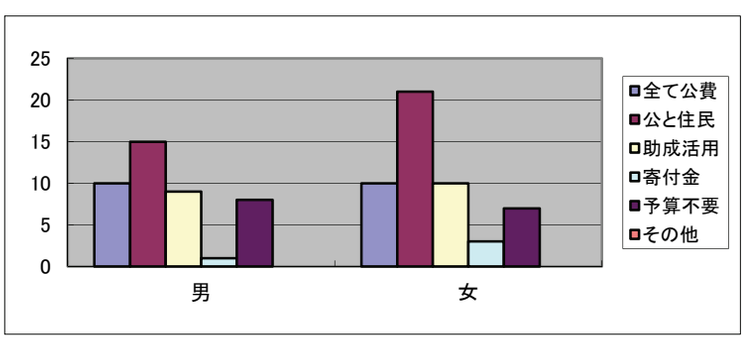
問6　別子山のコミュニティ活動やボランティア活動をどう思うか。



活動への関与

	積極的	言われれば	関心ない	参加しない	その他	合計
男	12	21	4	3	2	42
女	12	26	8	6	0	52
合計	24	47	12	9	2	94

問7　地域活動を進めるための財源確保の方法は。



地域活動財源

	全て公費	公と住民	助成活用	寄付金	予算不要	その他	合計
男	10	15	9	1	8	0	43
女	10	21	10	3	7	0	51
合計	20	36	19	4	15	0	94

第3章

社会教育による地域の
教育力強化プロジェクト実証的共同研究

会津坂下町（金上地区）における『熟議』の取組み

～金上地区地域づくり協議会事業の
一環として～

研究実績報告書

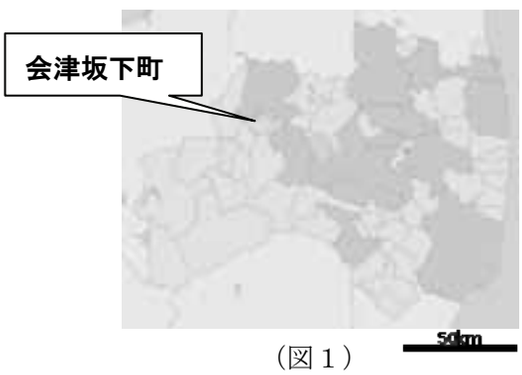
１．地域の概要

（１）会津坂下町の概要

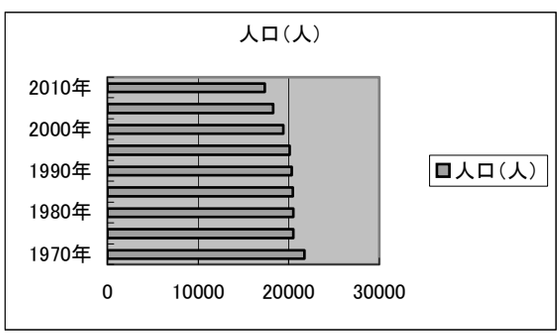
福島県の会津地方（県の西部）に属し、会津若松市と喜多方市に隣接している（図１）。1995 年（昭和 30 年）に、坂下町・若宮村・金上村・広瀬村・川西村・八幡村が合併して、会津坂下町となる。また、1960 年（昭和 35 年）には、高郷村の高寺・片門・東松地区を編入し、現在の形となる。

人口は、1970 年から 1990 年にかけては、20,000 人を上回っていたものの、2012 年１月現在では 17,166 人となり、減少の一途をたどっている。（図２）

高齢化率は、2010 年５月現在で、30.3%。主な産業は農業で特に米作りが主である。



（図１）



（図２）

（２） 金上地区の概要

金上地区は、阿賀川と鶴沼川の清らかな流れに囲まれており、その肥沃な土地では稲作を中心に花卉栽培や食用牛の飼育などがさかんで、東に磐梯山、北に飯豊山を望む美しい田園風景が広がる豊かな農業地帯です。

地区内を国道 49 号線や主要県道会津坂下・本郷線が通り、磐越自動車道新鶴ＰＡスマートＩＣにもアクセスが容易な交通の要衝であり、特に国道沿いは比較的大規模な店舗が並び、新たな商業地域としても発展している。

また、鶴沼球場や町民プールなどスポーツ関連の公共施設があり、スポーツに親しむ人々や公園でふれあうおやこ連れなどで賑わっている。

毎年１０月には地域と学校が連携し「いなほ祭り」を開催するなど、金上公民館を中心として地域づくりの取り組みが少しずつ進められている。

（３）会津坂下町の公民館の変遷

会津坂下町には、中央公民館と７つの地区公民館（旧小学校区ごと）が設置され、地区公民館には、平成１５年度までは行政職員の主事と非常勤特別職の館長、６名の運営委員で公民館を運営していた。

平成 16 年度より、行政職員の主事を引き上げ、民間採用のＮＰＯ職員（生涯学習推進員）を配置し、２０名の運営委員で公民館事業を実施している。事業費は、町の予算で、町と運営委員会が委託契約を結んでいる。

平成21年度には、町が「地区公民館のコミュニティセンター化構想」を打ち出し、各公民館単位で「地域づくり協議会」を立ち上げる。また、町の第５次振興計画策定にあたり、地域ごとの振興計画作りを各地域づくり協議会で取り組むよう依頼があり、ワークショップ、熟議を重ねながら、平成22年10月に各協議会ごとに「地域づくり計画」（資料１）を策定し、町の振興計画に加えられる。

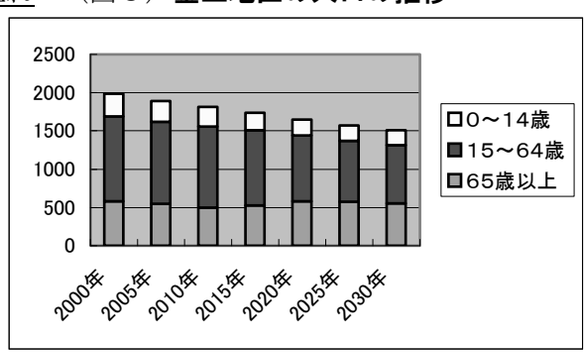
そして、平成２３年から24年度にかけては、平成２５年度４月からの地区公民館のコミュニティセンターへの移行に向けての準備が行われている。

２．当事業を取り組むに至った経緯

（１）現在抱えている地域（公民館）の課題

① 人口減少・少子高齢化、若者の地元離れ　（図３）**金上地区の人口の推移**

会津坂下町全体の問題、ひいては農村地帯の共通する問題であるが、若者の定住が少なく、少子高齢化が進んでいるため（図３）、活動する人が固定化され、人のつながりも希薄化しつつある。



② 小学校・幼稚園の統廃合（平成25年４月より）

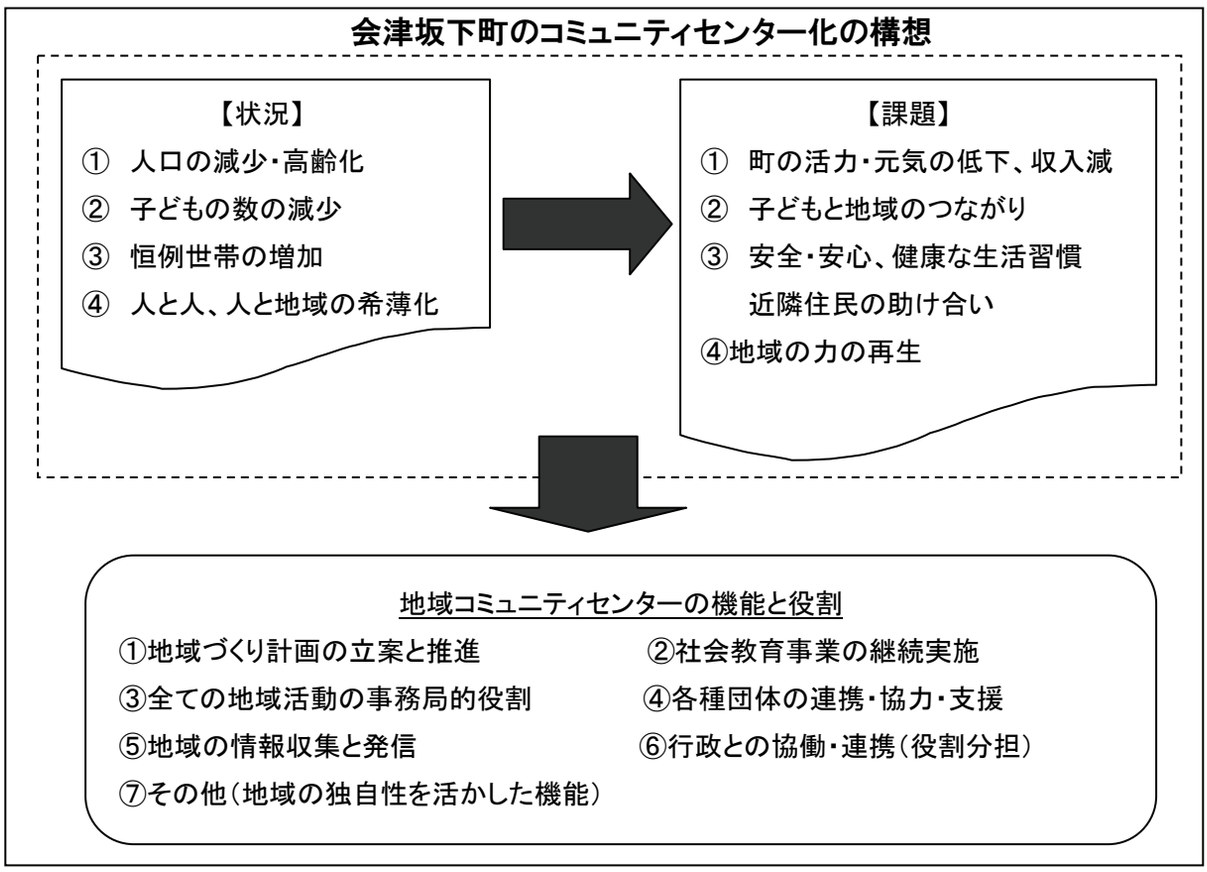
平成23年度現在の金上小学校の児童数は112名であるが、今後の少子化による児童数減少の懸念と町の教育施設適正配置委員会の方針（この人口では、小学校２つが適正との判断）により、平成25年４月より小学校は新しい小学校に統合される。

これまで、地域の象徴である小学校を中心にすえ、‘地域の子どもは地域で育てる’を合言葉に、学校と連携した公民館事業を実施してきただけに、統合の影響は計り知れないものがあるが、今後子どもたちとの関わりをどうするかが大きな課題となっている。

③ 公民館からコミュニティセンターへの移行（平成25年４月より）

町は、社会情勢の変化に伴い、地域課題を解決するためにも地域内が連携し、多様な支えあいの地域づくりの必要性が生じ、公民館がこれまで担ってきた社会教育的な役割に加え、地域の縦割りに横串を入れたり、行政区との連携強化などを図るため、コミュニティセンターへの移行を打ち出した。

しかし、範囲が広がり、教育委員会の管轄を離れることにより、今まで公民館で行なってきた社会教育がこれまでどおり継続されるのかが懸念される。また、住民の地域づくりへの共通理解を図り、地域の「拠り所」「活動の拠点」となるための新たな組織づくりが必要となってくる。



（２）事業の重点的なテーマ

①地域住民の‘新たな集う場づくり’‘新たな絆づくり’

地域住民に改めて地域づくりに関心をもってもらい、地域に愛着をもってもらうためのしかけづくりをする。

②コミュニティセンター化へ向けての、新たな組織づくり

地域住民とコミュニティセンターについての共通認識をもち、それぞれの団体の活動を把握し、共通理解のもと行動できるような組織づくりを模索する。

（３）事業に取り組む際の協力体制について

① 福島大学行政政策学類「社会教育課題研究」Ａ，Ｂチーム
② 会津坂下町教育委員会、政策企画班
③ ＮＰＯ法人ＮＩＶＯ
④ 香川県高松市三谷コミュニティセンター
⑤ 山形県川西町小松地区コミュニティ協議会
⑥ 山形県西川町水沢地区

３．地域の現状把握（アンケート調査結果を踏まえて）

（１）アンケートに見られる地域の特色

配布数　：　全世帯 481 軒、一世帯２名計 962 名

回収数　：　500 名　（男性 242 名、女性 257 名　無回答１名）

世帯回収率　：　57.4％

① 一世帯２名、別の年代・性別での回答を依頼したところ、50 代以上が回答者の 72.2％をしめていた。

② 親と未婚の子の世帯は 16.2％とまだ核家族化が進んでおらず､三世帯家族が 30.2％と高い数値をしめしている。しかし、1 人暮らしと夫婦世帯を会わせると、全体の 19.2％となる。

③ 公民館事業に参加したことのある人は 60％弱で高い比率を示しているが、反面平成 16 年度より公民館の体制が変わったことを知らない人も半分以上いる。

④ 地域に対する愛着は強く､「ずっと住み続けたい」「どちらかといえば住み続けたい」を合わせると、80％を越える。

⑤ 「地域づくりで大切なこと」の問いでは、「情報の提供」という回答が一番多かった。

⑥ 地域活動の財源としては、「公費と住民の負担」が一番多く 31.8％であるが、公費のみというのも 23.4％と高い。

⑦ 「コミュニティ活動への参加」についての問いでは、「自ら進んで」と「はたらきかけがあれば参加」を合わせると 218 人（全体の 43.6％）いる。

（２）各設問の結果と解説（資料２）

４．実施した事業内容

（１）事業プログラムの詳細

月　日	内　　容	特記事項
平成 23 年 7 月 9 日	○金上地区地域づくり協議会本年度重点事業 『金上さなぶり祭り』の実施 目的：地域住民が世代を越えて集い、ふれあい、それぞれの趣味や特技を披露する場を設け、交流を図りながら、自己実現を図る場とする。 内容：子どもと高齢者のふれあい会、だがしや楽校 フリーマーケット、農産物直売、縁日	場所：金上小学校 校庭・体育館
9 月 4 日 ～6 日	○福島大学行政政策学類『社会教育課題研究』調査 内容：A，B チームが、公民館事業内容や地域活動について、館長、運営委員、ボランティア、事業参加者、保護者などから聞き取り調査を実施。	場所：金上公民館

9 月 22 日	○金上地区地域づくり協議会事業 『山形県川西町コミュニティ協議会』訪問研修 内容：川西町として方針・取り組み 協議会の組織体制・事業内容・予算などについて	参加人数：5 名
11 月 5 日	★社会教育による地域の教育力強化プロジェクト事業 関　福生氏（新居浜市社会教育課長）来町 内容：会津坂下町、金上地区の現状と課題について	場所：金上公民館 出席者：蓮沼館長 佐藤
11 月 27 日	○金上公民館・坂下公民館合同運営委員研修 『山形県西川町水沢地区』訪問研修 内容：『いきいきかあちゃん食堂』の体験、懇談。地域活性化の模範となる事業として研修	参加人数：５名
11 月	★社会教育による地域の教育力強化プロジェクト事業 『将来の金上地区、地域づくりの住民調査』アンケート実施 対象：金上地区全戸 481 戸、一世帯２名 作成・分析：福島大学行政政策学類「社会教育調査研究Ａチーム」 方法：区長さんによる配布・回収	
12 月 5 日	★社会教育による地域の教育力強化プロジェクト事業 講演会『地域コミュニティがまちをこう変える』 講師：香川県高松市三谷コミュニティセンター長 溝渕　雅子　氏 対象：各地区地域づくり協議会員、公民館運営委員、町職員、一般町民 共催・協力：町政策企画班、教育委員会、ＮＰＯ法人ＮＩＶＯ，町男女共同参画推進会議	場所：会津坂下町 中央公民館 出席者：80 名
平成 24 年 2 月 23 日	★社会教育による地域の教育力強化プロジェクト事業 『金上地区各種団体代表者』による熟議 参加者：区長会、防犯協会、消防団、民生児童委員、老人クラブ、交通安全協会、青少年育成会、子ども見守り隊、金上小学校ＰＴＡ、金上幼稚園保護者会、坂下一中保護者会、金上スポーツ少年団保護者会、保健推進員、公民館運営委員会、地域づくり協議会の代表、町政策企画班	場所：金上公民館 出席者：23 名

	内容：・コミュニティセンター化構想の説明（町担当者） ・熟議	
3月15日	★社会教育による地域の教育力強化プロジェクト事業 『熟議で金上の未来を考える』の実施 講師、報告者：福島大学行政政策学類 教授　千葉　悦子　氏 「社会教育調査研究」Ａチーム３名 対象：各種団体代表、新年度地域づくり協議会員、一般地区民 内容：・福大生による地区民アンケート結果・検証報告と金上地区への提言 ・グループに分かれて、「未来の金上地区のために、まず何から始めるか」について、熟議。	場所：金上小学校 出席者：43名

（２）事業によって得られた成果

① 地域の各種団体との連携の広がり

今までの公民館の中では、運営委員、講座の受講生、公民館利用の団体・サークルぐらいしとしたつながりが持てなかったが、『金上さなぶり祭』やコミュニティセンター化構想の説明の段階で、いままで公民館と連携の少なかった団体とつながることができた。

②第三者の目から見た、新たな金上を発見

福島大学行政政策学類の「社会教育調査研究」による住民への聞き取り調査や、住民アンケートの集計と冷静な分析により、今まで見えなかった金上地区が見えてきた。

例えば、金上地区は会津若松市に近いからか勤め人が多く、町内でも農村特有の人間関係がいち早く薄れ、婦人会や青年団などの解散は早い方だったので、もっと個人主義で地域に愛着を持っている人が少ないと思っていた。しかし、アンケート結果から思った以上に住み続けたいという人が多く、地域活動にも関わりたいという人が多いことがわかった。地域活動においては、いつも同じ顔ぶれだと嘆いていたが、発掘していないだけなのだと思った。思いのある人を引き出す工夫が必要だと感じた。

また、福島大学生による住民への聞き取り調査の実施と検証により、公民館事業に携わった方々の意識や想いを知ることができた。

これをきっかけに、次年度以降も協力体制を継続していくことになった。

④地域（県）を越えたネットワークの構築

県内、近隣市町村には、公民館が中心となって地域づくりと進めているところがあまりない。未だに、講座をやっていればいい、という公民館が多いため、参考にしたり、情報交換をするところがない。今回、このプロジェクトに取り組んだことで、先進地の情報を得たり、刺激を受けたりと地域づくりへの意欲が高まった。

（３）事業を促進した要因・阻害した要因

「事業を促進した要因」というのは思い当たらない。というのは、今の金上地区における地域づくりの一連の活動は、町の方針があったからで、町の‘押し付け感’が強いからである。本来であれば、地域住民が地域の課題に気づき、これを解決していくためにはどうしたらよいか？というところから始まるのが地域活動であると思う。それが、金上地区および坂下町の他の地区も同様に、「町でやれっていうから」「他の地区もやってるから、うちだけやらないわけにはいかない」という感覚がある。どうも当事者意識が弱いのである。

（４）熟議の成果について

熟議①金上地区各種団体代表者会議～コミュニティセンターとは？～

○町担当者の「なぜ、今コミュニティセンターなのか？」「コミュニティセンターのメリットは？」との説明の後に熟議を実施。

○市町村も統合が進み、グローバル化している中で、昔ながらの地域に縛られるのは時代遅れではないか？いつまでも、金上地区だとか若宮地区だとか言っているのは違和感がある。

○今回の東日本大震災で、地域コミュニティの絆が見直されている。日頃から地域の絆が築かれていたところほど犠牲者も少なく、被災後の生活もスムーズにいっていたようだ。

○何だか、役場の仕事を押し付けられている気がする。

○小学校統合後の校舎の利用を真剣に考えなくてはならない。できれば、そこをコミュニティセンターにしてはどうか？

○コミュニティセンターだと、コミュニティビジネスもできると聞いた。少しでも就業の場所が増えるといいと思う。

○地域の人は、公民館からコミュニティセンターに変わっても気づかない人が多いような気がする。名前はどうであれ、地域の人に必要とされる施設になってほしい。

熟議②熟議で金上の未来を考える～未来の金上のために、まずここから始めよう～

○跡継ぎがいないため、空き家が多くなっている。防犯のためにも、何らかの対策が必要だ。

○中高年の女性が元気である。女性が住みやすいところは人が集まる。

○地域外との交流をもっと増やしたらいい。ヨーロッパのコンパクトシティなどを参考にし、週末は田舎暮らしをしたいという人をもっと呼び込めばいい。

○若い人同士の交流が減っている。青年団がなくなってきている。ある地区は、若い人たちが村のことを考えて祭りを復活させた。

○お茶のみ文化はすばらしい。気軽にお茶が飲める場所が大事。

○集えるスペースがあったら、地域の人と関われる。

○三世帯同居より、二世帯別居・スープのさめない距離の方が若い人は好み、地元に残るのでは？そうすれば、おのずと子どもの数も増える。

○これから、どのようにコミュニティを作り上げていくか、もっともっと話し合いの機会が必要である。子どもの意見も必要と感じる。

（5）他地域との連携・交流・情報交換の成果

① 山形県川西町小松地区コミュニティ協議会

○人口も、地区の数もほとんど同じで、会津坂下町のコミュニティセンター化はこの町を参考にしている。わが町との大きな違いは、地域づくりを担当する「まちづくり課」があるというところ。わが町は現在、首長部局の政策企画班と教育委員会の生涯学習班がどっちつかずに担当している。早く、専門の部局を作ってほしい。

○公民館からコミュニティセンターに移行するにあたって、地域への説明会などをかなり回数を重ねたようだ。わが町では平成 25 年度に移行を予定しているが、それにこだわらず、住民の理解が得られなかったら先延ばしにするくらいでいいと思う。また、7 地区足並みをそろえなくても、できるところから移行していく位の寛容さがあってもいいと思った。

② 山形県西川町水沢地区「いきいきかあちゃん食堂」

○ まさに、元気な中高年女性が地域を活性化させている例である。

○ 日頃食べているものが、他地区の人にとってはご馳走である。地域の特産物、自然を生かしたもてなしかたがすばらしかった。やはり、女性が元気な地域は活気があると感じた。

③ 香川県高松市三谷コミュニティセンター

○地域にある団体を一度白紙に戻し、予算もひとつの財布に入れて、新たな地域組織を再編した地域。それは、押し付けではなく、活動していく中でこれが一番やりやすかったから、という答えが返ってきた。しがらみや慣習にとらわれない感覚が必要だと感じた。

○ 「自分たちがやってて楽しいと思うことしかやらない」ということば。地域づくりは苦痛をともなう暗い物であってはいけないと思った。まず、やっている

人たちが楽しそうだと地域の人たちもついてくるのでは、と感じた。

○ やはりここでも女性のアイディアが光った。いろいろな年代の女性が地域活動に関われる工夫が見られた。

④‘会津の冬’子ども交流事業

○ だがしや楽校への取り組みで交流する機会のあった西東京市と横浜市の子どもたちが１月にわが町にやってきて、金上地区の子どもたちと交流するとともに、町の伝統的なお祭りに参加したり、そば打ち体験をしたり、雪遊び体験などをした。そして、春休みには金上の子どもたちが横浜に出かけ、５月の連休には西東京市の団体が震災直後から支援していたいわき市の子どもたちが農業体験にやってくる予定である。

他地域の人を受け入れることによって、新たに地域の良さを発見し、また金上地区を第２のふるさとのように感じてくれる人が全国に増えることで、交流人口が増え、地域の活性化につながることを期待している。

５．当事業によって導きだされた新しい社会教育の手法

（１）全国各地で同様の事業を実施することの可能性

○最重要テーマである『熟議』を存分にできたかというと、思ったより時間がとれなかった、というのが反省点である。３月の熟議を終えた段階で、地域住民からやや消化不良のような感想があがり、またこのような機会を作ってほしい、という声があった。こちらが思っている以上に、住民は情報交換をする場、思いをぶちまける場を望んでいることがわかった。これからは、特定の人物だけでなく、様々な人たちと熟議を行なっていくことの必要性を感じ、その積み重ねで住民の意識改革がなされるのではないか、と思った。

○アンケートを地域全世帯に行なうことができたのは、たいへん意義があった。今まで町のアンケートなどはランダムに抽出した人に送りつけ、返信用封筒で返すというやり方を実施していたが、それでは絶対回収率があがらず、せっかく行なってもあまり参考になる結果は出ないと考えた。そこで、１４行政区の区長に集まってもらい、このアンケートの主旨を説明したうえで、全世帯に手配りをしてもらい、区長が回収するという方法をとった。そうしたことが、世帯回収率 57.4%という数字になったと思う。また、記述式のところに様々なことが書き込まれていることからも、思った以上の地域住民の意識の高さを感じた。

○以上のことから、事務局サイドは「どうせ金上の地域住民はあまり関心がないだろう」という先入観を脱却し、地域住民をもっと引き出す工夫をし、住民の可能性を信じることが大事だと感じた。

（２）今の社会教育に必要とされるものは何か。

①“集い、学び、語りあう”場づくり

これまで公民館では、運営委員が中心になって地域の人が興味関心を持つ講座、人がたくさん集まる講座を企画し実施してきたが、その講座を成しえたことで満足して終わっていた。今度は、そのせっかく集った住民たちが語り合う時間をつくり、講座にとどまらず、地域のこと、社会問題などを語り合っていくようにすれば、単なるカルチャースクールではなく、公民館で行なう社会教育事業として意味があるのではないだろうか。

②“地域の人材発掘”そして引っ張り出す工夫

地域の会合などで「何だが、いつも同じ顔ぶれだよね。」というのが口癖になっていた。しかし、今回のアンケートで地域に想いを持っている人がこんなにいるんだということがわかり、事務局側は少し地域住民を過少評価していたようだ。次は、その人たちをどのようにして引っ張り出すか。まずは公民館事業、ボランティアなどに参加してもらい、人との交流の楽しさ、自分が役に立つことの達成感、充実感を味わうようなしかけを作ることが大切ではないだろうか。

④ コーディネーターの育成

人材発掘も人材育成もコーディネーターがいて初めて実現するものである。地域の情報に耳を傾け、また広く外からの情報も受信し、地域の中で立ち回る役が重要である。そのためには、研修の機会を設け、幅広い知識だけではなく、コミュニケーション能力を高めることが必要とされる。

⑤“ネットワークづくり”といかにそれを生かすか

ここでいうネットワークとは、地域の中でのあらゆる組織・団体とつながることもさしているが、地区外・県外で同じように地域づくりに取り組んでいる人・組織・つながることもさしている。地域の中で煮詰まってしまったときは、地域の外から中を見たり、地域の外から新しい風を取り入れ、かき混ぜることで、新しいものが生まれることもあるのではないか。

⑥“ピンチがチャンス！”

何事も右肩上がりで豊かな生活が保障されていた時代に比べ、社会を取り巻く様々な問題が山積している今こそが、社会教育の出番であると考える。予算がない、ならば人の力で何とかしよう、なんとかできる人たちを育てよう。そこが社会教育の真髄かと思われる。今、福島県は東日本大震災の被害とともに原発事故にも苦しんでいる。どうも原発事故は加害者（東京電力）があるので、被害者意識が強く、保障や賠償は、何とか自分から動き出そうという人の意志を少し削いでしまっているような気がする。福島県がこれから復興していくためには、ハード面への支援も大事であるが、自分で道を切り開く人材の育成も大事であると思う。そこにこそ、社会教育が生かされると信じている。

資料1

金上地区地域づくり計画

協議会の名称

「かながみ未来を創る会」

地区の概要

金上地区は、阿賀川と鶴沼川の清らかな流れに囲まれており、その肥沃な土地では稲作を中心に花卉栽培や食用牛の肥育などが盛んで、東に磐梯山・北に飯豊山を望む美しい田園風景が広がる豊かな農業地帯です。

地区内を国道４９号や主要県道会津坂下・本郷線が通り、磐越自動車道新鶴ＰＡスマートＩＣにもアクセスが容易な交通の要衝であり、特に国道沿いには比較的大規模な店舗が並び、新たな商業地域としても発展しています。

また、鶴沼球場や町民プールなどスポーツ関連の公共施設があり、スポーツに親しむ人々や公園でふれあう親子連れなどで賑わっています。

毎年１０月には地域と学校が連携し「いなほ祭り」を開催するなど、金上公民館を中心として地域づくりの取り組みが少しずつ進められています。

地域づくりの背景（現状と課題）

金上地区は平坦な地の利を活かし、稲作を中心とする農家が多く、また、公民館の事業を中心とし、子どもから高齢者までが活発な活動をしています。

その一方で、若者の定住が少なく、少子高齢化が進んでおり、高齢者世帯が増加しています。このため、活動する人が固定化され、人のつながりが希薄化しつつあります。また、教育施設適正配置後の学校・子どもたちとの関わりをどうするかが大きな課題になっています。

今後は、地域の現状を再認識するとともに、世代間交流を促進し、協働による地区民一体となった地域づくりを推進していく必要があります。

地域の将来像

『笑顔でつながる 穂(みのり)の郷(さと) かながみ』　～夢すくすく 笑顔の種をそだてよう！～

子どもからお年寄りまで、笑顔で健やかに安心して暮らせるかながみ金上、そして、恵まれた環境を守り、実り（穂）豊かでいきいき暮らせる金上をつくります。

地域づくりの目標

地域の将来像に向かって実施していく地域づくりの内容を３つの分野に分け、目指すべき目標を「基本目標」として定めます。また、基本目標を達成するためにどのように行動していくかを「行動目標」として定めます。（行動目標は「地域づくりの体系」で示します。）

ひとづくり

「ひと」は地域の貴重な財産です。「地域のために行動する」「夢に向かってチャレンジする」そんな人を地域全体で応援します。また、金上地区が金上地区であり続けるためにも地域住民の交流を促進し、笑顔があふれる金上地区をつくっていきます。

◆基本目標　『みんなが思いやり認め合う、笑顔あふれる元気な金上』
『夢に向かってチャレンジする人が集う金上』

くらしづくり

少子高齢化や高齢世帯の増加、防災や防犯、子育てなど、私たちの回りにある暮らしに関する不安はますます多様化しています。地域全体が協力することで、暮らしの不安を少しでも取り除き、安全に安心して暮らすことのできる金上地区をつくっていきます。

◆基本目標　『健やかで安心して暮らせる金上』
『世代を越えた交流で、笑顔あふれる金上』

ふるさとづくり

阿賀川や鶴沼川の清らかな流れ、会津の山々を望む美しい田園風景、そんなふるさとの環境や伝統文化を守っていくとともに、基幹産業である農業を中心として人々が協力し合って生き生きと働くことのできる金上地区をつくっていきます。

◆基本目標　『笑顔がふれあう、美しい金上』
『協力し生き生きと働ける、くらしやすい金上』

地域づくりの体系

将来像 **笑顔でつながる穂の郷かながみ** ～夢すくすく笑顔の種を育てよう！～

【基本目標】　【行動目標】

ひとづくり

- **みんなが思いやり認め合う、笑顔あふれる元気な金上**
- **夢に向かってチャレンジする人が集う金上**

- 明るく元気な子どもたちを育成します
- 世代を越えた交流の和をつくります
- みんなの一歩前進を応援します

くらしづくり

- **健やかで安心して暮らせる金上**
- **世代を越えた交流で、笑顔あふれる金上**

- 安全安心な地域をつくります
- 健康に暮らせる地域をつくります
- お年寄りが安心して暮らせる地域をつくります
- 安心して子育てできる地域をつくります

ふるさとづくり

- **笑顔がふれあう、美しい金上**
- **協力し生き生きと働けるくらしやすい金上**

- 美しいふるさとを守ります
- 活気あふれるふるさとをつくります
- 地域の伝統文化を守ります

取り組みの方針（内容）

ひとづくり

○ 豊かな体験活動や地域の人々とのふれあいを通して、未来を担う子どもたちを育成します。
○ 子どもからお年寄りまで、自分の好きなことをやってみたり、見せたりしながら人々が交流する場をつくります。
○ 夢をもってチャレンジしようとする人たちを応援し、みんなが思いやり認め合う笑顔でつながる地域をつくります。

くらしづくり

○　地域生活にあった互助・共助の仕組みづくりをします。
○　安心して暮らせるネットワークを構築します。
○　スポーツに親しみ、元気なこころと体づくりを推進します。

ふるさとづくり

○　地域全体が一体となって美しい環境を守り、未来につなげていくことが実感できる機会をつくります。
○　元気なお年寄りたちが、畑仕事などを中心にいきいきと働き、笑顔になれるような仕組みをつくります。

今後の協議会の運営方針

今後は、まちづくり活動の推進体制を構築し、事務局の充実を図ります。
また、各自、各種団体等の連携を図り、子どもから高齢者までみんなが、まちづくりに参加できるように、地域の活力を生み出します。
将来的には、地域でできることは地域で行うことにより、自立した協議会を形成します。

笑顔でつながる穂の郷かながみ
～夢すくすく 笑顔の穂を育てよう！～
49
はんげひがし公園
金山学校
福原
上開津
中開津
阿賀川

金上地区住民住民調査集約

資料2

1、ご協力をいただいた方

表1地区別内訳

福原	39
金上	111
樋口分	13
太田谷地	8
村田	67
村田新田	14
履形	15
海老沢	24
細工名	27
東原	47
新村	9
新開津	53
中開津	36
上開津	37
計	500

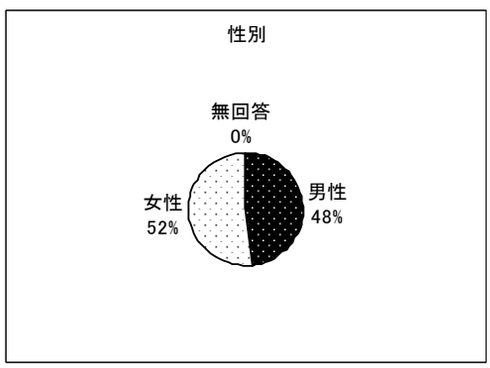
・今回の調査でご協力をいただいた方々の地域別内訳は表1のとおりです。金上地区の全世帯481軒、一世帯2名の方へ回答をお願いしました。その結果、276軒から回答をいただきましたので、世帯回収率は57.4%です

・回答者の男女比率は、概ね同数ですが、地区別にはQ1－2のとおりばらつきがあります

・回答者の年代別構成はQ1－3のとおりです。50代以上の回答者が全体の72.2%を占めています

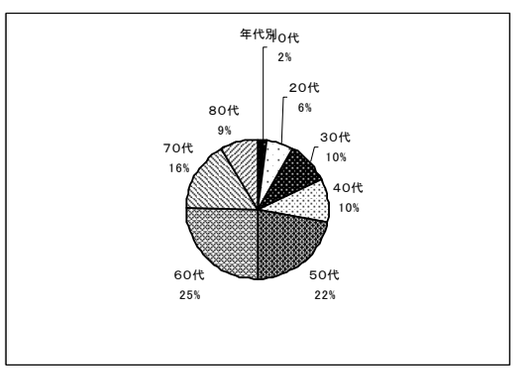
Q1　性別

男	242	48.4%
女	257	51.4%
無回答	1	0.2%
計	500	100.0%



Q2 年代別

10代	11	2.2%
20代	30	6.0%
30代	49	9.8%
40代	49	9.8%
50代	109	21.8%
60代	128	25.6%
70代	81	16.2%
80代	43	8.6%
計	500	100.0%

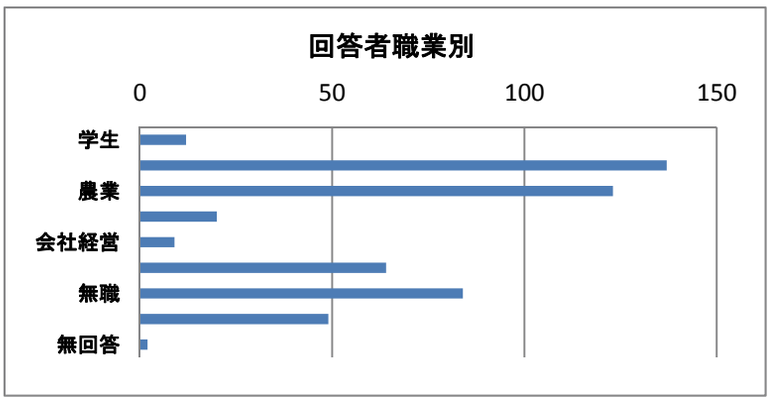


Q2－2　年代別・男女別

	男性	割合	女性	割合	計	割合
10代	5	2.1%	6	2.5%	11	2.2%
20代	12	5.0%	18	7.0%	30	6.0%
30代	20	8.3%	29	11.3%	49	9.8%
40代	25	10.3%	24	9.3%	49	9.8%
50代	56	23.1%	53	20.6%	109	21.8%
60代	72	29.8%	56	21.7%	128	25.6%
70代	41	16.9%	40	15.6%	81	16.2%
80代	11	4.5%	31	12.0%	43	8.6%
計	242	100.0%	257	100.0%	500	100.0%

Q3 職業

学生	12
会社員	137
農業	123
公務員	20
会社経営	9
主婦	64
無職	84
その他	49
無回答	2
計	500

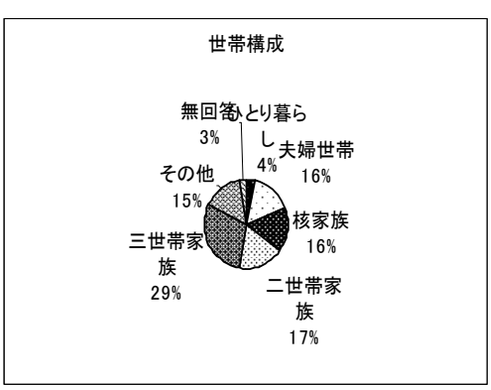


Q3－2　男女別・職業別

	男性		女性		無回答
学生	6	2.5%	6	2.3%	
会社員	81	33.5%	56	21.8%	
農業	75	30.6%	48	18.7%	
公務員	14	5.8%	6	2.3%	
会社経営	8	3.3%	1	0.4%	
主婦	0	0.0%	64	24.9%	
無職	42	17.4%	42	16.4%	
その他	16	6.5%	33	12.8%	
無回答	1	0.4%	1	0.4%	2
計	243	100.0%	257	100.0%	

Q4　世帯構成

ひとり暮らし	18	3.6%
夫婦のみ	78	15.6%
親と未婚の子（核家族）	81	16.2%
親と子ども夫婦	85	17.0%
親と子どもと孫（三世帯家族）	151	30.2%
その他	73	14.6%
無回答	14	2.8%
計	500	100.0%



Q4－2　65才以上いる世帯

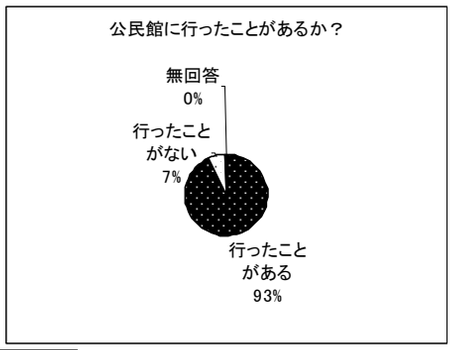
いる	387	77.4%
いない	109	21.8%
無回答	4	0.8%
計	500	100.0%

Q4－3　65歳以上の家族数

ひとり	191
2人	148
3人	15
4人	2
非該当	109
無回答	35
計	500

・回答者の世帯構成はQ4のとおりです。親と未婚の子の世帯は16.2%と核家族化が進んでいないと思われます。反面三世帯家族が30.2%であることは、地域づくり協議会員のアンケートで26.4%と同様に高い数値を占めていて、会津坂下町の特徴といえると思います

2、公民館とのかかわり



Q5　公民館に行ったことがあるか

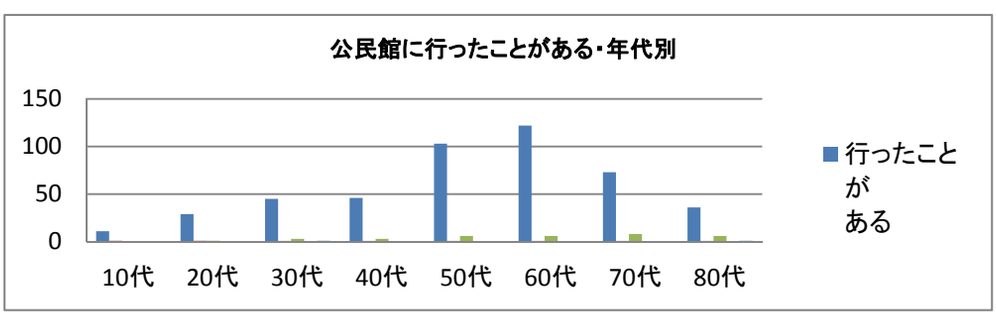
行ったことがある	465	93.0%
行ったことがない	33	6.6%
無回答	2	0.4%
計	500	100.0%

Q5－2　公民館に行ったことがあるか（男女別）

	男性	割合	女性	割合	無回答
行ったことがある	231	95.5%	233	90.7%	1
行ったことがない	10	4.1%	23	8.9%	
無回答	1	0.4%	1	0.4%	2
計	242	100.0%	257	100.0%	2

Q5－3　公民館に行ったことがあるか（年代別）

	行ったことがある	割合	行ったことがない	割合	無回答	割合	合計
10代	11	100.0%	0	0.0%			11
20代	29	96.7%	1	3.3%			30
30代	45	93.0%	3	6.2%	1	0.8%	49
40代	46	93.9%	3	6.1%			49
50代	103	94.5%	6	5.5%			109
60代	122	95.3%	6	4.7%			128
70代	73	90.1%	8	9.9%			81
80代	36	83.7%	6	14.0%	1	2.3%	43
計	465	93.0%	33	6.6%	2	0.4%	500



Q5－4　公民館に行ったことがあるか「行ったことがある」（年代別・男女別）

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	計
男性	5	12	19	23	54	71	36	11	231
女性	6	17	26	23	49	51	37	24	233
無回答								1	1
計	11	29	45	46	103	122	73	36	465

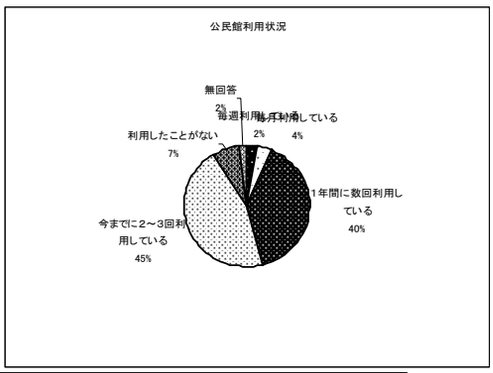
Q5-5　公民館に行ったことがあるか「行ったことがない」（年代別・男女別）

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	計
男性	0		0	2	2	1	5	0	10
女性	0	1	3	1	4	5	3	6	23
計	0	1	3	3	6	6	8	6	33

・Q5で公民館に行ったことがある人が93%と示しています。この数値は、金上公民館が、地域住民から日常的に受け入れられていることを示していると考えます。また、50代、60代では男性の方が女性より「公民館に行ったことがある」人が多いことは、金上地区の特徴と思います

Q6 公民館利用状況

毎週	12	2.4%
毎月	20	4.0%
1年間で数回利用	199	39.8%
今まで2～3回	226	45.2%
非該当	33	6.6%
無回答	10	2.0%
計	500	100.0%



Q6-2 公民館利用状況（男女別）

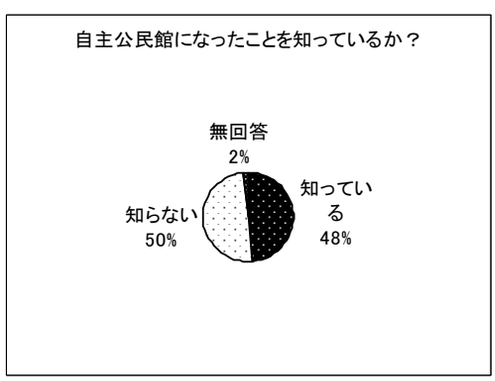
	男性	割合	女性	割合	計
毎週利用している	2	0.8%	10	3.9%	12
毎月利用している	7	2.9%	13	5.0%	20
1年間数回利用している	125	51.7%	74	28.7%	199
今まで2～3回利用している	95	39.3%	131	50.8%	226
非該当	10	4.1%	23	8.9%	33
無回答	3	1.2%	7	2.7%	10
計	242	100.0%	258	100.0%	500

Q6－3 公民館利用状況（年代別）

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	計
毎週利用			1				3	1	12
毎月			1		1	7	6	5	20
1年回数回利用している	5	4	24	25	52	50	32	7	199
今まで2～3回利用している	6	25	18	21	51	51	30	24	226
非該当		1	4	3	5	7	8	5	33
無回答			1			6	2	1	10
計	11	30	49	49	109	121	81	43	500

Q7 自主公民館になったことを知っているか

知っている	242	48.4%
知らない	248	49.6%
無回答	10	2.0%
計	500	100%



Q7－2 自主公民館になったことを知っているか（男女別）

	男性	割合	女性	割合	計
知っている	129	53.3%	113	44.0%	242
知らない	110	45.5%	138	53.7%	248
無回答	4	1.2%	6	2.3%	10
計	243	100.0%	257	100.0%	500

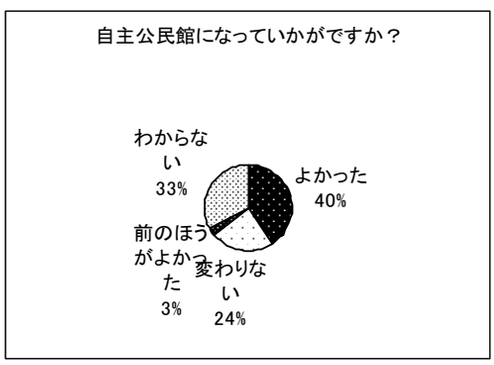
・Q7は、「自主公民館になったことを知っているか」の設問ですが、49.6%の人が知らないと回答していることは意外です。とくに50代より70代の人では47%知らないと回答しています

Q7－3　自主公民館になったことを知っているか（年代別）

	知っている	割合	知らない	割合	無回答	割合	合計
10代	2	18.2%	9	81.8%			11
20代	3	10.0%	27	90.0%			30
30代	20	40.8%	29	59.2%			49
40代	32	61.2%	17	38.8%			49
50代	50	45.9%	58	53.2%	1	0.9%	109
60代	75	58.6%	49	38.3%	4	3.1%	128
70代	39	48.1%	41	50.6%	1	1.3%	81
80代	21	48.8%	18	41.9%	4	9.3%	43
計	242	48.4%	248	49.6%	10	2.0%	500

Q8　自主公民館になっていかかですか

	全体	割合	知っている	割合
よかった	98	19.6%	98	40.5%
変りない	57	11.4%	56	23.5%
前の方かよかった	8	1.6%	8	3.3%
わからない	79	15.8%	79	32.7%
非該当	248	49.6%	1	―
無回答	10	2.0%	―	―
計	500	100.0%	242	100.0%



Q8-2　自主公民館になっていかがですか（男女別）

	男性	女性	無回答	計
よかった	49	49		98
変りない	34	23		57
前の方がよかった	5	3		8
わからない	42	39		81
非該当	112	143	1	256
計	242	257	1	500

・自主公民館になった感想を聞いた結果がQ8です。自主公民館になったことを知っていると回答した人の4人に1人は、「変わりない」や「前の方がよかった」と答えています

Q9　良かった理由

運営委員が20名になり、地域住民の声が反映しやすくなった	26	26.3%
民間の生涯学習推進委員が派遣され、公民館が親しみやすくなった	42	42.9%
活動などの企画・立案が自主的にしやすくなった	33	33.7%
興味ある事業やおもしろい事業が増えた	40	40.8%
公民館のいろいろな情報を知ることができるようになった	39	39.8%
その他	2	2.0%
計	98	―

※割合は選択者/該当者

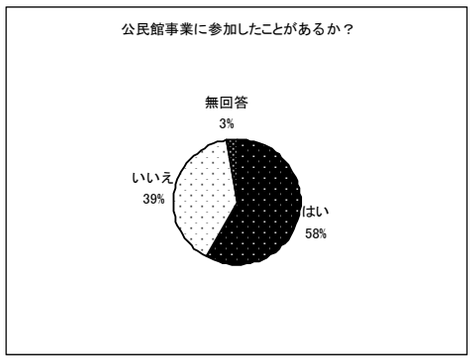
Q10　前の方が良かったは、どのような点か

役場職員を引き上げ段階で公民館活動の低下は予測できた自主公民館は地域住民の意識を考えれば時期尚早
現在のように経済が低迷し地震原発事故等でモチベーションが下がっている中での自主公民館活動はむずかしい
いるときといないときがあるため利用しずらい
公民館に行きやすい
公民館活動が低調になったように見受けられます
役場職員として仕事ぶりが充実感があったような気がします
留守の時が多く困るときがある

・Q10での「自主公民館になって良かった理由」は、自主公民館の特徴を表しています。また、「前の方が良かった」理由として、「留守が多い」と指摘しています

Q11　金上公民館の事業に参加したことがある

はい	290	58.0%
いいえ	197	39.4%
無回答	13	2.6%
計	500	100.0%



Q12　参加事業名

新春交歓会	48	16.6%
いなほ祭	141	48.6%
地区運動会	230	79.3%
スポーツ大会	79	27.2%
さなぶり祭	73	25.2%
ハイキング	18	6.2%
わんぱくチャレンジ	12	4.1%
料理教室	40	13.8%
ひよっこクラブ	14	4.8%
金上キッズクラブ	39	13.4%
熟年大学	20	6.9%
ものづくり講座	25	8.6%
その他	12	4.1%
累計参加数	965	―

※割合は参加人数/問11ではいと答えた人数(290)

その他

カラオケ	1
ときわ会	1
ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ	1
マルコ体操	1
区長会遺族会	1
小学校のとき	1
青色申告会	1
体操教室	1
老人カラオケ	1

Q12－2　参加事業名（年代別）

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	計
新春交歓会			1	5	11	22	4	5	48
いなほ祭	6	2	27	28	17	36	20	5	141
地区運動会	7	6	33	34	54	65	25	6	230
スポーツ大会	1	1	15	20	22	16	2	2	79
さなぶり祭	2	3	13	12	13	20	6	4	73
ハイキング	2		3	1	1	8	3		18
わんぱくチャレンジ	3		3	5	1				12
料理教室		1	1	4	13	14	6	1	40
ひよっこクラブ		1	8		2	2	1		14
金上キッズクラブ	5		12	8	4	7	2	1	39
塾年大学				2	1	7	6	4	20
ものづくり講座			3		3	14	2	3	25

・Q11で、公民館事業に参加したことがある人は60%弱で、多くの地域住民が公民館事業に参加していることがわかります。参加している事業の中では、「いなほ祭」、「運動会」、「スポーツ大会」、「さなぶり祭」などがとくに関心が高いことがわかります（Q12）。
各事業の年代別参加者を見ると、新春交歓会、熟年大学を除き、10代から高齢者までが一緒に一つの事業に参加しており、異世代の交流が行われています。とくに、「いなほ祭」には、金上小学校の子ども達が大勢参加しており、「学習」や「遊び」などで異世代交流が行われています

Q13　サークルや団体で公民館を利用したことがあるか

ある	206	41.2%
ない	263	52.6%
無回答	31	6.2%
計	500	100.0%

Q14　利用の理由

定例会	36	6.5%
打ち合わせ	92	16.5%
練習	31	5.5%
団体	93	16.6%
その他	10	1.8%
非該当	292	52.2%
無回答	5	0.9%
計	559	100.0%

その他

カラオケ	1
スポ小	1
区長会	1
手芸教室	1
小学校の学年行事	1
青色申告会の指導会	1
勉強会	1
勉強会として	1
役場からの催し	1
料理教室	1

Q15　公民館事業を何によって知るか

公民館だより	304	57.7%
ホームページ	2	0.4%
運営委員から	59	11.2%
学校便り	87	16.5%
友人から誘われて	50	9.5%
その他	25	4.7%
計	527	100.0%

その他

家族	1
回覧板	1
開催の案内状が届く(はがき)	2
区からの連絡、依頼	3
区長からの説明	1
団体からの通知	1
地区役員から	1
直接連絡がきた	1

・Q15から公民館事業の案内は、「公民館だより」を見て知ることが一番多い状況です

Q16　希望利用目的

仲間づくり	152	20.4%
教養を身につける	130	17.4%
生きがいづくり	168	22.5%
地域づくり	191	25.6%
その他	27	3.6%
非該当	1	0.1%
無回答	78	10.4%
計	747	100.0%

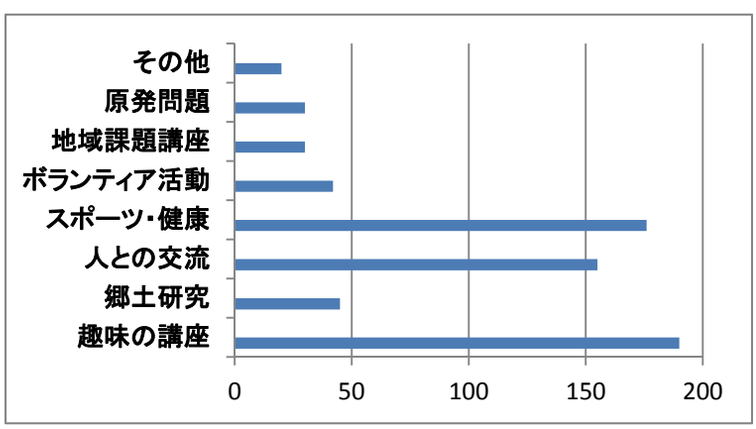
（その他）

暇だから	1
会合の時	1
区長会議	1
健康作り	1
自主企画講座に参加したことがない	1
講演会や落語会等工夫すべきだ	1
情報交換	1
体力づくり	2
地域との親睦	1
魅力があるので	1

一番希望が多いのは、地域づくりです

Q17　これからの公民館事業

趣味の講座	190	24.8%
郷土研究	45	5.9%
人との交流	155	20.2%
スポーツ・健康	176	22.9%
ボランティア活動	42	5.5%
地域課題講座	30	3.9%
原発問題	30	3.9%
その他	20	2.6%
非該当	1	0.1%
無回答	78	10.2%
計	767	100.0%

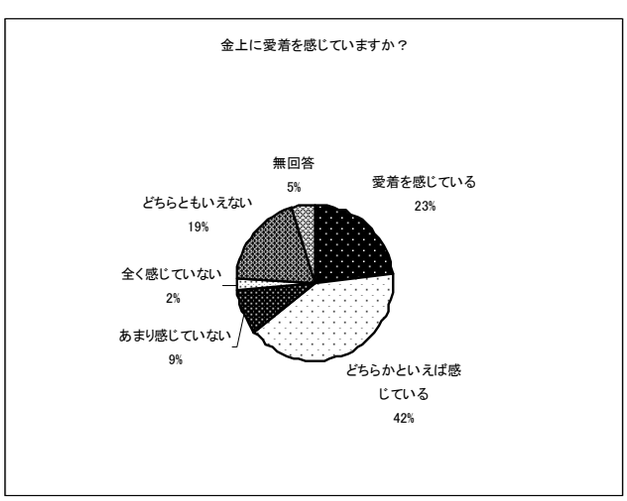


・Q17では、これからの公民館事業の希望を聞いています。趣味の講座やスポーツ・健康に関する事業は従来通り希望が多いことを示しています。また、人との交流も関心が高いことを示しています。郷土研究や地域課題講座、原発問題はウエイトは低いですが、時勢を反映していると思います

3,地域とのつながり

Q18　金上に愛着を感じているか

愛着を感じている	116	23.2%
どちらかといえば愛着を感じている	205	41.0%
余り感じていない	46	9.2%
全く感じていない	12	2.4%
どちらとも言えない	96	19.2%
無回答	25	5.0%
計	500	100.0%



Q18-2 金上に愛着を感じているか（男女別）

	男性	割合	女性	割合	無回答	計
愛着を感じている	58	24.0%	58	22.6%		116
どちらかといえば愛着を感じている	102	42.1%	103	40.0%		205
余り感じていない	23	9.5%	23	8.9%		46
全く感じていない	8	3.3%	4	1.6%		12
どちらとも言えない	37	15.3%	59	23.0%		96
無回答	14	5.8%	10	3.9%	1	25
計	242	100.0%	257	100.0%	1	500

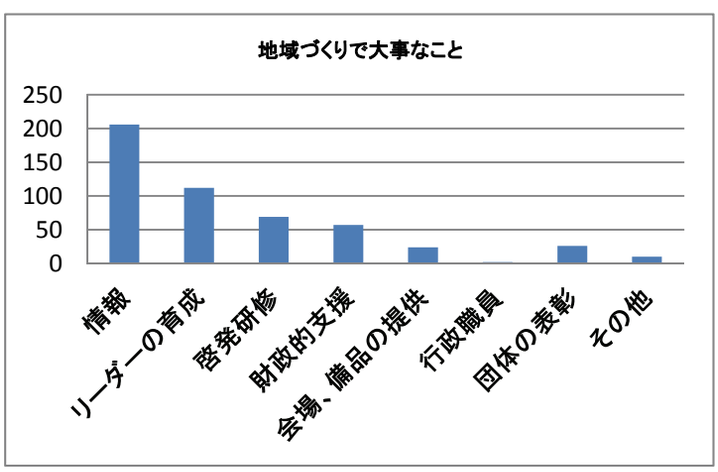
Q18-3 金上に愛着を感じているか（年代別）

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	計
愛着を感じている	2	3	11	14	21	28	24	13	116
どちらかといえば愛着を感じている	5	15	24	20	52	55	21	13	205
余り感じていない	2	3	4	3	12	11	9	2	46
全く感じていない				1	1	6	3	1	12
どちらとも言えない	2	9	6	11	21	19	20	8	96
無回答			4		2	9	4	6	25
計	11	30	49	49	109	128	81	43	500

・Q18では、金上地区への愛着度を聞いています。「愛着を感じる」と「どちらか言えば愛着を感じる」が64.2%と、「あまり感じない」と「全く感じていない」の11.6%を大きく上回っています。また、各世代とも愛着を感じている人が多くいることを示しています。ただ、50代～80代では、愛着を感じていない人の割合が12.4%と、10代～40代の9.4%に比べて高いことが気になります。
・愛着度が高い理由は、Q23の「金上地区を自慢したいと思うこと」を反映していると思います。

Q19 地域づくりで大事なこと

情報	206	35.1%
リーダーの育成	112	19.1%
啓発研修	69	11.8%
財政的支援	57	9.7%
会場、備品の提供	24	4.1%
行政職員	2	0.3%
団体の表彰	26	4.4%
その他	10	1.7%
無回答	81	13.8%
計	587	100.0%



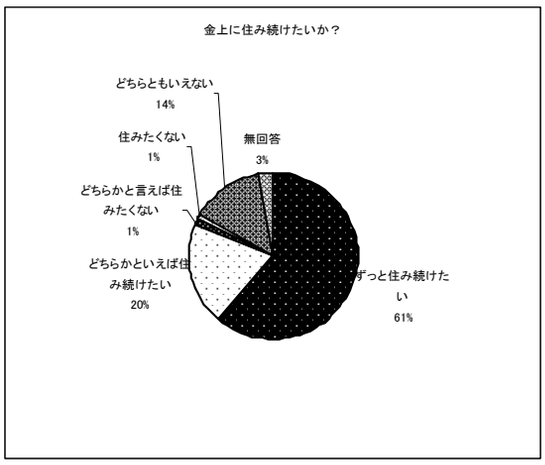
その他

ニーズの適切な把握	1
金上地区に企業を誘致し、活性化	1

・Q19では、「これからの地域づくりで大事なこと」を聞いていますが、回答してくれた人の中では40.7%（全体では35.1%）が情報提供と答えています。情報提供の重要性を示唆していると思います。
また、二番目に「リーダーの育成」となっていることは注目すべき回答です。
金上の将来に向かって、次世代のリーダーを育成するということを示唆していると考えます

Q20　金上に住み続けたいか

ずっと住み続けたい	306	61.2%
どちらかといえば住み続けたい	100	20.0%
どちらか住みたくない	7	1.4%
住みたくない	4	0.8%
どちらともいえない	69	13.8%
無回答	14	2.8%
計	500	100.0%



Q20-2　金上に住み続けたいか（男女別）

	男性	女性	無回答	計
ずっと住み続けたい	158	147	1	306
どちらかといえば住み続けたい	49	51		100
どちらか住みたくない	1	6		7
住みたくない	1	3		4
どちらともいえない	25	44		69
無回答	8	6		14
計	242	257	1	500

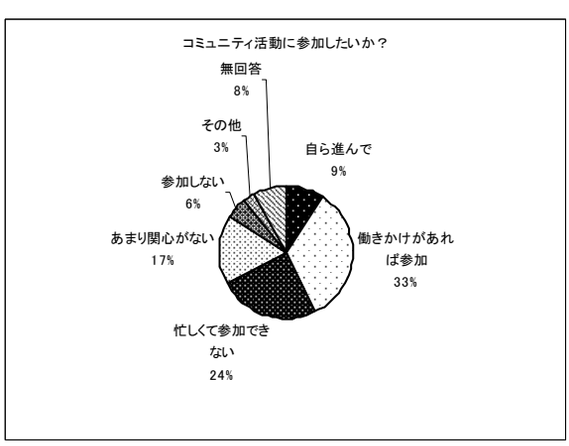
Q20-3　金上に住み続けたいか（年代別）

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	計
ずっと住み続けたい	2	5	23	27	81	78	57	33	306
どちらかといえば住み続けたい	5	9	14	11	16	27	14	4	100
どちらか住みたくない	2		1	1		2	1		7
住みたくない	1	1				1	1		4
どちらともいえない	1	15	8	10	11	15	5	4	69
無回答			3		1	5	3	2	14
計	11	30	49	49	109	128	81	43	500

Q20では、「金上地区に住み続けたいか」を聞いています。「ずっと住み続けたい」と「どちらかといえばすみ続けたい」の合計が81.2%と高い数値を示しています。男女別、年代別でも同様の高い結果です。また、小学生のアンケートでも、「将来大人になっても住んでいたいと」の回答が70%弱を示しています。この二つのデータから、金上地区は魅力があり、素晴らしい地域であることがわかります。

Q21　コミュニティ活動への参加

自ら進んで	48	9.4%
はたらきあれば参加	170	33.5%
忙しくて参加できない	124	24.4%
あまり関心がない	85	16.7%
参加しない	28	5.5%
その他	14	2.8%
無回答	31	7.7%
計	500	100.0%



（その他）

やりたいものがあればやるし、興味がないものは興味がない
参加したい気持ちはあるが、年齢と体が都合のよいようになりません
内容によっては参加する
内容によって参加したい
年齢的に参加する活動は限られています
無理のない範囲で参加したいです

Q21-2 年代別コミュニティ活動への参加希望者

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	7O代	80代	計
自ら進んで参加	2	2	6	3	9	14	9	3	48
はたらきあれば参加	3	6	20	18	39	52	23	9	170
計	6	8	26	21	48	66	32	12	218

Q21は、コミュニティ活動に対する意識を問いかけています。「自ら進んで」と「働きかけがあれば参加する」と回答した人が218人（全体の43.6%）います。21－2で示していますように各世代に積極的参加者がいます。このことは、金上地区の一つの財産といえると思います

Q22　財源は

公費	117	23.4%
公費と住民の負担	159	31.8%
助成金	86	17.2%
営利事業	37	7.4%
無理に集めない	28	5.6%
その他	11	2.2%
無回答	62	12.4%
計	500	100.0%

その他

働くところもなく収入がない人も多い。金を集めてまでもやらなくてよい
わからない
財源不足はどこも同じ、地域で負担すべき
事業時に寄付を募る
場所の確保は公費それ以外は自費
利用する人がお金を出すこと

Q22は、これからの地域活動の財源問題の問いかけです。「公費と住民が負担していく」の回答が、「公費」のみに依存する回答よりも多くなっています

Q23 金上地区を自慢したいと思うこと
＜集約結果＞

1、まとまりがあり、協力的である	28
2、交通の便が良い	17
3、美しく、豊かな自然	16
4、子どもたちが素直に育っている	15
5、行事が季節ごとに多くあって、楽しめる	14
6、美味しいお米や野菜など美味しい食べ物がある	11
7、やさしい、親切な人が多い	10
8、のどかな田園風景	8
8、住みやすさ	8
8、いなほ祭、さなぶり祭	8
12、事件がなく、平和である	6
12、商店街が少しつづ増えている	5
13、町内にプール、公園、野球場がある	5
14、スポーツ大会、運動会が盛んでいきいきしている	4
14、公民館事業が多く、だれでも参加できる	4
14、災害が少ない	4
14、向こう三軒両隣、連絡、協調が良い	4
14、学校と地域の連携ができている	4
14、ボランティア活動が盛んである	4
20、農業が盛んである	3
20、指導者がいる	3
22、小学校にいい先生がいる	3
22、元気な老人が多い	2
22、中年女性が元気	2
22、若者が多い	2
26、三世帯家族が多い	2
22、まじめで明るい人が多い	2
22、磐梯山が見られる	2

29、文化財や歴史がある	1
30、花火が見られる	1
31、高学歴の人を集めていない	1
32、川と水がきれい	1
33、日当たりが良い	1
その他	5
自慢することない	5
計	211

Q24　金上地区で心配なこと、変わってほしいこと
＜集約結果＞

1、少子高齢化が進んでいる	35
2、金上小学校が廃校になること	22
3. 地域住民の意識の変化	18
4、交通の便が悪い	14
5、若者が少ない	13
6、地域内の環境整備、施設の充実	12
7、公民館事業に関すること	10
8、人口の減少	7
8、道路の整備	7
8、除雪問題	7
11、地区内外、人との交流が少ない	5
12、子どもの通学問題	4
13、リーダーシップの人が出ていない	3
13、下水道の整備	3
13,企業、事業所の誘致	3
16、町への要望	2
16、セイタカクワガタソウが増えている	2
その他	2
わからない、このままでいい	5
計	174

Q25　金上小学校統廃合についての意見、要望
＜集約結果＞

1、寂しい、残念である	29
2、小学校廃校後の利用について	22
3、子どもの通学問題、安全確保	20
4、仕方がない、やむえない	15
5、反対、すべきでない	9
5、統合は当然、良い	9
7、公民館事業、地域事業の見直し、改善	6
8、歴史、伝統、校歌を残してほしい	5
9、統廃合の対策を考えてほしい	4
その他	4
計	123

Q26　公民館への要望、意見
＜集約結果＞

1、もっと充実した活動を望む	9
2、現状でいい、これまで通り頑張って	8
3、気軽に参加でj着る事業を開催してほしい	5
4、事業の拡充 「若者向け」、「サークル活動」、「団塊世代向け」、「働いている人向け」等	4
5、統廃合の小学校の利用	3
5、もっと経費の節減を	3
5、運動会やスポーツ大会をもっとやってほしい	3
8、施設の充実（洋式トイレ、駐車場等）	2
8、図書館（移動を含む）が欲しい	2
10、コミュニティ拠点として期待する	1
11、運営に関して意見を聞いてほしい	1

公民館に行っていない	2
なし	2
計	45

Q26　町へ要望、意見
＜集約結果＞

1、公民館の運営、施設の整備	9
2、町職員への要望（処遇関連も含め）	8
3、公民館事業及び地域活動について	6
4、バスの運行（福祉政策の一環として）、スクールバスの増大	5
4、若い人の減少を防止を中心に企業、事業所の誘致	5
4、町の行政、財政問題	5
7、町議会議員への要望	4
8、金上小学校の利用について	3
8、会津坂下町の小学校の統廃合問題（教育問題）	3
10、年金、税金について	2
10、図書館の充実	2
12、除雪対策	1
なし	1
計	54

＜自由記載意見、要望＞
大変貴重な意見、要望があります。一つ、一つを尊重して、これからの金上の地域づくり、
公民館運営、コミュニティ化に役に立ててください

第4章

社会教育による地域の
教育力強化プロジェクト実証的共同研究

北海道占冠村における『熟議』の取組み

研究実績報告書

1．占冠村（勇払郡、上川支庁）の概要

① **占冠の立地**　日高山脈と夕張山地に挟まれ、上川・空知・胆振・日高・十勝の各支庁が接する地域にある（交通網整備次第で、札幌、千歳、富良野－旭川、帯広に至便）

村は鵡川源流部に位置し、上流からトマム（苫鵡）原野、占冠原野、ニニウ原野があるが、それぞれ険峻な山地に阻まれており、下流の勇払郡鵡川との道もなかった。

自然条件の非常に厳しい地域で、夏場は摂氏 30 度を超えことが、また冬場は零下 30 度を下回ることがある。

北海道の先住民族アイヌの集落や住居跡は存在しない。アイヌは日高方面から狩猟等に入り込んではいたようである。

② **占冠村は非常に若い村である。**入植から 110 年、村の独立（1932 年）から 80 年の歴史をもつにすぎない（下の年表、および表 1 を参照してください）。

初期の交通網　開拓当初、村の二大地区、中央地区は南富良野の金山が、トマムは南富良野の落合が入り口であった（表紙地図参照）。両者を結ぶ道路は開通して 78 年。

1889（明治 22；大日本帝国憲法発布）　**北海道庁、勇払郡占冠原野告示**

1890（明治 23；教育勅語発布）　**北海道庁、勇払郡占冠原野に殖民区画設定、殖民道路の開削開始**（自勇払郡占冠至空知郡金山〔南富良野〕）

1895（明治 28；日清戦争終了）　北海道庁、勇払郡鵡川ほか 8 ヵ村戸長役場設置（鵡川村・井目戸（いもつべ）村・萌別（もいべつ）村・生竈（いくべつ）村（のち鵡川村）、また穂別村・似湾（にわん）村・累標（るべしべ）村・辺富内（へとない）村（のち穂別村）。辺富内村戸長役場の中に字シムカプあり）。

＊ 戸長役場：明治時代初期に戸長が戸籍事務などを行った役所のこと

1902（明治 35）　**北海道庁、トマム原野殖民告示**（翌年以降の貸与予定地として）

道庁の北海道官設鉄道、石勝線（石狩－十勝）の狩勝トンネル工事者 3 千人

1904（明治 37；日露戦争開戦）　双珠別に最初の入地（ハッカ栽培、馬飼育）

1905（明治 38）　北海道庁、占冠村戸長役場創立。室蘭支庁管轄に属する

1906（明治 39）北海道庁、占冠村戸長役場を室蘭支庁より上川支庁管内に編入し、下富良野村（のち南富良野村に改称）ほか 1 ヵ村〔占冠村〕戸長役場設置

★双珠別神社創祀

1907（明治 40）　**北海道庁、ニニウ殖民区画設定**

このころ、双珠別で砂金掘り、金塊探し盛ん

1908（明治 41）　北海道庁、南富良野村ほか 1 ヵ村〔占冠村〕戸長役場設置

☆双珠別小学校開校

1909（明治 42）　岩井亮一、水稲栽培に成功し、占冠村の元祖となる

1910（明治 43）　王子製紙株式会社、原料針葉樹の伐採に着手

1911（明治 44）　小樽市枡田喜次郎、字占冠に木工所開設（高畑木工所の前身）

1912（明治 45／大正 1）　中トマムに京都農場創立（西田・村岡二氏）

1913（大正 2）　▲下トマムに琴平神社創祀

1914（大正 3）　占冠村のハッカ栽培面積 9 町 6 反

表1　占冠村初期の部落別戸数

	双珠別	字占冠	中央	ニニウ	トマム	合計
1903	○	○	○	○	○	98 (100)
1913	43 (17)	**101 (41)**	**66 (27)**	26 (10)	13 (5)	249 (254)
1914	45 (18)	50 (20)	**72 (29)**	25 (10)	18 (7)	250 (255)
1915	47 (17)	**88 (32)**	**74 (27)**	21 (8)	41 (15)	271 (277)
1916	51 (18)	**82 (29)**	**87 (30)**	22 (8)	45 (16)	287 (293)
1917	55 (13)	79 (19)	**96 (23)**	25 (6)	**157 (38)**	412 (420)

出典：『占冠村史』1963年：895頁

注1）合計欄の指数は、人口の推移を1903年を100として計算したもの

注2）1913年以降の部落別戸数における指数は、各年の合計を100とする各部落の構成比

1915（大正4）　☆北海道庁認可のトマム特別教授場（下トマム小学校）授業開始
双珠別信用組合組織さる

1917（大正6）　**占冠中央に愛媛団体入地**
字占冠・占冠中央方面の豆作は相場の高騰によって成金を生む
☆北海道庁、〔南富良野村〕落合尋常小学校トマム第一特別教授場認可

1919（大正8）　北海道庁、南富良野村占冠村組合役場（二級村）設置

1922（大正11）大水害4日に及び多大な被害があった

1929（昭和4）　凶作被害のあと米価下落、政府の金輸出解禁令により不景気

1930（昭和5）日高に発生した山火事、双珠別方面に延焼し開村以来の大山火

1931（昭和6）　上トマムの除虫菊栽培、全盛時代に入る。その一方、中央方面は凶作となり、米は皆無、不景気さらに深刻となる

1932（昭和7）　南富良野村との組合を解き独立占冠村となる。開庁式挙行
☆明治以来の双珠別広島神楽、全盛時代を迎う
▲上トマム神社創祀
開村以来の大凶作、要救済戸数254戸。天皇陛下より六百数十円の御下賜金

1933（昭和8）初代村長久保正信、冷害対策としてハッカの普及に乗り出す

1934（昭和9）トマム占冠間道路開通

③　**村の産業**　最初は砂金・金塊の採集者が小グループで入地したが、やがて造材などの山仕事、馬産（旭川第七師団の軍馬等）。稲作栽培は1909年に成功するが、冷害凶作多発地帯であったため安定せず、寒冷気候に強いハッカ栽培が進む。この間、投機的要素の強い豆作で成金となった者も出た。

『占冠村百年史』（2006年）の一節。「かっての占冠村は、寒村ながら一面で“木材王国”の足取りがあり、それは太平洋戦争中も戦後も続いて、／半農半林の村　男衆が夏季は耕作に、冬季は冬山造財や馬搬に出る家庭。老人と婦女が畑を守って、主人公が年中造財山に出稼ぎする家庭。これで生計をたてていた」（214頁、傍点原文）。

太平洋戦争中　木材と馬の供出、ニニウ地区にクローム鉱山、石炭鉱山の開鉱。

④ **戦後改革と 1950 年代の占冠村** 村の農地委員会、食糧調整委員会が発足し、戦後開拓農民がトマム・双珠別などに入地した（国有地 460 町歩の緊急開拓地指定）。占冠村農業協同組合、開拓農業協同組合・苫鵡開拓農業協同組合が設立され、1951 年には乳牛百頭記念碑が建立された。

新しい教育・文化・生活様式 他方、中学校（新制中学）が新設され、字占冠をはじめ中央・上トマム・下トマムの部落青年団結成、中央劇場（占冠劇場前身）の建設、トマム婦人会や農協婦人部、婦人団体連絡協議会創立の設立、村商工会設立、そして村の石勝線新設期成会も設立された。この間、村役場はトマム出張所を設置（のちトマム支所に昇格）、村営発電所は村内に電灯を供給した。

人口のピーク こうした出来事の結果、1960 年（昭和 35 年）に人口（4,705 人）、世帯数（842）とも村史上最高となった。以後、人口と世帯数は若干のズレを示しつつ、右肩下がりとなる。特に双珠別地区の減少は大きく、トマム地区は上下する。

表 2 国勢調査人口の変動（1950 ～ 2000 年）

	双珠別	字占冠	中央	ニニウ	トマム	人口計
1960	**1505 (32)**	**751 (16)**	**1225 (26)**	**333 (7)**	**892 (19)**	**4705 (100)**
〔指数〕	〔100〕	〔100〕	〔100〕	〔100〕	〔100〕	〔100〕
1970	**202 (8)**	**480 (20)**	**1131 (47)**	**130 (5)**	**435 (18)**	**2382 (100)**
〔指数〕	〔13〕	〔64〕	〔92〕	〔39〕	〔49〕	〔51〕
1980	**108 (7)**	**258 (17)**	**1008 (67)**	**10 (1)**	**117 (8)**	**1501 (100)**
〔指数〕	〔 7〕	〔34〕	〔82〕	〔 3〕	〔13〕	〔32〕
1990	**97 (5)**	**242 (14)**	**992 (56)**	**3 (0)**	**437 (25)**	**1771 (100)**
〔指数〕	〔 6〕	〔32〕	〔81〕	〔 1〕	〔49〕	〔38〕
2000	**64 (3)**	**185 (10)**	**861 (46)**	**5 (0)**	**758 (40)**	**1873 (100)**
〔指数〕	〔 4〕	〔25〕	〔70〕	〔 2〕	〔5〕	〔40〕

出典：1960 年～ 2000 年は『占冠村百年史』2006 年：91 頁

表 3 国勢調査世帯数の変動（1950 ～ 2000 年）

	双珠別	字占冠	中央	ニニウ	トマム	人口計
1960	**214 (25)**	**150 (18)**	**265 (31)**	**48 (6)**	**165 (20)**	**842 (100)**
〔指数〕	〔100〕	〔100〕	〔100〕	〔100〕	〔100〕	〔100〕
1970	**244 (35)**	**139 (20)**	**320 (46)**	**76 (11)**	**110 (16)**	**689 (100)**
〔指数〕	〔114〕	〔93〕	〔121〕	〔158〕	〔67〕	〔82〕
1980	**42 (7)**	**132 (21)**	**352 (56)**	**40 (6)**	**66 (10)**	**632 (100)**
〔指数〕	〔20〕	〔88〕	〔133〕	〔83〕	〔40〕	〔75〕
1990	**30 (2)**	**106 (6)**	**404 (24)**	**1 (0)**	**1132 (68)**	**1673 (100)**
〔指数〕	〔14〕	〔71〕	〔152〕	〔 2〕	〔686〕	〔199〕
2000	**21 (2)**	**86 (8)**	**376 (37)**	**4 (0)**	**541 (53)**	**1028 (100)**
〔指数〕	〔10〕	〔57〕	〔142〕	〔 8〕	〔329〕	〔122〕

出典：表 2 と同じ

⑤ **1960 年代と 70 年代の模索**　**急激な人口減少の原因**は複合的であろうが、農林業の「近代化」はその一つの要因である。農業における高度集約酪農地区指定（1957 年）、国からの貸与和牛 60 頭導入（1959 年）を先駆とし、特に農山漁村振興五ヶ年計画の導入（占冠地域農村振興協議会設立：1960 年）、林業の近代化では字占冠－下トマム間開発道路、双珠別－上トマム間林道（1959 年）、占冠－ニニウ間林道（1960 年）、ニニウ－穂別間林道（1967 年）の開通、そして農業・林業双方における機械化の進展である。

人口の減少には 2 つのヤマがあった。1960 年と 1970 年の間、1970 年と 1980 年の間である。少し詳しく見ると、1965 年の国勢調査人口は 3,306 人だから、1960 年よりも 1,399 人（つまり現在の占冠村の人口に匹敵する数）が減った（減少率は 30 %）。1970 年から 1975 年では 1,520 人が減少（減少率 37%）。1980 年の人口は 1,601 人となった。

観光開発の追求　村は自立を模索した。山菜加工工場完成に加え、乳牛・肉牛 1,500 頭突破共進会と「ふるさと祭り」開催、村立自然公園（赤岩青巌峡）指定、ニニウ・レクリエーションの森、湯の沢温泉、村営スキー場の整備。そして「石勝高原総合レクリエーション施設」の検討開始（「日高地方特定農山村開発調査」：中トマム）。それが動き出す。

⑥ **トマム・リゾートの具現化**　1980 年、国鉄・鉄道弘済会等による「石勝高原総合レクリエーション施設計画書」は、,第三セクター方式を提唱。占冠村議会はトマム地域開発特別委員会を設置した。1981 年、国鉄石勝線が開通し、占冠駅・トマム駅が開業する。「石勝高原総合」開発は村の手から離れだす。

石勝線開業後、石勝高原総合レクリエーション施設開発協議会・世話人会が発足（座長：鉄道弘済会北海道支部長、世話人：北海道開発局、北海道、上川支庁、北海道東北開発公庫、北海道拓殖銀行、札幌鉄道管理局、日本交通公社、占冠村など 19 名）。

1982 年、㈱シムカップ・リゾート開発公社の設立（第三セクター、社長は占冠村観音信則村長）。資本金 9,800 万円のうち占冠村 5,000 万円（51 %）、㈱ホテルアルファ 2,800 万円と関兵精麦㈱ 2,000 万円（両者の計 49 %）であった。

1983 年、アルファリゾート・トマムの営業が開始された（ホテルアルファ・トマム、リゾーセンター、インフォメーションセンター、スキー場：リフト 4 基、ゴンドラ 1 基）。

⑦ **リゾートの発展と内紛**

アメリカ・コロラド州アスペン市スキー場とトマムスキー場との友好協定提携（1986 年）、トマムリゾートのザ・タワーⅠ開業（1987 年；会員制ホテル、401 室）、トマム・ゴルフ場のオープン（1988 年）、富良野・大雪リゾートのリゾート法（総合保養地整備法）による承認、トマムリゾートのザ・タワーⅡ開業（1989 年；会員制ホテル、367 室）以後も設備拡充。

トマムリゾートは出発した。だが創業者一族の内紛が始まり、村は翻弄させられる。施設全体の 6 割所有者・関兵精麦㈱（関兵馬社長、本社仙台）と、4 割所有の㈱ホテルアルファ（関兵馬三男の関光策社長、本社札幌）との間に経営方針の対立が激化していく。それに、㈱ 加森観光（本社札幌）と㈱星野リゾート（本社軽井沢）が関わる。

ホテルアルファは㈱アルファコーポレーションを設立。関兵精麦側は関兵馬死去後、1997年に加森観光㈱（本社札幌）の子会社に施設運営を委託。1998 年にはアルファ・コーポレーションが破産、2003 年に東京地裁に民事再生法の適用を申請、2004 年には関兵精麦も会社再生計画案を東京地裁に提出。債権者会議と地裁の裁定により、㈱星野リゾートと加森観光㈱（占冠村所有関係）の二社協調運営となる。

最近年のトマムリゾート　最終的には 2005 年に、加森観光はトマムリゾートから撤退し、星野リゾートの子会社、星野リゾート・トマムがトマムリゾートを一社運営することとなった（北海道内のリゾート産業は、星野リゾート：トマムリゾート、加森観光：サホロリゾート、ニセコ・ルスツ　　リゾート、三井不動産系：キロロリゾートに三分された）。

2005 年 12 月、星野グループは「冬山解放プロジェクト」、“冬山を楽しむ文化を創造・発信する、自然体験型リゾート”をその社是としていく。

2009 年、第 5 回大平洋・島サミット（日本・大平洋諸島フォーラム首脳会議）がトマムで開かれ、占冠村と星野リゾート・トマムが全面協力した（主会場：ホテルアルファ・トマム、メディアセンター：ザ・タワー、共同記者会見場：VIZ スパハウス、首脳宿泊施設：ガレリア・タワースイートホテル、など）。

2010 年、星野リゾート・トマムと北海道大学大学院環境科学研究科との共同プロジェクトが始まり、2011 年には両者（星野リゾート・トマムと北海道大学大学院環境科学院）の産学連携協定が締結された。「参加型の新しい地産地育プログラム」の開発、「環境負荷低減プロジェクト」の共同研究や、自然観察・体験学習を村外の小・中学生を主な対象とする、「雲の学校」「トマム雲海テラス」なども行なわれている。

⑧　**トマムリゾートと占冠村**　第 11 代の観音信則村長（在任 1977.4-1997.4）は、トマムリゾートの開発に村の命運をかけた。**リゾートによる「村のうるおい」**は、『占冠村百年史』によれば、村政財源の増加・交流人口の増加・就業の場の増加・人口の増加、また村民へのサービス提供（例えば会員制宿泊の特典、スキー場などの利用料割引）、全国的知名度の上昇に加え、イベント効果（ふるさと祭り、紅葉まつり、カキまつり、トマム秋の大収穫祭、子ども冬まつり）など、多様であった。民宿・ペンション群や、「異色の」躍動空間も生まれた（364-373 頁）。

トマム地区の生活環境整備　占冠村は、トマム・コミュニティセンター落成（役場トマム支所ほか多目的施設）、トマム地区簡易水道、下水道処理場の完成、トマム小・中学校改築落成、村占冠診療所トマムサテライト開設など、トマム地区の生活環境整備を図った。同時に中央地区でもコミュニティプラザ、ショッピングモール落成、占冠ヘリポート、デイサービスセンター開設、占冠村総合開発計画も開始をみた。

村人口の増加と頭打ち　1985 国勢調査では人口は 2,097 人で、1980 年の 31%増（世帯数は 632 から 1,114 に激増）。1990 国勢調査は 1985 年に比べ人口（2721 人）30%増、世帯数（1,673）50%増。住民基本台帳の数字では、表 4 に見るように、1993 年に人口、世帯数はピークを迎えた（2,054 人、1,020 世帯）。以後、人口、世帯数は減りだす。石勝線の占冠駅・トマム駅ができ、トマムリゾートが動き出す直前の 1981 年の人口を 100 とすると、ピークの 1993 年が 139、減り始めた 1995 年が 123、そして表には

表 4　住民基本台帳に見る人口変動（1981-1995 年）

	トマム以外	トマム	人 口 計 〔指数〕	世帯数	トマム（比率）
1981	1,384 (93)	99 (7)	1,483 (100) 〔100〕	480	38 (8)
1985	1,362 (87)	197 (13)	1,559 (100) 〔105〕	581	114 (20)
1990	1,334 (75)	437 (25)	1,771 (100) 〔119〕	711	242 (34)
1993	1,299 (63)	755 (37)	2,054 (100) 〔139〕	1,020	515 (50)
1995	1,266 (69)	560 (31)	1,826 (100) 〔123〕	861	366 (43)

出典：『占冠村百年史』366 頁

ないが、2000 年が 112、2002 年が 109 で、1981 年の水準に近づいている。占冠村はトマムリゾートと向き合って、今後の関係性を協議し直す時期なのかもしれない。

過疎化の進展と学校統廃合問題　最近の人口小ピーク時、1993 年の人口 2,054 人は、最大ピーク時の 1960 年を 100 とすると、44 という半数に満たない水準になる。しかも世帯数で見れば 121 にもなる。単身世帯者（独居高齢者を含む）や、子どものいない夫婦生活者が増えているものと思われる（ライフスタイルを云々するのではない）。子どものいる家族を含めて少子化が進み、かつ「帰村のない離村」状況が若い人たちだけに限らず、より広い世代に広がっていることの結果であろう。

こうした中で、占冠村の教育行政における大問題、小中学校の廃校・廃合問題が起きてきた。その実態は以下のとおり。

1962 年度末　湯ノ沢小学校廃校、占冠小学校に統合（字占冠地区）
1969 年度末　下苫鵡小中学校ホロカ分校廃校（トマム地区）
1974 年度末　新入小中学校廃校、占冠中央小学校・占冠中学校に統合（ニニウ地区）
1976 年度末　下苫鵡小中学校廃校（トマム地区）
1996 年度末　双珠別小学校閉校、占冠中央小学校に統合（双珠別地区）
　　⇒ 1998 年 双民館双珠別郷土資料室開所
2004 年度末　占冠小学校廃校、占冠中央小学校に統合（字占冠地区地区）
　　⇒ 占冠公民館字占冠分館としての機能は維持

現存する学校は、
占冠中央小学校（中央・ニニウ・双珠別・字占冠、2010 年度生徒数 39 人）
占冠中学校（1950 年度の開校以来、中央地区・双珠別地区・字占冠地区一円が学区。1975 年度よりニニウ地区も学区内とする。2010 年度生徒数 20 人）
トマム小中学校（1950 年度の開校以来、上トマム・中トマムを学区としたが、下苫鵡小中学校廃校後の 1977 年度よりトマム地区唯一の学校となる。2010 年度生徒数小学校 20 人、中学校 3 人）

なお、高等学校は（道立も村立も）設置されなかった。中卒後の高校進学先は富良野市・旭川市を含む上川学区、札幌市を含む石狩学区などを選べる。各種専門学校等は存在しない。

町村合併の破談と占冠の「自立」問題　町村合併破談の経過は以下のごとくである。2003 年 1 月、富良野圏域 5 市町村合併の任意協議会が、中富良野町の反対のため中断した（富良野市 25 千人、上富良野町 12 千人、中富良野町 6 千人弱、南富良野町 3 千人弱、占冠村 2 千人弱；広域圏全体で合わせれば約 48 千万）。中断れを受け占冠村は隣町南富良野町との合併に向け事務協議開始、同年 10 月に広域行政調査室設置（南富良野町は 8 月設置）。2004 年 5 月、南富良野町・占冠村合併協議会（法定協議会）を設置するが、2005 年に入り解散となった。

翌 2006 年 3 月、『占冠村の自立をめざして（集中改革プラン）』策定、2007 年春には『自立推進計画「協働型むらづくりの構築」』と『占冠村人材育成基本方針』策定。また 2007 年度に入り中村博教育長のもとに、社会教育委員の会（委員は公民館運営審議会委員を兼務）の委員長、山本敬介を策定委員会委員長として、『北海道占冠村第 5 次社会教育中期計画』策定（2008~2013 年度）。2009 年度からは『占冠村総合計画～自然体感占冠 Shimukappu/Hokkaido』（2009~2018 年度）の事業が開始されるが、前村長が辞任し、2009 年 9 月の村長選挙で中村博が初当選（第 16 代村長）、副村長に堤敏満を新任、翌 2010 年、教育長に藤本武を新任し、今日に至る。新社会教育中期計画の策定、また総合計画の見直しが目前に迫っている。そこに、本プロジェクトが来た。

村内の地区別計画の必要性　これまでの占冠村における自立計画、総合計画は、村の全体をマクロに取り扱っての計画づくりであった。しかし、社会教育委員の会（＝委員は公民館運営審議会）の『社会教育中期計画』策定に関わる議論の中に少し出てきていたように、村内を地区別に把握する議論も欠くことができないように思われる。村人口をとってみても、上の表 5 にあるように、「人口計」の動向における低減傾向の指摘ばかりでなく各地区別に見れば、この 10 年間、双珠別の人口は横ばい、中央地区は 2 割減なのに対し、字占冠地区は 4 割減、トマム地区は 5 割減を示す（ニニウ地区は「消滅集落」化）。それぞれの地区（占冠村では「行政区」の集合）ごとに、住民自治のあり方の、そしてそれらと関わる公民館のあり方の再検討が、いま、必要と成っていると思われる。

表 5　住民基本台帳に見る人口変動（2000 年～ 2012 年）

	双珠別	字占冠	中央	ニニウ	トマム	人口計
2000	**61 (4)**	**184 (11)**	**868 52()**	**2 (0)**	**543 (33)**	**1658 (100)**
〔指数	〔100〕	〔100〕	〔100〕	〔100〕	〔100〕	〔100〕
2009.07	**63 (5)**	**129 (10)**	**723 (58)**	**- (-)**	**323 (26)**	**1238 (100)**
〔指数〕	〔103〕	〔70〕	〔83〕	〔 - 〕	〔59〕	〔75〕
2010.01	**62 (5)**	**128 (10)**	**722 (59)**	**- (-)**	**315 (26)**	**1227 (100)**
〔指数〕	〔102〕	〔70〕	〔83〕	〔 - 〕	〔58〕	〔74〕
2011.01	**62 (5)**	**123 (10)**	**696 (59)**	**- (-)**	**301 (25)**	**1182 (100)**
〔指数〕	〔102〕	〔67〕	〔80〕	〔 - 〕	〔55〕	〔71〕
2012.01	**60 (5)**	**115 (10)**	**677 (59)**	**- (-)**	**288 (25)**	**1140 (100)**
〔指数〕	〔98〕	〔63〕	〔78〕	〔 - 〕	〔53〕	〔69〕

より具体的な課題の柱となる事柄は、以下のとおりである。

1）就業の場確保の問題　1980 年の村全体で見た就業構造は、『占冠村百年史』の表から計算すると、就業者計 830 人のうち、第一次産業 32 %（農 業 16 %、林業 16 %）、第二次産業 35 %（建設業 21 %、製造業 13 %）、第三次産業 33 %（サービス業 13 %、公務 9 %ほか）と、三分されていた。2000 年になると、就業者計 1,181 人のうち、第一次産業 8 %（農業 5 %、林業 3 %）、第二次産業 12 %（建設業 7 %、製造業 5 %）、そして第三次産業は実に 81 %（サービス 61 %、卸小売・飲食 8%、公務 7 %ほか）となる。

2000 年の女性の場合は、第三次産業 83%（サービス 62%、卸小売・飲食 13%ほか）、第二次産業 8 %（製造業 6%ほか）、第一次産業 8&%（農業 7%ほか）。男性の場合もほぼ同様で、第三次産業 79%（サービス 61%、公務 8%ほか）、第二次産業 13 %（製造業 9%ほか）、第一次産業 7&%（農業 4%ほか）であった（『占冠村百年史』227 頁の表より計算）。残念ながら、地区別の数字は未見である。

サービス業の業務内容にまで入った分析が必要で、そのことは職業能力形成の問題と関わる。サービス業はおそらく中央地区やトマム地区と密接な関連をもつであろうが、宇占冠や双珠別（さらにはニニウ）地区の“再開発”には他の要素が必要となる。占冠における就業の場の確保（と高度化）に、いったい何をすればよいか、地区住民、役場職員や村会議員の、ふらの農協（占冠出張所）、富良野地区森林組合、旭川信用金庫（占冠出張所）、星野リゾート・トマム等々との、“熟議”が必須である。

2）生活の質向上の問題　私たちは本プロジェクトの一環として、他の 3 市町と共通する「むらづくりアンケート調査」をおこなった。その内容は後述するが、そこには主に「生活の向上」に関わる要望・意見が出されている。そうしてより根底的には、“むらづくり”は「村の人口増加がメルクマールになるのではない。村びとの生活における質的な向上が大切だ」という意見が、村づくりのリーダーの間から出ていると聞く。たいへんに大切な論点なので、しっかりとした“熟議”が望ましい。

高齢化率は 2000 年に 15.3%だったものが、2010 年には 24.4%となった。富良野広域圏の市町では、上富良野町 25.3%、富良野市 26.3%、中富良野町 29.3%、南富良野町 30.2%のいずれよりも低い（ちなみに全道の最低値は札幌市の 20.2%、最高値は夕張市の 44.4%）。

3）教育と文化の問題　第 3 に生涯学習としての学校教育の位置づけ（例えば、村教育委員会が熟慮しているコミュニティスクール計画など）、それらと連動する、しかも地区ごとの特色ももった“成人教育”の充実が、現状を打開していくための推進力たりうる。現に占冠村の校民間事業「自主創造プログラム」（後述）は、そうした展望を提起している。またトマムリゾートと村民との交流（例えば「雲の学校」に参加する小中学校生と村の子どもや大人との交流）などは、村にある“資源”の活用として重要である。

（以上、小林甫）

２．当事業に取り組むに至った経緯

（１）現在抱えている地域（公民館・社会教育）の課題は何か。
具体的に３点程度を提示し、現状認識を示す。

○　本村面積の 94 %が森林で、村の産業は林業、農業が支えて来たが、木材需要の低迷、米の生産調整などにより従事者が減少している。その様な中、1981 年にＪＲ石勝線の開通、1983 年にリゾートホテル・スキー場がオープンし活気づきいたが、人口の推移を住民基本台帳ベースで見てみると、1993 年 5 月、バブルの絶頂期とも重なるのだが、2,124 人をピークに減少に転じ、2012 年 1 月末ではマイナス 46 %の 1,140 人にまで減少した。その要因として、リゾート企業の倒産・再スタートによる正規職員の削減、高齢化の加速・農業後継者不足による離農など、そして若者が働くことのできる雇用の場を確保できない状況にある。

また、村には滞在出来る福祉施設がなく、診療所はあるが、総合病院は車で 1 時間の富良野市まで行かなければならない。こうした中で本村には滞在できる福祉施設もなく高齢者の流失も始まり出した。近年、高齢化の加速に伴い、より病院に近く、高齢者施設のある他市町村への転出者も出てきている。

一方、高速道路の建設時には従事する人達が増え、宿舎も建ち並び商工業者に潤いをもたらしてきたが、道東自動車道占冠・夕張間の全線開通により、占冠は通過点となったため、道の駅への立ち寄り客も減少した（マイナス 70 %）。建設関連の従業者の雇用減もある。

しかしながら、特急列車が止まる２カ所の駅と、２カ所の高速インターチェンジと、トマムリゾーを持つ村として、何か対策（施策）ができないか模索していた。

★　資料１　人口減少率　道内１位　全国３位（本資料末を参照）

○　公民館活動は現在、４カ所の公民館・分館を設置し活動を行っているが、今まで、その活動内容は、主に、各種教室・講習会等が行政主導で行われてきたようである。2005 年度より、地域住民が施設を利用し自主的に活動していくよう「自主創造プログラム」を掲げ、事業展開を進めている（後述）。しかしながら、地域住民の公民館に対する認識があまり高くはないこと、とりわけ、いつでも「集い」「語る」ことの出来る、“開かれた公民館”となってこなかったので、地域に密着した公民館づくりに取り組むこと必要性があった。

○　これまで社会教育を担当している職員は、役場職員ということもあって、人事異動により定期的に異動となるため、住民のニーズと地域の実情に即した事業展開ができ

ていない状況であった。今年度から、兼務ではあるが、社会教育主事を配置することができたので、今後に向けて更なる事業展開ができるよう、育てて行く必要がある。

○　少子高齢化により、これまで各地区で行ってきた行事・事業に取り組めないところが出てきている。また、各スポーツ団体が独自に行ってきた試合活動もできなくなって来ている。

★　資料２　少子化・過疎化の子ども・村民への影響
①たそがれ野球・朝ソフト・カーリング場閉鎖・スケートリンク閉鎖
②中学校生徒の減少によりバレー・野球等の部活動が困難な状況
③子ども会活動の低迷（不参加）
④各行政区対抗の村民スポーツレクリェーション大会における困難

○　こうした中、今回のプロジェクト事業への参加打診を受け、いま一度、原点に立ち返り、「明るく元気に暮らせる村」づくりのため、公民館活動として、住民と役場職員の相互間の熟議を実施して、その解決策への手がかりを探ることとした。

★　資料３　占冠村の公民館事業　（2006、2007、2008、2009、2010 年）
★　資料４　公民館事業参加者の属性（2010 年度）
★　資料５　公民館各種事業の年次的推移（2006~2011 年）
★　資料６　占冠村教育委員会『占冠村第 5 次社会教育中期計画』（2008）の概要

（2）課題解決のために取り組むべき方策は何だったか。
当事業において重点的に推進しようとしたテーマは何だったか。

○　役場職員の意識改革

住民から役場の職員は「挨拶が出来ない」「住民に対して不親切である」と、役場職員にたいして指摘がなされてきた。そのつど職員に対して村長から訓辞などで改善するよう指導しているが、いまだに言われ続けている。

例えば、役場に住民が入って来て感じることは、下を向いてパソコンを見ているばかりで、きちっと目をみて挨拶をしないし、役場の雰囲気が暗くて入りづらい。

また、全員ではないが、私たちとすれ違っての朝・晩の挨拶、電話での受け答え、呼ばれての返事がないなど、基本手的な接遇ができていないと感じられている。

こうしたことから、役場職員（公務員）としての自覚をしっかり持って、住民のために仕事をしていることを認識させる必要があったと思う。

（3）事業に取り組む際の協力体制について
従来の体制以外に支援を受けた機関や組織があれば記載する。

○　本事業は教育委員会所管事業ではあるが、役場全職員を対象としたので、長部局（村長・副村長）に協力を依頼するとともに、三役の中でも認識を共有しながら、今後の村政の進め方についての協議を重ねてきた。
○　北翔大学・北海学園大学に現調査並びにアンケートの回収・分析調査、熟議を担当していただいた。

○　北翔大学には、本事業による「事前現地調査」「双珠別地区熟議」を実施していただき、「事前現地調査」では谷川教授をはじめ４名の学生が双珠別地区に入り、地域住民との懇談会、役場職員との高齢者対策の実態調査、懇談会が行われた。住民や公民館分館長との懇談会では、占冠に移り住んだ頃の話や、双珠別の自慢・苦労話などについて学生と語り合った。二軒の農家への飛び込み調査も実施された。役場の職員とは、広報・総務・産業・教育委員会職員の７名と、聴き取り調査と懇談が行われた。
「双珠別地区熟議」では、谷川教授をはじめ 4 名の学生が双珠別地区に入り、9 名の住民と二班に分かれ、「双珠別地区の課題」「双珠別地区の高齢者の生きがい」「今後の占冠むらづくり」につて熟議が行われた。

○　北海学園大学は、本事業による「村内状況視察」「地域住民・役場職員との意見交換」「トマム地区熟議」を実施していただいた。「事前現地調査」では内田教授をはじめ 13 名の学生が来村し、村内の各地域や諸施設を視察した。
「地域住民・役場職員との意見交換」では、三日にわたり村職員・住民（農業後継者・移住された方）との意見交換や視察を行った。トマム地区においは、アンケート調査の聴き取りや地域住民・町内会長・農業者との意見交換が行われた。
「トマム地区熟議」では、内田教授をはじめ 3 名の学生がトマム地区に入り、アンケート調査から分かったこと、内田ゼミナールの地域研修「占冠の現状とこれから」についての報告、11 名の住民と二班に分かれ、「トマム地区の課題・課題解決」につての熟議が行われた。

（4）その他特記事項

○　教育委員（学校教育）の立場で考えますと、開かれた学校という意味においては、教育現場の教職員との熟議も必要となってくると思われる。こうした意味において、今後、行おうとしている「コミュニティー・スクール」も、そのキーワードとなると思う。いずれにしても、今回の取組が一つの切っ掛けとなり、今後の村づくりに少しでも役立てていけるよう、（一つの手段として）活用し、繋げて行くことが必要であると考えるしだいである。

（以上、藤本武）

3．地域の現状把握（アンケート調査結果を踏まえて）

（1）アンケートに見られる地域の特質

地域の強みと弱みを分析する。最終的には地域間の比較に繋げる。

（2）各設問の結果と解説

占冠熟議アンケートの分析（職員／双珠別／トマム）

①アンケート調査回答者の男女別年齢分布

	役場職員			双珠別			トマム			回答者計		
	女性	男性	小計	女性	男性	小計	女性	男性	小計	女性	男性	小計
10~20代	1	2	3	3	1	4	6	6	12	10	9	19
	(6)	(6)	(6)	(15)	(6)	(11)	**(21)**	**(16)**	**(18)**	(15)	(11)	(13)
30~60代	15	29	44	8	7	15	18	27	45	41	63	104
	(94)	**(94)**	**(94)**	**(40)**	**(43)**	**(42)**	**(62)**	**(71)**	**(67)**	(63)	(74)	(69)
70~90代	-	-	-	9	8	17	5	5	10	14	13	27
	(-)	(-)	(-)	**(45)**	**(50)**	**(47)**	**(17)**	**(13)**	**(15)**	(22)	(15)	(18)
小　計	16	31	47	20	16	36	29	38	67	65	85	150
	(100)	(100)	(100)	(100)	(100)	(100)	(100)	(100)	(100)	(100)	(100)	(100)

②占冠に来住した世代

	役場職員			双珠別			トマム			回答者計		
	女性	男性	小計	女性	男性	小計	女性	男性	小計	女性	男性	小計
本人の代	13	21	34	4	3	7	20	31	51	10	9	19
	(81)	**(68)**	**(72)**	(20)	(19)	(19)	**(69)**	**(82)**	**(76)**	(15)	(11)	(13)
父母の代	2	4	6	8	6	14	4	5	9	41	63	104
	(13)	(13)	(13)	**(40)**	**(38)**	**(39)**	(14)	(13)	(13)	(63)	(74)	(69)
祖父母の代	-	4	4	3	2	5	1	2	3	14	13	27
	(-)	(13)	(9)	**(15)**	**(13)**	**(14)**	(3)	(5)	(4)	(22)	(15)	(18)
祖父母以前	-	2	2	2	1	3	-	-	-	-	-	-
	(-)	(6)	(4)	(10)	(6)	(8)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
不明	1	-	1	3	4	7	4	-	4	-	-	-
	(6)	(-)	(2)	(15)	(25)	(19)	(14)	(-)	(6)	(-)	(-)	(-)
小　計	16	31	47	20	16	36	29	38	67	65	85	150
	(100)	(100)	(100)	(100)	(100)	(100)	(100)	(100)	(100)	(100)	(100)	(100)

③地域行事・ボランティア活動への参加

	役場職員			トマム			双珠別			回答者計		
	女	男	計	女	男	計	女	男	計	女	男	計
	16	31	47	29	38	67	20	16	36	65	85	150
ふるさと祭	**12**	**26**	**38**	**17**	**15**	**32**	**14**	**11**	**25**	**43**	**52**	**95**
トマム大収穫祭	2	1	3	**8**	**9**	**17**	-	-	-	10	10	20
村民レク大会	**9**	**20**	**29**	8	8	16	6	5	11	**23**	**28**	**51**
総合文化祭	**7**	**14**	**21**	7	3	10	**10**	**9**	**19**	**24**	**17**	**50**
鬼峠フォーラム	-	3	3	-	1	1	-	1	1	-	4	4
住民懇談会	**8**	**13**	**21**	**4**	**13**	**17**	**5**	**8**	**13**	**17**	**34**	**51**
行政区の集まり	3	11	14	**6**	**13**	**19**	**9**	**8**	**17**	**18**	**32**	**50**
近隣の会合	1	3	4	1	5	6	**9**	**5**	**14**	11	13	26
神社祭典	3	3	6	**18**	**21**	**39**	**11**	**8**	**19**	**32**	**32**	**64**
盆の行事	2	4	6	5	1	6	3	1	4	10	6	16
文化サークル	2	1	3	4	-	4	-	1	1	6	2	8
スポーツサークル	**3**	**10**	**13**	4	6	10	-	2	2	7	16	23
学校ボランティア*	-	4	4	4	6	10	-	1	1	4	11	15
その他	-	-	-	-	-	-	-	2	2	-	2	2
	52	113	165	86	102	188	68	63	131	206	278	484
不明・記入なし	-	-	-	2	1	3	-	-	-	2	1	3
参加しなかった	2	4	6	-	7	7	1	1	2	3	12	15

(*)学校支援地域ボランティア

④占冠村内への定住志向

	トマム			双珠別			役場職員		
	女	男	計	女	男	計	女	男	計
	28	38	66	20	16	36	15	31	46
1) これからもずっと	6	11	17	12	11	23	2	8	10
住み続けたい	(21)	(29)	(26)	**(60)**	**(69)**	**(64)**	**(13)**	(26)	(22)
2) どちらかといえば	8	15	23	4	2	6	3	6	9
住み続けたい	**(29)**	**(39)**	**(35)**	(20)	(13)	(17)	**(20)**	**(19)**	**(20)**
3) どちらかといえば	3	1	4	-	-	-	1	2	3
住みたくない	(11)	(3)	(6)	(-)	(-)	(-)	(7)	(6)	(7)
4) 住みたくない。	1	-	1	-	-	-	2	4	6
引っ越したい	(4)	(-)	(2)	(-)	(-)	(-)	(13)	(13)	(13)
5) いちがいには	6	5	11	2	2	4	4	7	11
いえない	**(21)**	**(13)**	**(17)**	(10)	(13)	(11)	**(27)**	**(23)**	**(24)**
6) ノー・アンサー	4	6	10	2	1	3	3	4	7
(選択・記述なし)	(14)	(16)	(15)	(10)	(6)	(8)	**(20)**	(13)	(15)

⑤村への愛着度と現在の生活満足度と近未来の定住志向との関係

	トマム住民 (28+38)	役場職員 (15+31)
◎◎◎	2＋3	1＋1
◎△◎		0＋4
△◎◎	1＋0	
△△◎	1＋3	0＋2
△▲◎		1＋1
▲◎◎	1＋0	
▲△◎	0＋1	
▲×◎	1＋0	
◎◎△	0＋2	
△△△	4＋7	1＋4
△▲△		1＋1
▲△△	2＋1	
◎◎▲	0＋1	
◎▲▲	1＋0	0＋1
△△▲	1＋0	1＋0
△▲▲	1＋0	0＋1
▲△▲		0＋1
◎◎●	0＋1	
◎▲●		0＋1
▲△●		1＋0
▲▲●		0＋1
▲●●		0＋1
●●●	1＋0	

	トマム住民 (28+38)	役場職員 (15+31)
◎◎＃	1＋0	
◎△＃	1＋1	0＋3
◎×＃	1＋0	
△△＃	2＋2	0＋1
△▲＃	0＋1	1＋1
▲◎＃	0＋1	
▲△＃		0＋1
▲▲＃		2＋1
▲●＃	1＋0	
◎△×		0＋2
△△×	0＋1	2＋2
△▲×	1＋0	
▲▲×	1＋1	1＋0
▲●×		1＋0
×××	2＋2	

	(a)	(b)	(c)
◎	11	8	8
△	11	13	4
▲	14	10	5
●	1	4	6
×	1	3	6
＃	-	-	9

（注）符号の「○○○」のうち、最初の「○」は（a）占冠への愛着度、中の「○」は（b）今の生活への満足度、最後の「○」は（c）将来への定住志向を表す。

（a）愛着度：「とても愛着あり」（◎）、「少し愛着あり」（△）、「あまり愛着ない」（▲）、「全く愛着ない」（●）。b）生活満足度：「とても満足」（◎）、「やや満足」（△）、「やや不満」（▲）、「とても不満」（●）。（c）定住志向：「ずっと住み続けたい」（◎）、「どちらかといえば住みたい」（△）、「どちらかといえば住みたくない」（▲）、「住みたくない、できれば引っ越したい」（●）。

それぞれの単独の分布は表の欄外に示したようになり、（a）愛着は半数以上がもっていない。（b）生活満足度ではわずかだが下方にスライドする。（c）定住志向では△と▲とがばらけ、＃また×や●の増加に繋がるようである。

これら（a、b、c）の組合せ（「○○○」）によって、定住志向を規定する要因を探ろうとしたが、検討結果の表出はまたの機会となってしまった。

⑥役場職員の生活要求（特徴的な意見を抜粋する）

女性

01 ●村内での飲食店・ショップの不足。コンビニがない。
02 ●腐ったものやかびたものが売っている。
03 ●人口減。雇用対策。
04 ●人口の流出。
05 ●過疎化が心配。
06 ●日用品以外の買い物や病院へ、近郊の町へ行く交通手段等（時間や経費がかかる）。

男性

01 ●遊べるところが何もない。本屋、服屋、等がない。若者の働けるところがない気がする、若者がいなくなっていくのはそのせい。
02 ●店が少ない。若い人の就職先がない。医療・福祉。
03 ●コンビニもなく、スーパーは 7 時 30 分で終わってしまう。ちょっとした買い物も富良野、旭川まで行って、医薬品などもすぐにかえない。住むところが少ない、住宅は有無を言わさず決めなくてはならない、もっと改善してほしい。老人のグループホームみたいのあったらいいと思います。老後に村ですごすことが出来ないのが実体。
04 ●過疎化。雇用場所が少ない。
05 ●高齢化。若い世代の離村。
06 ●医療・福祉（心配）。商店等が少なく、日常生活が不便。
07 ●人材不足。第一次産業の衰退。
08 ●将来の医療や福祉（医師の確保など）。人口の減少による地域経済の衰退。役場職員の人材確保。
09 ●［悪い環境］自然災害。自主防災体制。医療。地域コミュニティの人間関係。子どもの健全育成。
10 ●人口減。
11 ●人口減抄。医療。福祉。
12 ●［悪い環境］自然災害。自主防災。医療。買い物。
13 ●［特に悪い環境］地域コミュニティの人間関係。

⑦トマム住民の生活要求

女性

01 ●病院が心配。
02 ○保育所に待たずに入れる。自然が豊か。住民仲がいい。
03 ●若い人が少なく、老人が多い。雇用場所が少ない。
04 ○美しく、厳しい自然。大自然の中で暮らしながら、リゾートのレストランやスパ、エステなど、都会的な体験もできる。北海道のほぼ中心にあり、各地域へ足をのばしやすい。

05 ●ヨガや太極拳など、誰でもできるボディヒーリング。 食べることは体をつくること！！ せっかく美しい空気のところに住んでいるのに、無添加食品や調味料、有機産物が手に入りません。アクロビオティックやスローフードを村で推進して、アンテナショップのようなところがあれば利用したいし、働きたい！！ 村野商店が観光客もよびこめるようなお店になればいいな、センスの良い商品や陳列など、都会から学ぶことも必要なのでは… また自然食品を使った料理やケーキが味わえる CAFE なんかもあったらいいな。

06 ○人数が少ない分、地域のまとまりが良い所。子供達の名前をほとんど知っている事

07 ○自然環境。星がキレイに見える。トマムは人間関係が良い。

08 ●医療関係が不十分（緊急の時は、間に合わない）。人口の減少。

09 ●トマムリゾートの施設を、住民はもっと気軽に利用できたら良いと思います（住民割引など）。

10 ●夏場には交通事故、生活道路が［悪い］。

11 ●活気が感じられない。

12 ●人口減少。

13 ●高速道路が全線開通したあとの集落。虫。

14 ●人口が年々減少していること。

15 ○自然がきれい。近所づきあいが良い。水がきれい。

16 ●地域の高齢化。

17 ●人口が減って心細くなる事。

男性

01 ●高校へ行くバスがあったら…。（13 歳）

02 ●良い先生があまりいない。（15 歳）

03 ●過疎化が進んでいる。

04 ●問 10 の選択肢に「行政職員や教員などがむらづくり活動に参加協力する」とあるが、《なぜここに教員が入るのでしょうか？ 他地区では考えられません》

05 ●緊急時（病気になった場合など）対応出来る施設がない。

06 ●人口の減少。

07 ●コンビニがないなど、買い物。病院。［その他の意見］コンビニはほしい。

08 ●医療機関が不十分であること。

09 ●１日、１回しかない除雪。田舎過ぎて、配送料等が高い事。

10 ●医療機関。買い物。公園・緑地。自主防災組織。地域コミュニティの人間関係。子どもの健全育成。

11 ●夏場：学校の校庭以外に広場などがほしい。

12 ●緊急時の病院が近くにない。自然災害時の村の体制や備蓄品なども。これといった村の産業や特産品がない。個人がやっているものはあるかもしれないが…個人レベル…。

13 ●人口が減っていく。働く場所がない。

14 ●人口の減少。自動の減少。財政難。

15 ●雇用の場所が少ない。若い人が少なく、老人が多くなっている。

16 ●人が減って村の行政がなりたたなくなる。

17 ●人口減少化が進んでいる事。企業誘致が進んでいない事。

⑧役場職員と村民・村政

女性

01 ●行事や取りくみなど全て行政に頼る傾向が多い（準備・後片づけ tec)。
02 ●人のつながりがつよすぎるところ。新しいものにけいかいするところ。雇用の場がないところ。
03 ●変な人がたくさんいる、うわさ好き。なんでも人まかせ、というか行政まかせ。自主性がない
04 ●ウワサが広まること。
05 ●独自の地域性。

男性

01 ●水害。行政だのみの体質。
02 ●土地柄、風土的な問題なのか、地域を盛り上げる元気な人がいない（むらづくり等を含めて)。何かと役場が頼られ、自立心がないのか、人材が育たない地域性のものなのか分からないが…。人脈が薄い。アイディアや発想を求めるためのネットワークや外部の繋がりが今後、不可欠。商工業者等含めて、むらづくりに熱意が欲しい。隣町の南富〔南富良野町〕と比べると、非常に温度差を感じる。役場に頼りきりで自立心がないように思える。住民、地域が一体となったむらづくりが盛り上がっていければと思う。
03 ●年長者は仲があまり良くない。若年者にとって色々と挑戦できるような、環境がほしい。
04 ●人間関係がわずらわしい。あまりにも他人に干渉しすぎる村人 ← 適度な距離感がわかっていないような…。足のひっぱりあい ← あまりにもひどい…。後進を育てる環境がこの村にはない。［悪い環境］地域コミュニティの人間関係。
05 ●各種委員や役員の「なり手」がいない。地区間や団体間で、人間関係が悪い（相容れない姿勢がありありで…)。
06 ●人材不足。第一次産業の衰退。
07 ●普段の生活に必要な物がそろわない。サテライトはあるがもっと大きな病院があれば良い（せめて昔みたいに毎日やってほしい)。高速道路代をただにしてほしい（または値下げしてほしい)。
08 ●将来の医療や福祉（医師の確保など)。人口の減少による地域経済の衰退。役場職員の人材確保。［悪い環境］自然災害。自主防災。医療。地域コミュニティの人間関係。子どもたちの健全育成。
09 ●人間関係。
10 ●閉鎖的。［特に悪い環境］買い物。公園・緑地。地域コミュニティ の人間関係。

⑨トマム住民と村民・村政

女性

01 ●トマムは「占冠村」ではない気がします。

02 ●子供が少ない。中央体質（トマム⇔中央の連携がとれてない）

03 ●トマムの住民に対して対応がつめたい。占冠村から工事を頼んでも（同じ村内なのに）出張費がかかる（トマムから富良野高校へ行くバス通があるとありがたい）

04 ●［特に悪い環境］地域コミュニティの人間関係。買い物。公園・緑地。生活道路。

05 ●変な村意識、仲間意識が強い。色々な意味で占冠の人達はトマムを差別してる。人口が減っている。

06 ●占冠とトマムの地域の隔たり。占冠とトマム地域の格差（同じサービスを受けられない）。赤字を出している施設を見直しなどセズに、ズルズルつづけている所。

07 ●各地の住人、公的機関、事業所等と連絡を取っていこうという気があるのか、疑問。

男性

01 ○自然環境がいい。学年問わず遊べる。（12歳）

02 ○自然がたくさんある。仲が良い。（15歳）

03 ○村の人達がほとんど顔見知り。

04 ○自然が多いところ。人びとのやさしさ。

05 ●占冠村にはすばらしい資源や財産があるが、気付いていない人が多い。

06 ●小さな村の割には、非協力者が多い事。

07 ●トマムからも富良野までのバスを出してほしい。なぜ中央からはあるのか？ 差別だ！！

08 ●占冠村といっても、トマムと本村とはぜんぜんちがうこと。

09 ○自然。住民関係。

10 ●地域差が大きい。障害者支援。

11 ○新たなまちづくり活動の目が出てきて、活動の輪が広がりつつある。

12 ●住民が自ら培ってきた能力を活用し、住民参加によって、住民に出来るサービスを担うという、住民の役割意識が全体化されていないことが心配。

13 ●老人・福祉政策が全ったく出来ていない。地域間格差があり過ぎる。

14 ●将来の村の姿。過疎化、商店の閉鎖。

15 ●中央とその地域の行政サービスの差があり過ぎ。

16 ●今だにこの様なアンケートを出している事。村自体で考えてるものと、村民の間でギャップを感じる。少数意見が陽の眼をみない。風とおしの悪い村だと思う。見分をもっともっと広げ、占冠村として出来るもの…。

17 ●役場職員と村民のつながり、今後どうなるのか？

⑩「むらづくり」の主体、自分の関わり方

表 「むらづくり」の主体、および自分の関わり方

主体（中心） → 自分の関わり方	双珠別住民	トマム住民	役場職員
01 地域と村・道・国で → 自ら進んで参加する		1＋1	0＋1
02 地域と村・道・国で → 働きかけあれば参加		**2＋3**	0＋3
03 地域と村・道・国で → あまり関心がない		0＋1	
04 地域と村・道・国で → 参加するつもりはない			
05 地域と村・道・国で → ＮＡ		1＋0	
06 地域の住民が進める → 自ら進んで参加する			
07 地域の住民が進める → 働きかけあれば参加		**0＋4**	**0＋4**
08 地域の住民が進める → あまり関心がない	2＋0		
09 地域の住民が進める → 参加するつもりはない	1＋0		1＋0
10 地域の住民が進める → ＮＡ		0＋1	
11 住民主体で行政支援 → 自ら進んで参加する		**3＋4**	0＋2
12 住民主体で行政支援 → 働きかけあれば参加	1＋2	**9＋11**	**9＋11**
13 住民主体で行政支援 → あまり関心がない	0＋1	1＋1	2＋1
14 住民主体で行政支援 → 参加するつもりはない	0＋1	1＋0	
15 行政主体で住民協力 → ＮＡ	1＋0		0＋1
16 行政主体で住民協力 → 自ら進んで参加する	1＋1	0＋2	0＋1
17 行政主体で住民協力 → 働きかけあれば参加	**1＋6**	**4＋3**	**2＋2**
18 行政主体で住民協力 → あまり関心がない	**7＋2**	1＋0	
19 行政主体で住民協力 → 参加するつもりはない			
20 行政主体で住民協力 → ＮＡ			

注1 数字の左側は女性の人数、右側は男性の人数。

注2 上の 20 以外の組み合わせ（例えば、「主体」が「その他」や NA であるもの）は、双珠別住民で8件、トマム住民で9件、役場職員で4件があった。

なお、後述の、「役場職員熟議」報告、「双珠別地区熟議」報告、「トマム地区熟議」 報告をも参照されたい。

（以上、小林甫）

４．実施した事業内容

（１）事業プログラムの詳細

事業の流れが把握できるように、時系列でまとめる。

年　月　日	内　　容	場　所
平成２３年 ５月１１日	事前準備打合せ 出席者 ・小林甫、内田和浩、谷川松芳、成田みえ（公民館協会） ・藤本武（占冠村教育長）、小尾雅彦（教育次長）	札　幌　市
５月　末日	「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」 における実証的共同研究事業計画書及び経費計画書を文科省へ提出	東　京　都
６月２９日 ～ ３０日	事前準備打合せ並びに懇談（事業計画・意見交換） 出席者 ・小林、成田、吉崎（公民館協会連携講師） ・占冠村中村博村長、堤敏満副村長、藤本教育長、小尾教育次長 ・双珠別の相川（分館長）、伊藤（イトウ・アイリス・ガーデン）	占　冠　村
７月１２日 ～ １３日	北翔大学「事前現地調査」 谷川教授ほか学生９名来村 実施内容 ・双珠別地区内視察 ・高齢者との懇談　地域住民５名 ・相川双珠別分館長との懇談 ・役場職員意識調査、懇談（役場職員７名）	占　冠　村 双珠別地区
７月１８日	「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト事業」 北海学園大学内田教授ほか学生 13 名来村 ・村内状況視察	占　冠　村 村内全域
８月２４日	「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト事業」 むらづくりアンケート調査の実施 対象　・双珠別地区　・トマム地区　・役場職員	占　冠　村 双珠別地区 トマム地区
８月２６日 ～	「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト事業」 小林、成田、関福生（新居浜市社会教育課長）来村	占　冠　村

２７日	実施内容 ・地域活動に関する意見交換 ・関氏の公民館活動に関する地域講演会（20名参加） ・村内状況視察 ・懇談（宿泊：中央地区、トマム地区）	
9月　5日 ～ 7日	「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト事業」 北海学園大学内田教授ほか学生１３名来村 実施内容 ・村、役場職員、団体との意見交換 ・アンケート回収、聞き取り調査（トマム地区） ・農業後継者、村内移住者との聞き取り調査	占　冠　村
9月１６日	「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト事業」 小林教授・成田さん 占冠村教育長・教育次長 ・アンケート調査の内容協議	札　幌　市
１１月１６日	「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト事業」 小林教授・内田教授・谷川教授・成田さん来村 実施内容 ・役場職員との意見交換（村長以下１６名参加） ・アンケート調査の集計内容説明を受ける ・今後の、熟議の進め方、スクジュールについて協議する	占　冠　村
１１月２１日	「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト事業」 ・庁内連絡会議（対象　特別職・管理職）において、職員による熟議の開催方法について協議を行う	占　冠　村
１２月　6日	「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト事業」 ・第１回　役場職員による熟議の開催 副村長・教育長ほか１６名参加	占　冠　村
１２月　7日	「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト事業」 ・第２回　役場職員による熟議の開催 教育長ほか１３名参加	占　冠　村
１２月　9日	「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト事業」 ・第３回　役場職員による熟議の開催 教育長ほか１１名参加	占　冠　村

１２月１９日	「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト事業」 双珠別地区「熟議の開催」 ・北翔大学　谷川教授ほか学生４名 ・住民　９名参加　２班に分かれ実施 職員熟議につき協議（藤本、小林） 村長・副村長・教育長　　小林教授・成田さんによる協議	占　冠　村 双珠別地区
１２月２１日	「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト事業」 トマム地区「熟議の開催」 ・北海学園大学　内田教授　外学生３名 ・住民　１１名参加　２班に分かれ実施	占　冠　村 トマム地区

（２）事業によって得られた成果は何か
事業展開によってどのような変化が地域に生まれたか、具体的に記述する。
地域風土の変革、新規事業の創造、人材の発掘、新たなネットワークなど

占冠の熟議は、「役場職員熟議」「双珠別地区熟議」「トマム地区熟議」からなる。以下、それぞれごとに責任者の方々の総括的な文章を載せる。

（２-１）役場職員熟議について

○　職員との熟議（出席状況・意見内容・今後の課題）
3 回に分けて熟議を実施した。出席者は、役場職員三役を除いて 30 名、消防職員 4 名であった。欠席者は 15 名で、管理職は 8 名中 4 名の出席であった。

○　今回の事業をとおして感じたことは、今までも三役（村長・副村長・教育長）において個別案件についての協議は実施していたが、「むらづくり」という一つのテーマに沿って話し合った。そして、お互いに共通の認識を持ち、「これからのむらづくり」「職員とどのように向き合っていくのか」「組織をどのように動かしていくか」等々、本音で議論することができた。

○　熟議の中で、出された意見は、
・アンケートの結果から見ると、役場職員はもっと村に愛着をもって、業務を遂行して欲しい。
・職場の中での会話がない。

・行政主導ではなく、住民からの要望・行動に、村がサポートする体制作りが必要である。
・役場自体が元気にならなければ村も元気にならない。
・重点（施策）をしぼったお金の使い方をして欲しい。

・人口を急に増やすことは出来ないが、これ以上減らないよう維持することが必要、現状でいかに幸せに生きることが出来るかが大切で、埋もれているマンパワー（知識や才能）を引き出し活用する。
・村の良いところを積極的に外部にアピールし、逆に悪いところをどう解決ていくか考える必要がある。
・村で育った子ども達が村から出ていかないようにするにはどうしたらよいか。
・村にないもの（施設も含め）をどう補っていくのか。
・働く場所の確保、リゾートをどう活用（連携・職員交流）していくか。
・トマム地区と中央地区の関係がこれからも課題である。

・一度村から出て行った人が、老後は占冠に戻って生活したいと思えるむらづくりをしなければならない。
・老後を安心して暮らせるよう福祉の充実が必要。
・福祉の問題は、まちづくりにとって、切っても切り離せない。
・足のないお年寄りの交通手段の確保。　　等々・・・・

○　職員一人ひとりが「むらづくり」に対して何らかの意見をもっているが、今までhaその意見を述べる機会が無かった。今後どのように意見を聞く場を確保していくか。高齢化社会に向かって行く中で、福祉施策の充実・村の良い所をのばし、悪いところをどう改善するか、働く場所の確保という意味でもリゾートとの関係強化を図ることが重要になってくると思われる。

○　今回は、意見を聞くにとどまったが、今後はそれらの解決に向けて職員と熟議しながら対応して行かなければならない。また参加できなかった職員の考えも引き出し、全員参加（共通認識と理解）により進めなければならない。
　そして何よりも、管理職が危機感を持って職員を育てることが肝要である。毎週月曜日に行っている「庁内連絡会議」の中で議論していかなければならないと思う。

○　住民の村に対する思い（現在・未来）を知ること
　・どのような村づくりを望んでいるのか
　・行政、役場職員に何を求めているのか

　今回、トマム・双珠別の二つの地域で「アンケート調査」、「熟議」を実施したが、地域による違いが見られた。双珠別地区は昔からの住民が、農業を営み現在に至っている。当然、高齢化による離農・子どもの減少という現実に直面し、地域の存続が危

惧され、老後の生活不安（施設・足の確保）を感じている。反面、地域のつながりという点からみると、住民が減少していることもあって住民のつながりが深く、皆が協力し、助け合って生活している。

トマム地区は、リゾート施設の所在地ということもあって、少数の昔からの住民と、大半を占めるリゾー関連に従事する他地域からの住民に分かれ、中央地区（役場所在地）との格差を感じてきた（バスの運行形態、診療所など）。

両地区に共通して、雇用の場の確保を求めている。こうした現状を踏まえ、役場としてどう対応していくのか、財政的にも大変難しい問題ではあるが、避けては通れないので、住民と向き合いながら、できることとできないことがある中で、課題解決に向けて議論していかなければならないと考える。

○　過疎化は他人事ではない

当然のことではあるが、人口が減少していくことは村存亡の危機であり、ひいては私たちが職を失うということでもあるから、ただ高い給料をいただいて自分の仕事だけをしていれば良いという時代ではなくなった。それゆえ職員全員が知恵を出し、汗をかいて、自分の職種を超えてすべての分野において、住民のために働くという自覚も持たせなければならない。

○　今後はさらに一歩進め、次代を担う職員を育てること、職員個々が持っている個性を生かして、担当部署を超えた「思い・考え」を引き出し、村政執行に参画して行くよう、職員との熟議を形態も工夫しながら行っていかなければならないと思った。

○　職員との熟議においては、各論には入れなかったが、参加した職員全員の「むらづくり」「職場の現状」等に対する意見、思いを聞くことができた。中には、村への批判・過激な意見もあったが、この職員が「こんなことを考えていたんだ」というように、改めての再発見があったこと、いま村が抱えている問題の解決策に発展するような話もあった。こうしたことから、職員のシガラミを解いて熟議をし、発展していくことが大切だと考えさせられた。

（以上、藤本武）

（2-2）双珠別熟議について

日時　2011年 12月 19日（月）14：00～17:00
会場　占冠村双珠別公民館分館（北海道勇払郡占冠村双珠別）
参加者　（1）双珠別地区住民
　　（2）北翔大学 生涯学習システム健康プランニング学部
　　教員：教授 谷川松芳。学生：今西海渡、佐藤成浩、米倉優子、好川瞳

1．報告　好川瞳から双珠別地区を卒業研究に取り上げた理由、初めて双珠別に調査にきた時にふれ合ったお元気さんクラブの高齢者のことなどについて報告があった。

2．話し合い（熟議）：Aグループ・Bグループのまとめ

① 個人の問題・課題、高齢者の生きがい・夢

・家への愛着。
・歳をとり、体が心配、一人暮らしの不安。
・買い物いって戻るのに15分とかかかってしまう。
・読書、パッチワーク、手芸、編み物。
・子牛を育てて、A5の牛肉を作ること。
・地域の人との交流。
・畑の収穫、新しい品種改良をしていくこと。
・ここでの生活がいい。
・孫に対して手芸をつくってあげること。
・話し相手がいる仕事がしたい。仕事をまだしたい。
・宿泊施設の人と話すこと。
・遠くの身内より、近くの他人との交流、話し合える仲間。
・田舎だからこその人間関係の特徴。
・昔からの付き合いもある。一人一人がしっかりした考えもっているから共存できる。
・外からきた人も受け入れる。情報交換がしやすい。双珠別地区の人が家族のようなもの（困ったことあれば相談のってくれる）。話し相手になってほしいから交流する。
・皆が近くにいることが幸せ。知らなくても話せる。自分にないものもっているから成長できる。
・これが特別なことではない、本来これが当たり前である。村より都会の改善。

② 今後の占冠の村作りについて

・高校がない、中学が終われば富良野か旭川にいき、そのまま外で就職する。
・農家が引き継げない、大規模な農業もできない、水田あったが寒冷地でなくなった。
・若い人がいないと神社の屋根のペンキ塗りもできない。動ける人がほしい。
・双珠別地区の若者が少なくなること、人がいないこと、若い家族がほしい。
・上双珠別と下双珠別が一緒になるべきである。
・高速ができて、道の駅にも人がこないようになった。
・国道に歩道がほしい（自転車に乗って歩く）。

・老人福祉施設がないこと。
・雇用できる場所、場所さえあれば若者もくる。昔のように畑仕事を一緒にしたい。
・インターネット無かったから村からでていった人もいた、そういう対策。
・水がおいしい。自然を生かしていく。
・神社が古い。古くからある。神社への道らしい道がなかった。
・野生の動物（鹿、熊）がいることを目玉にすることなど。
・鹿、熊がでて畑を荒らす。だが毎晩熊よけをやるのは楽しみ。鈴をもっていくべき。
・学生さん若い人が双珠別の地になんだかの形で来てくれること。
・観光だけでないものを生かしていきたい（新しい働き場など）。
・高速道路から降りて占冠にしかないものがほしい。
・昔盛んだった運動会を村外人が協力して行うなど。
・トマム、占冠みな世界平和の中心になるような啓発共同体の基礎をつくってほしい。
・世界平和の参加が双珠別役場を通し生きている喜びを感謝します。

Ｂグループでのこと。住民の佐藤さんと先生が討論になる。
・先生「私たちの調査で村民が村の自然の良さをもっと押し出していくことが大事」、
・佐藤「そんなことを定義するが、雲海テラスが好きなら行けばいいし、話ししたいなら話しに来たらいいし、一人一人の感性がある。雲海テラス行ってもたいしたことない。聞くだけなんて冗談じゃない」
・先生「佐藤さんの意見は佐藤さんでいい。高速出来て利用客がすくなくなるままでいいのか」
・佐藤「それは学生に対して？　私たちに対して？　不便することはないよ。なぜ双珠別だけ睨まれるのかがわからない」、
ということで討論になり、高齢者が気分を悪くして終了。

参加した学生の感想

「双珠別の方々との話し合い（熟議）に参加して」 ４年 今西 海渡

「今回私は占冠村の高齢者の調査は３回目である。今回も双珠別の高齢者の課題と生きがいに視点をおいた調査であり、熟議というスタイルでの調査であった。双珠別の高齢者の課題としてあげられるのは若い人がすくないこと、働き場が少ないこと、高齢者の健康の問題、老人ホームがないことなどがあげられる。前回、前々回の調査でも同じような課題があげられていた。しかしそのような中でも高齢者は生きがいを見つけ生活している。意見のなかでは趣味をもち生活している人、地域の人などとの交流をすること、息子や孫に会うことなどを生きがいとしている人が多かった。今の私たち学生が占冠の高齢者のために何ができるのかということも考えながら調査をしていた。まず若者が少ないことについては職場が少なく、都市部に移住していく人が多いためだという。そのために高齢者は昔みたいに畑仕事をしてくれる若者がいてほしい、村に職場をつくってほしいという事も言っていた。昔は皆で畑仕事をして終わればお酒を飲み交わしたが今はそういったことがなくなり交流する機会も減ったという。高齢者は村に若者が少ないことが寂しく、今回私たちのような学生が行き話を聞

くことがうれしいという。高齢者が私たちに昔の占冠村の話や趣味の話をしているときの顔はとても笑顔であふれていて生き生きとしていた。私は高齢者がこんなにも笑顔になれる機会がもっとあれば良いと思う。

次に老人ホーム建設についてだ。これは前回前々回にもあがった課題だが今回の調査で感じたことは高齢者は老人ホームがない理由は理解しているのだと感じた。伊藤さんの話の中で昔老人ホームをすぐに建てなかったことが悪いという。さらに初めて知ったのはショウジさんという方が老人ホームを建設するために寄付した土地まであるということだ。しかし老人ホームを建てても維持することが難しいなど、村に医者がいないことなどが関係していてすぐには建てれないことを高齢者は理解している。老人ホームを建設してほしいという願いは、自分たちのことではなく次の世代の人のためにも建ててほしいという願いからきているのだと私は感じた。

最後に、今回の調査の一番の収穫は、佐藤さんのような反発する人がいるということだ。今回の調査で初めてお会いしたが、佐藤さんは自分の意見をしっかりともっている。たとえ他の村民の人に理解されなくても、宗教が異なっていても、意見を曲げることはない。しかし佐藤さんの生きがいの中で、地域住民とのコミュニケーションを大事にしたいという意見もあり、佐藤さんも占冠村が好きなのだということもわかった。受け入れられなくてもしっかり自分の意見を尊重できる機会がもっとあれば、村はよくなると私は感じることができた。行政にまかせっきりではなく、村民自ら活動をしていくことが今後の課題ともいえるだろう。」

「何故、老人ホームが必要なのかを考えさせられた」 4年 米倉優子

「今回の調査では、占冠村に訪れ、村民の方々との討論会を行いました。討論会は、①生きがいについて、②村に求めること、③今後の村についての３つの観点から話し合われました。村民の方々の要望の中で一番多かったものは、「村に老人ホームを建設すること」でした。理由は、村に老人ホームを建てることによって、「家族に迷惑をかけずに生活をすることができるから」という意見が非常に多くあがりました。私は、この意見を聞いて、私自身も老後ひとりで暮らしていた場合、ひとりでいることがさびしくなったり、『病気をしてしまったらどうしよう』『家族に迷惑はかけたくない』と感じ、村民の方々と同じように老人ホームに入居する道を選ぶかもしれないと感じました。しかしながら、現在の村の状況を考えてみると、『村に老人ホームを建てるお金がない』『建てても全員入居できるのか』『医者や看護婦などの不足』など、建てるために乗り越えなければならない壁が数多くあることを改めて感じました。

私は、双珠別へ入るのは初めてでありましたが、双珠別の高齢者がとてもお元気であることに驚きました。そして、地域にはいろいろな考えの人が生活していることを知りました。考えが違っても地域のみんなで協力しあうことは当たり前のように思っていることに驚きました。それは、お互いに顔が見えて、気心も知りつくした中での人間関係で成り立っていることを学びました。私自身、岩手の一番小さな村で生活していた経験があり、そこでは村民同士の絆が強く、近所で困っていることがあれば、助け合ったり、協力し合うことが当たり前でした。小さな村でしたが、そこに住む人びとの絆や助け合いの精神はとても強く、深いものだと感じました。このような絆や

近所同士の結びつきは、人口が少ない村だからこそ存在するものであり、今後も大切にしていかなければならないことであると感じました。

今回の討論会を通して、双珠別の方々は上記のように他人の域を超えた『大家族的な関係』で、日常生活を送っていることが分かりました。また、この地域のために私たち学生ができることは、スポーツ系の学生であるため、地域から出て行っている方がたが帰省するお盆の期間などを利用し、昔行われていた双珠別地域の運動会を兼ねた小学校の運動会のようなレクリエーション的な交流の場を企画し、実施してみたいと思いました。」

「双珠別の方々からいただいたもの」 4年 佐藤 成浩

「今回の調査は占冠村の双珠別の高齢者の方たちとの交流をした。その中には初めて見る人たちもいて、どういう話が聞けるのか、どのようなことを聞いたらいいのか自分自身なかなか流れが読めない中、話し合いが始まった。私が初めのうち話を聞いていたのは伊藤さん（髭の）だった。髭の伊藤さんも初対面の人だったがそんなこと関係ないかのように私に話してくれた。伊藤さんは占冠村で生まれたわけでもなく、育ったわけでもない、ただ何となく来たら占冠に在住したという話を聞いた。そういうことがあるのだろうか？　私は伊藤さんの話を聞いていくうちにその理由が分かった。伊藤さんは花が大好きで花の研究を趣味としている。そんな趣味を持つ伊藤さんには自然に囲まれた占冠村は最高の研究材料であることが分かった。もうひとつの理由として、『何か分からないことがあると地域の人たちに聞く、村の人たちは先生だから』、とおっしゃっていた。たまたまついた村で過すと考えるなら初めての場所で一人暮らすということはできないだろう。

村の人たちが伊藤さんを受け入れ気軽に話しをしてくれたからだと思った。地域の人たちの温かさが一番の理由だと感じた。これこそが地域住民による共同の生涯学習活動だと思った。髭の伊藤さんだけでなくほかの高齢者の方々も元気で生き生きと私たちにいろんなことを話してくれた。そんな皆さんを見て、今、自分たちにできることは、このような話の場をつくり、いろんな経験談、自分の得意分野、悩みなど何でもいいから聞くこと、逆に私たちの話も聞いてもらったりすることが今できることであり『生きがい』ということに繋がっていくのだと思った。

私は今年で卒業するがこの谷川ゼミでもっとたくさんの交流の場を開き、高齢者の方とコミュニケーション取り、また新たな発見をしてほしい。占冠村だけでなくいろんな学校が高齢者とのかかわりをもっと考え、積極的にコミュニケーションをとって各地域盛り上がることが一番だと私は考えている。今回も占冠村双珠別地区の方々と話し合ってみたが、みんな優しくお互いを知りつくし、かつ欠点なども理解し合って大家族的な関係で生活していることがわかった。話し合いの最後に今回の話し合いの目的を確認する場面では意見の対立もあったが、ごく自然の成り行きのように、ことが運ばれたことに驚いたこともあった。昔のように地域の多くの人たちが集まることはできないが、今住んでいる方と誰かの力を借りながら、以前に双珠別に住んでいた人が集まる機会を企画する必要もあると思った。」

（以上、谷川松芳）

（2-3）トマム熟議　について

「占冠むらづくり熟議（語り合い）ｉｎトマム」報告書

日時：平成 23 年 12 月 21 日(水)18：30～

会場：占冠村公民館トマム分館

北海学園大学経済学部教授　内田和浩

ゼミ生　内藤秦葉、本田雄也、引田洋平

北海道公民館協会　成田みえ

トマム地区住民 10 人

1．報告

① 地域研修Ⅰ・Ⅱ報告「占冠村の現状とこれから」（パワーポイントにて）
北海学園大学内田ゼミ　本田雄也

② トマム地区住民アンケート調査からわかったこと（パワーポイントにて）
北海学園大学教授　内田和浩

2．熟議(語り合い)

Ａグループ　ファシリテーター内田和浩、引田洋平（記録）

① トマム地区の課題は何か

まず大きな問題としては、自治体としての存続が危うくなるほどの人口減少が挙げられた。それの原因として考えられるのは雇用の少なさであり、広大な農業用地を活かして農業を始めるにも、新規就農には莫大な必要経費がかかるため難しいこと、アルファリゾート以外の勤め先が殆ど無いことから、住民のリゾートへの依存も大きいため、リゾートの経営状態や雇用方針一つで大きく人口も左右されてしまう。

リゾートの本社より派遣されてきた従業員も、近隣の富良野や帯広といった都市から通うことが多い。そのため、村とリゾートで協議の場を作り、雇用状況の改善を求めること、またリゾートに代わる仕事を創りだしていくことなども必要であると考えられる。また、人を呼び寄せる・引き止めるにも村に刺激がないことや、空いている住宅がなく公営住宅も入居条件が厳しいため、村への転入者に多くの負担を強いてしまうといったような問題がある。

さらに、人口減少に付随するものとして学校存続の問題もある。現在でも生徒不足のため中学校は複式学級となっており、統廃合されて生徒たちに遠く離れた中央地区まで通学させる負担を負わせることになる可能性がある。生徒数減少に伴い教員も減るため、学力の低下も懸念される。

中央地区との格差も挙げられた。村外に通う高校生のための通学バス、道路整備、消防署の正職員の有無など様々な面で中央に差を付けられている。トマム地区出身の役場職員が居ないこと、また配属された職員が長年定住するようなことも無いことも、格差の原因なのではないかという意見もある。それだけでなく、公民館が「公民館」であるという掲示すらされておらず、多くの住民に認知されていないこと、土・日は利用できないことなどが住民の活動を阻害している。

② トマム地区の課題を解決するためには

学校から地域を活性化させていくために、山村留学を行なっていくことで、子ども連れの家族を移住させるという要望が、かつて住民から出たことがあったが、住居が足りないこと、村の職員がするにも住民に任せるにも負担が大きいことを理由に却下された。しかし実際には、住民は負担を強いられてでも、村の活性化のためであれば構わないという意見が多く、そのような意思の齟齬を減らすためにも役場と住民との協議の場を設けていく必要がある。

村営住宅の入居条件の厳しさや、農業用地が多いため住居が新築できないことなど、転入のしづらさについて道や国と掛け合って、緩和を求めるといったような動きを村にしてもらうためにも協議の場が必要となるだろう。一方、農業委員でも二年間の研修期間を設けて、生活費の援助などで外部から訪れる新規就農者を支援する試みが、検討されているので実現が期待される。

文化・スポーツ活動など、村に刺激を作る住民の活動を活発化させるためにも、公民館の土・日開放など利用しやすさの向上は必要であり、そのためにもまた役場との話し合いの場は必要となる。

とにかく、村役場と住民が話し合い、意思疎通を図ることが重要だと考えられる。トマム地区を担当する職員も中央地区から通うのではなく、トマムに住ませる、またはもとよりトマム在住の職員を担当させ、熟議にも積極的に参加させることで、役場に住民の意志を伝えさせるような枠組みが求められる。

村では自分で山菜も採れ自給自足に近い生活、金に左右されない生活ができることなど、実際に暮らしてこそ感じられる住みよさがある。そうしたことを住民たちからインターネットなどの手段で発信していき、例えば近年リゾートで再発見されて観光の目玉になった「雲海テラス」のように、当たり前のようにトマムにあっても他から見れば卓抜した村の魅力を、外へと伝えていく試みに取り組むなど、役場や観光協会頼みにならず住民自身が活動していくことも重要となるだろう。

Bグループ　ファシリテーター内藤秦葉、本田雄也（記録）

① トマム地区の課題は何か

多くの課題が出たので、熟議の場で以下のように分類・整理した。話し合いの場、

役場の連携、.生活、子ども、定住、トマムリゾート。

[話し合いの場]
・住民が意見を交わせる場がない。
・村の将来に対するビジョンがない。
・村を盛り立てられる人材はいるのだが、活かしきれていない。
・人口が多かった頃に、未来への投資がされていなかった。

[役場の連携.]
・役場間（トマム支所と村役場本体）の連携が不十分なのか、連絡が伝わっていないことがある。
・占冠地区との温度差がある。
・トマム支所に勤務した経験がない（＝トマム地区に住んだ経験がない）職員の対応が不十分だ。
・トマム地区と占冠地区にサービスの違いがある。
・役場へ提出した要望への具体的な回答がない（考えますのみ)。

[生活]
・生活費があまりかからないが、娯楽が少ないので若い人にはどうなのか。
・医師が常駐していないので不安、特に子供がいる家庭は不安が大きいのでは。
・除雪してくれる業者さんがいない。
・占冠村には豊かな森があるが、その森の木々がどのように利用されているのか分からない。

[子ども]
・国際交流など子どもを育てるにはいい環境なのでアピールするべきでは。
・子どもの数が減って、学芸会の演目や運動会の競技が制限されるようになった。
・親の仕事がなければ子供が子供は増えない。
・学校への通学へ時間がかかる。

[定住]
・トマム地区は移り住んできた人が殆どなのでその人が住み続けることができるようなことを行うべき。

[トマムリゾート]
・リゾートをもっと村民が利用しやすい場所にするべき。

② トマム地区の課題を解決するためには

課題解決の最優先事項として上の分類から、「話し合いの場」に焦点を絞って議論

した。その議論の中で以下のような意見が出された

・①の役場との連携の項目にあるように、話し合いの場を設けて意見を述べても役場は意見を聞いてくれない。話し合いの場を設けても効果があるのか。
・このように住民同士で意見交換する場はなかったのでこれからも設けるべきだ。
・町内会を介して住民同士の仲はいいので話し合いの場を設ける下地はあるだろう
・住民同士が話し合って村の未来に対するビジョンを持ちたい。
・住民主体で話し合いの場を設けると、誰かが責任を持たなくてはならないので、現状では難しい。
・神社のお祭りなど住民が集まる機会が多くあるので、そのような場で話を持ち出してみたいと思う。

＊時間の都合で結論まではでなかった。しかし、熟議に参加された方々の意識は高く、議論はとても盛り上がった。

3．トマム熟議を終えて

当初、参加者からの声は、役場に対する批判が多かった。しかし、ファシリテーター役として、絶えず「それでいいのか？自分たちはどうなのか？自分たちでできることはないのか？」と問いかけ続けた。

その結果、後半の課題解決へ向けた話し合いでは、このような住民同士の話し合い、住民と役場職員の話し合いによる意思疎通の重要性が語られ、自分たちでやれることはすぐにでも取り組んでいこう、という声が聞かれた。そのためにも、特にAグループでは住民がいつでも自由に使える、集まれる公民館の重要性が確認されたのだった。

占冠村トマム支所が入っているトマムコミュニティセンターは、条例上は、占冠村公民館トマム分館となっている。しかし、実態は、分館長がトマム小中学校の校長であることや、トマムコミュニティセンターには支所（戸籍等のプライバシーの厳守が必要な書類を保存）や、簡易郵便局（多額のお金がある）、そしてホールに図書コーナー（貴重な本がむき出し状態）があるため、職員が勤務している時間帯しか公民館分館として使用できず、特に土・日は基本的には自由に使うことができないのである。

今回の熟議を体験した住民の方々が、公民館トマム分館の重要性に気づき、本当の意味でトマム分館を創っていけるならは、そこで自由に集まってトマム地区と占冠村の未来を語り合うとともに、村長をはじめ占冠村役場の職員の方々との熟議も、スタートしていけると思う。その際、「外からの視点や刺激」も大切であり、来年度もゼミ生たちと一緒に占冠村のとの関わりを持ち続けたいと思う。

（以上、内田和浩）

（3）事業を促進した要因・阻害した要因
特に失敗した事例があれば積極的に開陳してもらいたい。

○　初めての試みということもあったが、自分自身が熟議の進め方を熟知していなかったため、進行役を努めたまでは良かったのだが、グループ分けをせずに進めたため、熟議とまではいきつかなかった。しかし、出席した職員全員から意見を聞くことができた。そういう意味からすると、大きな第一歩になったと思う。職員間・課内でのコミュニケーション不足、「いま村が何を行っているのか」「何をしようとしているのか」「何が問題になっているか」、などの情報の共有ができていないことを痛感させられた。

（4）『熟議』の成果について
テーマや運営方法等を記述する。
どんな意義があったのか、運営上の反省点など

○　前段とも重なるが、今後は熟議の「テーマ」を絞り、いくつかのグループに分かれ、テーマに沿った現状の問題点・課題について整理し、その解決策・対応などを議論し、その結果をグループ発表し合いながら、熟議を進めて行かなければならないと思う。

○　いままで 30 数年も役場に勤めてきたが、今回のように立場・職種の違う職員が集まり、「本村のこれからのまちづくり」「自分が今感じていること」などについて、率直に意見交換をしたのは初めての試みであった。

○　出された多くの意見はいくつかに分類できるので、今後、村が行おうとしている施策に反映して行けると思う。例えば、村は福祉施設の建設を目指しているが、職員の中にも親の介護に不安を感じている声があったので、どういう施設を望んでいるのか、立場（役場での担当事務）は違っても、建設に向けての意見を反映できる。

○　これからが、課題解決に向けて、本当の意味での「熟議」の始まり、と考えている。

（以上、藤本武）

5．当事業によって導き出された新しい社会教育の手法

（1）全国各地で同種の事業を実施することの可能性

限界集落からの脱出をはかるための手法や意識改革が「熟議」によって起きたか。全国展開できる仕組みづくりに必要なことがあれば記述してください。

「限界集落からの脱出をはかるための手法や意識改革が『熟議』によって起きたか」、という問いには未だ答えかねる。わずか数ヶ月の試みでは、それが以下に濃密なものであっても、あまりにも時間が足りなさすぎる。50 年かかって壊してきたものの修復には、50 年以上の時間がかかりうる。いますぐに始めたとしてもである。

ここでは、「生活形式の民主主義」と「熟議」と「教育における熟議」について、より基本的な考察をしておきたい。

1）「第三の道」と Deliberative democracy について

篠原一『市民の政治学――討議デモクラシーとは何か』（2004 年）、田村哲樹『熟議の理由――民主主義の政治理論』（2008 年）など、政治学では市民社会の民主主義的改革、ないしは民主主義の民主主義的改革との関わりで課題化されている。篠原は、ドイツの社会学者Ｊ・ハーバーマス、Ｕ・ベック、イギリスの社会学者Ａ・ギデンズなどの現代社会理論（第二の近代化論、近代化の近代化論、新しい市民社会論）との関わりにおいて、「討議デモクラシー」（deliberative　democracy）を紹介した。

篠原によれば、第二の近代化をめざす「第三の道」は、イギリス新労働党トニー・ブレア（首相 2001.06-2007.06）政権の「市場志向のニュー・レーバー・モデル」のほか、「合意を通して市場化を行うオランダモデル」「福祉国家による改革を志すスウェーデンモデル」「国家主導型のフランスモデル」がある。「問題は彼らがこんご新しい時代の展開に対して、どのようなセンシビリティを持ちつづけることができるかにある」（篠原 2004:90）。このセンシビリティの一面として「討議デモクラシー」が位置づく（その内容は「行動的市民とデモクラシー」「討議制意見調査」「コンセンサス会議」「計画細胞と市民陪審制」「多段式対話手続き」「いくつかの問題」であった。同：151-192）。

だが、ブレアとその理論的ブレーンであったギデンズが重視したのは、教育とくに生涯学習（生涯教育）であった。「若年から老年に至るまでの幅広い教育プログラムをもつ生涯教育は政府の重要な仕事の一つで、『特定の技能の訓練は、円滑な転職のために必要』なものだが、『もっと大切なのは、認知能力や感知能力の研磨である。無条件の給付に頼るのをやめて、貯蓄し、それを教育費に充てる等、自分自身への投資機会の利用を促すよう、政策的な誘導策が求められる』（Giddens 1998=1999:208）。

2）熟議民主主義過程とオーストラリアの国民的熟議について

Deliberative democracy についてはアメリカでも注目を集めた。政治哲学者Ｊ・ロールズの「手続き的正義」論をもとに、その弟子Ｊ・コーエンは「思慮分別のある多元的共存」を Deliberative democracy の特質と把握した。さらに、Ａ・ガトマンとＤ・トムプソンの『なぜデリベラティヴ・デモクラシーか』(2004 年）は、自由で平等な市民が自由で平等な議論に参加し、お互いがそれぞれの理由づけで、納得して結論をうる過程を、Deliberative democracy とした。こうした Deliberative democracy の根本的な問いは、「多数決は万能なのか」にあり、かつ討議過程による意見の共振と共変が重視される（“Deliberative democracy,” Wikipedia, the free encyclopedia.)。

しかし Deliberative democracy は、討議による意見変容に収斂されるのではない。一国レベルでの熟議による国民的課題の明確化という事例、“Australia 2020 Summit” がある。2008 年 8 月の 2 日間、首都キャンベッラの国会内で開かれた熟議は、オーストラリアの長期的な戦略に関する「国民的な対話」(national conversation）と位置づけられた。全国各地から約 1,000 名の市民代表（ボランティア有志、旅費・宿泊費とも自己負担）が 10 項目の討議課題について意見を交わした。――　その 10 項目とは、1「生産性向上（教育、熟練、訓練、科学、技術革新)」、2「経済」、3「人口、持続的発展、気候変動、水問、都市の将来」、4「農村産業と農村コミュニティ」、5「国民健康問題の長期戦略」、6「コミュニティ活性化、家族支援、社会的包摂」、7「先住民の将来」、8「創造的オーストラリア－芸術、映像、デザインの将来」、9「オーストラリアのガバナンス」、10「急激に変化する世界におけるオーストラリアの安全保障」であった。

第 6 の「コミュニティ活性化、家族支援、社会的包摂」での熟議内容は、①《国家によって進められるべき基本課題》と、②《国家が将来的に考慮する諸意見》、そうして③《国家以外のものが発展させるであろう諸意見》、④《現時点においていま以上の取り組みをしないもの》に分類された。すなわち、

①は、「住宅－ホームレス」「不利な立場の人びとへの取り組み」「労働力としての参加－国の雇用水準」(「生産性」と関連)、「移民と亡命者－再移住のプログラム」「コミュニティの雇用」(「ガバナンス」「経済」「農村」と関連)、「客観価値と市民教育」(「ガバナンス」と関連)、「都市の持続的発展－国のエネルギー充足計画」(「持続的発展」と関連)。

②は、「社会的包摂－コミュニケイション戦略」「国による住民の多様性への戦略」「コミュニティの諸団体－ボランティア活動へのサポート」(「生産性「農村」と関連)、「子どもと青年たち－子どものリスク」「家族－健康と学習パスポート」「学校での先住民言語」(「先住民」と関連)、「両親とくに父親の子育てスキル訓練」「家族－家族法の改正」「家族－ベイビー・ボーナス支給」「国の先住民族文化の教育計画」(「先住民」「創造性」と関連)、など。

③の《国家以外のものが発展させるであろう諸意見》には、「社会的包摂－地方での雇用」「隣人とコミュニティ」「若い人びと－青年サポート」「協働の社会的責任」「矯正システム」「住宅－シェアハウジング」「住宅－レントオウン計画」「リーダーシップ」「サービス交付－コミュニティ・オーガニゼーションの助言」「サービス交付－コミュニティ・サービスの用意」「サービス供給者のトレーニング」「先住オーストラリア人－葬儀の諸費用」がある。

④の《現時点においていま以上の取り組みをしないもの》に分類された意見には、「社会的包摂－マネジメント・システム」「社会的包摂－インパクト・スタイトメント」「社会的包摂センター」「社会的包摂－言葉」「同性愛カップル」「先住オーストラリア人－土地所有権／法的権利」（「先住民」に関係）、「高齢のオーストラリア人－国際的な年金の整理」「高齢オーストラリア人－年金生活者サポートの税金」「家族－国際家族行動計画」「家族－家族法改正」「家族－子育てスキル養成への援助」「家－第一種ホームオウナーへの補助金」「住宅－ホームレスのための資金提供」「コミュニティの安全対策－ドラッグの合法化」「サービス対策－ガバナンス、など。

国家が取り組むべきこと（①と②）、国家以外のもの（コミュニティ）が取り組むべきこと、そうして現状維持を明確にしたもの（国家とコミュニティの双方に関わるもの）、というように市民が出した意見を分類整理し、オーストラリアの国家と社会が何をどう分担して、2020 年までの展望／戦略を立てるか、その大きな方向性が合意された。その具体化（関連する項目間の調整など）は、三権に委ねられることになる。

3）日本における「熟議」と「教育における熟議」

ところで田村哲樹は、deliberative democracy を「デモクラシーの熟議モデル」（熟議民主主義）とし、既存の「デモクラシーの集計モデル」（集計民主主義）から区別した。この熟議民主主義は、単に規範的な価値判断の問題でなく、「公共性」と福祉国家「以後」の時代における、ベック、ギデンズ、ハーバーマス、またオッフェらの「社会理論的視座」に立脚している。田村が強調するのは、「熟議民主主義における『公共性』生成可能性」である。つまり、熟議民主主義は「現代社会の秩序形成にとって不可欠な『公共性』を生成するデモクラシーということになる」（田村哲樹「熟議民主主義とベーシック・インカム」2004:47-48）。ここに私たちは、「熟議」と「公共性」の結合を見出すことができる。

さらに、2010 年 2 月、鈴木寛文部科学省副大臣は「『熟議』に基づく教育政策形成の在り方に関する懇談会」の第 1 回会議を開催（金子郁容座長）。会議での配布資料「『熟議』について」は、田村哲樹『熟議の理由－民主主義の政治理論』によって、「熟議民主主義」と「熟議民主主義のプロセス」を紹介した。この会合の一週間前、内閣府は「新しい公共」円卓会議を設置していた（金子郁容座長）。こうして、日本においては、「熟議」と「教育における熟議」とが「新しい公共」を媒介に結合する様相を示そうとした（それの意欲的な試みの一つは、吉田博彦の仕事であるように思われる）。

鈴木寛前副大臣の教育政策形成に関する見通しについては、教育ジャーナリストの渡辺敦司が書いた一人社説、「“通産体質”に終始した鈴木寛副大臣」（2011.9.6）が、ベクトルは逆だが、参考になる。つぎの一文に登場する「ガバメント・ソリューション」「マーケット・ソリューション」から、「コミュニティ・ソリューション」への政治・社会動向の推移こそは、現代社会学が 1970 年代ころから提起してきたところなのである。

「鈴木氏は、極めて壮大な構想の下に文教行政を進めてきた。氏によればポストモダンの時

代においては産業構造はもとより、市民社会も変わらざるを得ない。教育、医療、雇用など多様な分野で従来の『ガバメント・ソリューション』（政府による問題解決）や『マーケット・ソリューション』（市場による問題解決）に代わって『コミュニティ・ソリューション』（コミュニティーによる解決）が求められる。そうした「新しい公共」づくりの起爆剤としてコミュニティ・スクールを推進してきたのだし、具体的な手法として『熟議』を開発し実践を広げてきた。産業社会と市民社会の変容に対応すべく、コミュニケーション教育も予算化し推進した。教員の資質能力向上や情報教育も、すべてそうした構想の一環に位置付けられている。」

（http://ejwatanabe.cocolog-nifty.com/blog/2011/09/post-e136.html）

そのうえ、2010 年の秋を転換の顕在化の始点として、「教育における熟議」が位置づいている。リアル熟議、ネット熟議、塾義カケアイの提起によって教育界に大きな波が起きたことは事実であり、教育問題を身近な生活課題へと変容させつつある。国際社会の変動の中で日本社会それ自身が、教育の変革を求めていることの証左である。さらには大学リレー熟議が、「『地域と共生する大学づくり』のための全国縦断熟議～生涯学習における知の拠点・ネットワーク形成」として展開されることによって、教育における熟議はいっそう広い視野をもち得ることになった。

4）地域社会の再生課題と公民館の役割

オーストラリアの“Australia 2020 Summit”と比べるとき、日本政府と日本社会の取り組みは大いに“熟議の余地”がある。橋本努（北海道大学大学院経済学研究科）のように、「熟議民主主義は保守主義？」という指摘もある。「熟議と社会運動の戦略が、互いに拮抗する」（http://d.hatena.ne.jp/tomusinet/20100420/1271763139, 2010.4.20）。

だが、「教育における熟議」は、日本社会と日本人とが秘かに抱えている、巨大なエネルギーの一端を顕在化させた。それを「保守主義」と切り捨てて済む問題ではない。それにもかかわらず、これまでの「教育における熟議」論は、公民館海援隊や図書館海援隊の試みとあまり媒介環をもっていないように見える。その要因として考えられるのは、「熟議－教育における熟議」「公共性－新しい公共」論における「地域社会」の欠落であるように思われる。先に見たオーストラリア熟議の「10 項目」は、形を換え占冠村にも見出しうる課題である。私たちが、公民館活動に注目するのは、そこに日本型「草の根主義」があるからである。地域社会における「熟議」は、法律形式の民主主義にとどまらず、生活形式の民主主義として民主主義を捉え、地域社会の集合体としての日本社会を豊に育て上げる、基本的な草の根活動である。

（以上、小林甫）

（2）今の社会教育に必要とされるものは何か。
現状を打破するために、事業を通じて感じたことを記述してください。

○　これまでの公民館事業では、講座や教室・セミナーなど行ってきましたが、住民が地域について語り合うことはなかった。今回の事業で熟議に参加した住民・役場職員がそれぞれの状況を語ることによって、情報が共有され、いくつかの課題認識にも繋がったことを考えると、コミュニケーションこそ地域づくりの原点であること、そこに公民館の役割があると感じた。

○　占冠村の社会教育委員や図書・体育指導委員は、積極的に活動し重要な役割を担っている。一方で、委員という立場でなく、地域住民として地域づくりや現状について語り合う場が、公民館の機能として必要ではないかと思う。

○　公民館の分館は、それぞれ異なる地域性をもっているので、分館単位で熟議を行い、その内容を持ち寄り、各地域ごとに数名ずつのグループをつくって、全体熟議を行うことも良いかと思う。また、今回の事業のように、村外から地域づくりに協力いただける大学や人材が、分館行事や地域行事に参加する環境を整え、交流を行いながら、外部からの意見を取り入れていくことも必要と考える。

○　誰でも気軽に利用できる施設として、公民館図書室の有効活用や地域カフェなどを設置することも、地域課題の情報収集や解決策の発見に繋がるかもしれない。

（以上、藤本武）

資料１　人口減少率（道内１位・全国３位）

先月末に発表された2010年国勢調査（確定値）で、上川管内占冠村の人口減少率が５年前の前回調査と比べて23.4％と道内最大、全国でも３位となった。

2010年国勢調査（確定値）で、人口減少率が高かった市町村

市　町　村		人口（10年）	05～10年の減少率％
全国	①野迫川村（奈良県）	524	▲ 29.3
	②大川村　（高知県）	411	▲ 23.6
	③占冠村　（北海道）	1,394	▲ 23.4
	④黒滝村　（奈良県）	840	▲ 21.9
	⑤小菅村　（山梨県）	816	▲ 19.8
道内	①占冠村　（上川支庁）	1,394	▲ 23.4
	②奥尻町　（檜山支庁）	3,033	▲ 16.7
	③夕張市　（空知市町）	10,922	▲ 16.0
	④歌志内市（空知市町）	4,387	▲ 16.0
	⑤上ノ国町（檜山支庁）	5,428	▲ 15.4

（2011.11.01　北海道新聞より）

資料２　少子化・過疎化の子ども・村民への影響

①たそがれ野球・朝ソフト・カーリング場閉鎖・スケートリンク閉鎖

以前は、行政区ごとの朝ソフト・職域のたそがれ野球が実施されていたが、若者の減少と・選手の高齢化により自然消滅した。また、一時期、夜間のカーリング競技が盛んに行われていたが、これについても同じく自然消滅した。

②中学校生徒の減少により、バレー・野球等の部活動ができない状況

中学校の部活動は、女子はバレー、男子は野球を単独で行えていたが、少子化により、女子はソフトテニス、男子は隣町の中学校と合同のチームを作り、試合に参加している。

③子供会活動の低迷（不参加）

各行政区ごとに子ども会育成行事が行われていたが、少子化に伴い現在は合同で実施している。

④各行政区対抗の村民スポーツレクリエーション大会における困難

双珠別地区の少子高齢化により、チームとしての参加ができない状況となっている。また、参加している行政区についても、年齢・世代別の競技においては他の行政区から選手を借りなければならなくなっている。

（以上、藤本武作成）

資料３．占冠村の公民館事業　（2006、2007、2008、2009、2010 年）

３－１．2006（平成 18）年

05.29-05.31	自主創造プログラム、陶芸教室（参加者 4 人）
06.19	自主創造プログラム、「しむかっぷロマン」遺跡発掘調査見学（38 人）
07.26-08.19	公民館事業、夏休みラジオ体操（56 人）
07.27-02.28	公民館事業、子ども水泳教室（中央）（22 人）
08.02	公民館事業、子ども水泳教室（トマム）（22 人）
08.20（日）	トマム分館、パークゴルフ教室（15 人）
09.02（土）	トマム分館、球技大会（キックベースボール）（23 人）
09.03（日）	中央家庭教育学級、いもほり体験（34 人）
09.03	公民館事業、公民館登山（14 人）
09.09（土）	トマム分館、親子社会見学（37 人）
09.10（日）	トマム分館、自然探索の会（10 人）
10.01	公民館事業、文化団体交流会（152 人）
10.16（月）	中央家庭教育学級、ネームプレート作り体験（28 人）
10.19	自主創造プログラム、山を見る会（37 人）
10.22（日）	占冠分館、布ぞうりづくり講習会（12 人）
11.02-11.03	公民館事業、総合文化祭（347 人；作品数 592）
11.02-11.03	公民館事業、総合文化祭（347 人；作品数 592）
11.10（金）	トマム分館、ミニバレー教室（夜）（21 人）
11.21（金）	トマム分館、バドミントン教室（夜）（17 人）
11.25（土）	中央家庭教育学級、親子ふれあい体験学習（高齢者大学とのり巻き作り）（98 人）
12.10（日）	トマム分館、そば打ち教室（20 人）
01.09-01.10	公民館事業、親子スキー教室（17 人）
01.18（木）	トマム分館、子ども映画会（29 人）
01.30（火）	中央家庭教育学級、教育講演会（18 人）
01.30	自主創造プログラム、子育て情報誌「ずっと仲良しずっと一緒」作成事業（8 人；情報誌 200 部作成）
02.09（火）	双珠別分館、ソーセージづくり（9 人）
03.07-03.16	自主創造プログラム、「ＩＴ講習会」（16 人；実人数）
03.17-03.18	自主創造プログラム、鬼峠フォーラム（70 人；1 日目 45 人、2 日目 25 人）
03.19（月）	双珠別分館、ソーセージづくり（11 人）
0325	自主創造プログラム、春山散策（22 人）

自主創造プログラム 7 回, 195 人　公民館事業 7 回, 631 人

トマム分館 8 回, 172 人　占冠分館 1 回, 12 人　双珠別分館 2 回, 20 人

中央家庭教育学級 4 回, 178 人

３－２．2007（平成19）年

通年〔04.23-〕	その他事業、社会教育を切り口とした地方自治推進をめざす社会教育中期計画作成
05.21（月）	双珠別分館、シムカップ双珠別川源流（野山の草花）観察会（15人）
05.28-05.29	自主創造プログラム、陶芸教室（参加者1人；サークル部員除く）
06.15（金）	双珠別分館、双珠別むかしを語る集い
夏季	その他事業、パークゴルフ愛好会によるパークゴルフ場の自主管理
07.24-08.19	公民館事業、夏休みラジオ体操（58人）
07.30-07.31	公民館事業、子ども水泳教室（トマム）（22人）
08.02-08.03	公民館事業、子ども水泳教室（中央）（34人）
08.19（日）	トマム分館、パークゴルフ教室（10人）
09.02	公民館事業、公民館登山（上富良野岳～富良野岳方面縦走）（14人）
09.03（月）	トマム分館、親子フットベースボール大会（23人）
09.23（日）	トマム分館、自然探索の会（11人）
09.29（土）	中央家庭教育学級、親子ふれあい講座（簡単おかしづくり）（49人）
〔10.01〕	**〔占冠村社会教育中期計画策定会議 住民一般公開のお知らせ〕**
10.02（火）	トマム分館、バドミントン教室（夜）（17人）
10.07	自主創造プログラム、森林体験学習（24人）
10.13	自主創造プログラム、秋のノルディックウォーキング（17人）
10.13	その他事業、ふらの演劇祭参加（50人；富良野演劇工場にて）
10.25（木）	中央家庭教育学級、リース作り体験講座（20人）
11.02-11.03	公民館事業、総合文化祭（708人；作品数567）
11.08	その他事業、道民カレッジ出前講座（72人）
11.09（金）	トマム分館、ミニバレー教室（夜）（21人）
11.10（土）	中央家庭教育学級、親子ふれあい体験学習（高齢者大学とのり巻き作り）（98人）
11.11	自主創造プログラム、村民フットサル大会（40人）
12.02（日）	トマム分館、そば打ち教室（20人）
12.02	その他事業、占冠村オリジナルＣＭづくり（13人；保護者・講師除く）
12.21（金）	双珠別分館、ソーセージづくり（11人）
01.08-01.09	公民館事業、親子スキー教室（15人）
01.17（木）	トマム分館、子ども映画会（41人）
01.25（金）	双珠別分館、ソーセージづくり（12人）
02.10-02.11	自主創造プログラム、鬼峠フォーラム（32人；双民館宿泊10人）
02.21	その他事業、旭川医科大学派遣講座（白内障）（50人；およそ）
02.24（日）	占冠分館、料理講習会（11人）
02.26（火）	双珠別分館、食生活改善豆腐づくり実習（11人）
03.23	自主創造プログラム、春山散策（25人）
03.29	自主創造プログラム、初心者向けバレーボール教室（23人）
〔03.31〕	**〔『占冠村第5次社会教育中期計画』策定（平成20年度～平成24年度）〕**

自主創造プログラム7回162人 公民館事業6回848人 その他事業6回185人＋α トマム分館7回143人 占冠分館1回11人 双珠別分館5回34人 中央家庭教育学級3回190人

３－３．2008（平成 20）年　〔2008.4~：社会教育第５次中期計画・第 1 年次〕

04.21（月）	双珠別分館、双民館清掃（4 人）
05.12（月）	双珠別分館、シムカップ双珠別川源流草花観察会（参加者 15 人）
05.10	自主創造プログラム、山菜を楽しむ集い（14 人）
07.26-08.19	公民館事業、夏休みラジオ体操（75 人）
07.28-07.29	公民館事業、子ども水泳教室（トマム）（21 人）
07.30	自主創造プログラム、男の料理教室（そば打ち教室）（5 人；講師含む）
08.04-08.05	公民館事業、子ども水泳教室（中央）（27 人）
08.13（月）	双珠別分館、双民館清掃（4 人）
08.24（日）	トマム分館、パークゴルフ教室（12 人）
08.31	公民館事業、公民館登山（19 人）
09.06（土）	トマム分館、親子社会見学（38 人）
09.13（土）	トマム分館、親子フットベースボール大会（19 人）
09.14（日）	トマム分館、自然探索の会（14 人）
10.11	自主創造プログラム、森林体験学習（26 人）
10.13	その他事業、ふらの演劇祭参加（38 人）
10.15（水）	中央家庭教育学級、親子ふれあい講座（クラフト絵本づくり）（35 人）
10.15（水）	中央家庭教育学級、書道講座「書に親しもう」（21 人）
10.28（火）	トマム分館、バドミントン教室（夜）（23 人）
10.31	自主創造プログラム、漢字検定にチャレンジ（12 人）
11.02	自主創造プログラム、近自然学「環境講座」（83 人）
11.02-11.03	公民館事業、総合文化祭（513 人；作品数 516）
11.08（土）	トマム分館、おはなし会（33 人）
11.08（土）	中央家庭教育学級、親子レクリエーション（ジャンボのり巻きづくり）（98 人）
11.14（金）	トマム分館、ミニバレー教室（夜）（15 人）
11.30	自主創造プログラム、村民フットサル大会（59 人）
12.04（木）	占冠分館、ゲートボール協議交流会（18 人）
12.20	その他事業、道民カレッジ出前講座（地域医療・福祉とまちづくり）（77 人）
01.08-01.09	公民館事業、親子スキー教室（34 人）
01.19（月）	トマム分館、子ども映画会（21 人）
02.27	その他事業、旭川医科大学派遣講座（認知症のケア）（50 人）
03.14	自主創造プログラム、鬼峠フォーラム（39 人）
03.22	自主創造プログラム、林業体験学習（16 人）
03.28（土）	占冠分館、手芸教室（10 人）

自主創造プログラム 8 回、254 人　公民館事業 6 回、689 人　その他の事業 3 回、161 人

トマム分館 8 回・175 人　占冠分館 2 回・28 人　双珠別分館 3 回・23 人

中央家庭教育学級 3 回・145 人

３－４．2009（平成21）年 〔2009.4~：社会教育第５次中期計画・第２年次〕

04.15（水）	双珠別分館、郷土資料室展示物整備（3人）
05.18（月）	双珠別分館、春の双珠別川源流部 林道歩き植物・野鳥観察トレッキ（13人）
05.19	自主創造プログラム、山菜を楽しむ集い（参加者24人）
05.25, 27	自主創造プログラム、陶芸教室（2人）
05.31	自主創造プログラム、ちょっとおしゃれな薬膳山菜料理教室（16人）
05～11	自主創造プログラム、家庭教育講座講演会（中央6回,トマム1回）（135人）
06.15（月）	双珠別分館、双珠別住民交流のつどい（21人）
07.25-08.18	公民館事業、夏休みラジオ体操（73人）
07.26	公民館事業、公民館登山（旭岳）（13人）
07.27-07.28	公民館事業、子ども水泳教室（トマム）（7人）
08.03-08.04	公民館事業、子ども水泳教室（中央）（21人）
08.23（日）	トマム分館、パークゴルフ交流会（12人）
09.05（土）	トマム分館、親子社会見学（28人）
09.06（土）	トマム分館、親子フットベースボール大会（22人）
09.10（木）	双珠別分館、築山手入れ（3人）
09.13（日）	トマム分館、自然探索の会（14人）
10.18（日）	中央家庭教育学級、書道講座「書に親しもう」（16人）
10.20（火）	中央家庭教育学級、連凧づくり（31人）
10.27（火）	トマム分館、バドミントン教室（夜）（16人）
11.02-11.03	公民館事業、総合文化祭（455人）
11.06（金）	トマム分館、ミニバレー教室（夜）（18人）
11.07（土）	中央家庭教育学級、レクリエーション・ジャンボのり巻き作り）（79人）
11.07（土）	トマム分館、おはなし会（24人）
11.25（水）	双珠別分館、食生活改善（13人）
11.29	自主創造プログラム、村民フットサル大会（52人）
12.02	自主創造プログラム、男の料理教室（森の恵みしむかっぷ村山菜カレー）（16人）
01.12-01.13	公民館事業、親子スキー教室（42人）
01.19（火）	トマム分館、子ども映画会（24人）
02.10（火）	双珠別分館、食生活改善（12人）
02.22	その他事業、旭川医科大学派遣講座（41人）
02.25	自主創造プログラム、男の料理教室（ダイナミック シチュー作り）（16人）
03.14（日）	占冠分館、手芸教室（8人）
03.14-03.14	自主創造プログラム、鬼峠フォーラム（34人）
03.16	自主創造プログラム、心豊かな住民マナー講習会（43人）
03.22	自主創造プログラム、春山散策・林業体験学習（16人）

自主創造プログラム10回, 358人　公民館事業6回, 610人　その他事業1回、41人

トマム分館8回, 158人　占冠分館1回, 8人　双珠別分館6回, 50人

中央家庭教育学級3回, 126人

３－５．2010（平成22）年 〔2010.4~：社会教育第５次中期計画・第３年次〕

05.10（水）	双珠別分館、双民館郷土資料室展示物整備（参加者４人）
05.19	自主創造プログラム、山菜を楽しむ集い（10人）
05.23	自主創造プログラム、原木ナメコ育成・植菌ボランティア事業（28人）
05.31	自主創造プログラム、食のワークショップ（40人）
05～11	自主創造プログラム、家庭教育講座（中央７回,トマム１回）（89人）
06～11	自主創造プログラム、書道教室（計10回；110人）
06.15（火）	双珠別分館、双珠別神社祭地域のつどい（21人）
06.21	自主創造プログラム、男の料理教室（12人）
06.21, 23	自主創造プログラム、陶芸教室（４人）
07.06	自主創造プログラム、山菜を楽しむワークショップ（16人）
07.24-08.17	公民館事業、夏休みラジオ体操（65人）
07.25	公民館事業、公民館登山（13人）
08.02-08.03	公民館事業、子ども水泳教室（中央）（42人）
08.05-08.06	公民館事業、子ども水泳教室（トマム）（46人）
08.21（土）	トマム分館、パークゴルフ交流会（12人）
09.21（火）	トマム分館、親子社会見学（31人）
09.23（木）	トマム分館、親子フットベースボール大会（25人）
10.17（日）	中央家庭教育学級、書道講座「書に親しもう」（32人）
10.21（木）	中央家庭教育学級、手形絵画教室（66人）
10.22（金）	トマム分館、ミニバレー教室（夜）（20人）
10.26（火）	トマム分館、バドミントン教室（夜）（14人）
11.02-11.03	公民館事業、総合文化祭（528人）
11.06（土）	中央家庭教育学級、親子ふれあい体験学習（ジャンボのり巻き作り）（79人）
11.28	自主創造プログラム、村民フットサル大会（73人）
12.03	公民館事業、アラサープロジェクト（27人）
12.13（月）	双珠別分館、ウィンナーソーセージづくり（11人）
01.07（金）	中央家庭教育学級、冬休み書き初め教室（19人）
01.10	自主創造プログラム、タコづくり・タコ揚げ大会（７人）
01.11-01.12	公民館事業、親子スキー教室（35人）
01.19（水）	トマム分館、子ども映画会（18人）
02.23	その他事業、旭川医科大学派遣講座（37人）
03.12	自主創造プログラム、鬼峠フォーラム2011（32人）
03.13（日）	占冠分館、手芸教室（押し花づくり）（13人）
03.26	自主創造プログラム、箸づくり教室（14人）

自主創造プログラム12回, 395人　公民館事業６回, 228人　その他事業１回、37人

トマム分館６回, 120人　占冠分館１回, 13人　双珠別分館３回, 36人

中央家庭教育学級４回, 212人　　** 公民館事業ニは総合文化祭が入っていない。

３－６．2011（平成 23）年 〔2010.4~：社会教育第５次中期計画・第３年次〕

05.15（月）	自主創造プログラム「原木なめこ植菌体験」（36 人）
05.18（水）	自主創造プログラム「山菜を楽しむ集い」（8 人）
05.29（日）	自主創造プログラム「職のワークショップ」（21 人）
05 ~07	自主創造プログラム「家庭教育講座」（49 人）
05.06, 08	自主創造プログラム「陶芸教室」（11 人）
06.26（日）	自主創造プログラム「サクラマスフォーラム」（44 人）
07.26 ~07.27	公民館事業、子ども水泳教室（中央）（65 人）
08.02 ~08.03	公民館事業、子ども水泳教室（トマム）（40 人）
09.17~09.18	自主創造プログラム「住民ディレクター要請講座」（24 人）
11.02 ~11.03	公民館事業、占冠村総合文化祭（522 人）
11.04~11.05	自主創造プログラム「近自然セミナー＆ワークショップ」（100 人）
11.18（金）	自主創造プログラム「エゾシカを学ぼう『アニマルウォッティング』」（13 人）
11.27（日）	自主創造プログラム「村民フットサル大会」（66 人）
01.10 ~01.11	公民館事業、親子スキー教室（32 人）
02.13（＊）	公民館事業、占冠村防災セミナー
03（＊）	公民館事業、鬼峠フォーラム
03（＊）	公民館事業、フェイスブックを活用した地域づくり（仮題）
通年	その他事業、「社会教育による地域の教育力プロジェクト」
トマム分館	パークゴルフ（土、9 人）
	親子ふっとベースボール大会（金、26 人）
	親子社会見学（土、33 人）
	ミニバレー交流会（金、20 人）
	バドミントン交流会（火、17 人）
	そば教室（日、22 人）
占冠分館	―
双珠別分館	エゾシカと双珠別（11 人）
	北翔７大学生涯学習現地調査双珠別懇談会（13 人）
中央家庭	タッチウッドづくり教室（81 人）
教育学級	親子ふれあい体験学習（ジャンボのり巻きづくり）（86 人）

自主創造プログラム 10 回, 392 人　公民館事業 6 回, 715 人＋α

トマム分館 6 回, 127 人　占冠分館 0 回,0 人　双珠別分館 2 回, 24 人

中央家庭教育学級 2 回, 16 人　その他事業通年予定　（＊）は予定の行事である

資料４ 公民館事業参加者の属性（2010／平成22年度）

４－１．自主創造プログラム

05.19	山菜を楽しむ集い 10人。男性7割・女性3割。年齢30代~60代 リゾート、無職、村内自営業者、村外など
05.23	原木ナメコ育成・植菌ボランティア事業 28人。男性6割・女性4割。年齢30代~60代 村外多数、観光関係者、自営業者、商工会、無職
06～11	家庭教育講座（中央7回、トマム1回） 89人。0~2歳の幼児と母親
05.30	食のワークショップ 40人。男性4割・女性6割。年齢30代~60代 村外多数、役場、自営業者、リゾート、無職
06～11	書道教室（計10回） トマム地域の子どもと大人
06.21	男の料理教室 大人10人、子ども2人 リゾート、役場、地域の高齢者
06.21,23	陶芸教室 4人。男2人、女2人。 無職（60代）、観光協会（30代）
07.06	山菜を楽しむワークショップ 16人。男11人、女2人（5人？） 地域の高齢者（女性）、アウトドア会社、自営業者
11.28	村民フットサル 73人。村内児童生徒および保護者、体育指導委員
01.10	タコづくり・タコ揚げ大会 7人。小学生
03.12	鬼峠フォーラム2011 32人。男女半々。村外多数、アウトドア会社勤務、リゾート、観光協会、アルバイト、自営業者
03.26	箸づくり教室 14人。中学生以上

４－２．公民館事業（総合文化祭、分館事業を除く）

07.24-0817	夏休みラジオ体操 65人。幼児および小学生
07.25	公民館登山

	13 人。役場・体育指導員
08.02- 08.03	子ども水泳教室（中央） 42 人。小学生
08.05- 08.06	子ども水泳教室（トマム） 46 人。小学生および保護者
12.03	アラサープロジェクト 27 人。20~40 代。女性 6 割・男性 4 割 商工会、観光協会、アルバイト、役場、アウトドア会社
11.11- 11.12	親子スキー教室 35 人。小学生

4－3．その他の事業

02.23	旭川医科大学派遣講座 60 代以上の高齢者。男性 7 割・女性 3 割

(*) 資料出所は口頭にて報告します。

資料 5 公民館各種事業の年次的推移（2006~2011 年）

	2006	2007	2008	2009	2010	2011	計
自主創造プログラム	7	7	8	10	12	10	54
（人）	195	162	254	358	395	392	1,756
公民館事業	7	6	6	6	6	6	37
（人）	631	848	689	610	756	715	4,249
その他事業	0	6	3	1	1	-	11
（人）	0	185+α	161	41	37	-	424+α
トマム分館事業	8	7	8	8	6	6	43
（人）	172	143	175	158	120	127	895
占冠分館事業	1	1	2	1	1	-	6
（人）	12	11	28	8	13	-	72
双珠別分館事業	2	5	3	6	3	2	21
（人）	20	34	23	50	36	24	187
中央家庭教育学級	4	3	3	3	4	2	19
（人）	178	190	145	126	212	167	1,018
全事業計	29	35	33	35	33	26	191
（人）	1208	1573+α	1475	1351	1569	1425+α	7,032+α

資料６「占冠村教育委員会『占冠村第５次社会教育中期計画』

期間　平成20年度～平成24年度（2008.4~2013.3）

経過　2007.04.23　社会教育委員の会・山本敬介委員長への中村博教育長からの「諮問」

10.01　社会教育中期計画策定会議住民一般公開の「お知らせ」

2008.03.31　社会教育第５次中期計画策定

展開　2008.4.1~2009.3.31　第５次中期計画・第１年度

2009.4.1~2010.3.31　第５次中期計画・第２年度

2010.4.1~2011.3.31　第５次中期計画・第３年度

2011.4.1~2012.3.31　第５次中期計画・第４年度　（←いま、ここ！）

2012.4.1~2013.3.31　第５次中期計画・第５年度

『占冠村第５次社会教育中期計画』

基本コンセプト

計画の大目標～「住民がつくる社会教育」

＊自主創造プログラムを事業展開の大きな柱とする。

キャッチフレーズ～「人＋つながり（２乗）＝占冠」

＊２乗の意味・・・つながりの「深まり」

「使える」中期計画

５年間の各年度ごとの「重点項目・評価」と、それのローリング

各年度内における「社会教育事業計画策定・評価方法」とそのスケジュール

（以上、小林甫作成）

以上、了

（参考資料）

講 演 記 録

日　　時　　平成 24 年 2 月 13 日（月）18:00～19:40
場　　所　　占冠村コミュニティプラザ　多目的ホール
件　　名　　占冠村防災セミナー
出 席 者　　31 名（参加者名簿・別紙）
教育委員会　　藤本教育長、小尾教育次長、竹内主任、小林事務補

１　開　　会　　竹内主任
２　主催者挨拶　　藤本教育長
３　講　　演

演題：東日本大震災の現状と防災への教訓
講師：北海道公民館協会提携講師　吉崎文浩氏
〈講演内容〉

津波は川があればあるほど早い。川に近い住宅はほとんどが流されてしまった。５階建てのマンションも４階まで津波が押し寄せ、もう住めなくなってしまった。歩いた中では気仙沼が一番酷い状況であった。港の３分の１に火が入り、絨毯爆撃のような焼け方をしていた。現地は臭いが酷く、粉塵により息が苦しい。仙台は被害が少ないものだと思っていたが、そうではなかった。海岸近くの市営住宅は全て流されてしまった。豪華な住宅が建っているリゾート地区は、砂の上に住宅を建ててしまったため根こそぎ流されてしまった。松島は被害が少ない。島自体が大きな堤防の役割を果たしたため。福島県も見てきたが、原発から２０ｋｍの地点には警察官が立っている。２０ｋｍ圏内に住んでいた住民でも許可証がなければ入ることが出来ない。放射能は地形、風向きでその濃度が変わる。現地には、人も動物もいない。汚染された田んぼを手入れする人もいないので、雑草が生い茂っている。非常に気持ち悪かった。車も多く流され、ナンバープレートが外れているため所有者が分からず手がつけられない。大槌町は町長が亡くなり行政がストップしてしまった。ボランティアは死体の処理には携われない。死臭が酷いがそれは警察、自衛隊等に任せなければならない。本当に一生懸命にやっていたと思う。助かった人達の体験談も聞いてきた。助かった人達は奇跡的に助かったわけではない。助かりたいという強い信念を持っていたからこそ、助かることが出来たのだということが聞き取りの中で分かった。

避難所は知らない人が多い。１００人近く集まった避難場所には食べ物が一切なかった。そこで近隣の集落に頼み込んでみると、話はその集落からまた近隣の集落に伝わっていき、食べ物等をそろえることが出来たという。絆を感じられる素晴らしい話を聞けたと思う。せっかく助かったのに、避難所で死亡してしまう人がいる。数は２８０人程度。避難所の中でもこれからどうしていくか率直に話し合う機会が必要ではと思う。避難所生活を終えると仮設住宅に入る事になった。冬はやはり寒いし、支給もされなくなるようだ。家賃は無料で電化製品や布団等はもらえるが、食糧は一切も

らえなくなる。年金生活者はどうにか暮らせるかもしれないが、３０～４０代の家族持ちの方は仕事もなければ何も無い。暮らすのは非常に困難である。避難所は狭くてストレスがたまる。避難所で生活している方のストレスを少しでも和らげるために我々ボランティアは歌会、お茶会を毎日のように開いていた。避難所には子どももたくさんいたが、私たちは子ども達を預かるというボランティアも行った。情緒不安定な子どもが多く、瓦礫をみたら吐く子ども、海を見たら泣き出す子ども、両親を亡くし一日中泣いている子どもがいた。

釜石市の奇跡。釜石市は被害が少なかった。これは防災教育がしっかりなされていたからである。群馬大学の片田教授は地元の人達の津波に対する認識が非常に低いと危惧していた。ましてや外から来る学校の先生は津波の怖さなど全く知らなかった。そこで片田教授は防災教育のための手引きを作成した。その中の内容を学校の教育に組み込んだ。算数の問題で、速さと時間を学習するとき、津波が来てから何分で家まで到達するかなどを問題として出していた。防災教育の内容は学校の先生や生徒に教えられ、子どもから家庭の親などにも伝わった。地震がおきた時、学校に子どもを迎えに行った親が、一緒に津波にのまれている。学校で避難した子は助かった。子どもが多く亡くなった学校では、先生方が不慣れ、避難ルートが明らかではない等の原因があった。片田教授の手引きの根幹となった言葉は「津波てんでんこ」。これは、津波が来たら各自てんでんばらばらに一人で逃げろという意味。これを家庭で話し合う事が大事。

最近のボランティアの方を見ると帽子もかぶってなければ、マスクもしていない。さらに半袖で作業。ダイオキシンやアスベストが危険であるため指導者がしっかり指摘するべきである。

ボランティアは女性が非常に多い。ある女性のボランティアは非常に熱心な人だった。その人が片付けるところは本当に綺麗な道が出来た。なぜそこまで一生懸命なのかを聞いてみた。「子どもが 2 人いる。自分の目で見た震災の状況、ボランティアを行った様子などを私の子ども達に伝えたいのだ。だから一生懸命やるのだ。」ということだった。非常に感銘を受けた。

家の前に赤い旗がぶら下がっている。赤い旗は「全壊しているので壊しても良いですよ」という意味。黄色の旗は「半壊だから残してください」という意味。だが、これも 10 月までだった。11 月からは瓦礫の撤去にかかる費用と住宅を壊す費用の２つがかかり無駄だということで、荷物が残ったままでも壊すという事になった。行政は冷たいと思った。

復興状況についてだが、全く進んでいない。気仙沼の南区は１０ヶ月も経っているのに本当に進んでいない。陸地の方では、船が置き去りになっている。こう言うものを見ると復興とはなんなのか考えてしまう。陸前高田も進んでいない。それどころか瓦礫の高さがどんどん高くなっている。瓦礫の下にはおそらく遺体がある。それも探さなければならない。

行政の早期「公助」→救援物資の早期確保等。スムーズに行動できるように。地域住民の「共助」→お互いに助け合う。絆を深める。備えよ常に→先人の教えをまず子ども達に伝える。子どもが自分で考えて行動できるように防災教育を徹底的に行うべ

き。こういったことを認識できていれば、今後の心の備えにはなると思う。

ボランティアは、基本的に自給自足、交通費等はもちろん自前。受け入れによっては、食事を用意しているところもある。

4　質疑・意見交換

藤田署長：私の職場からも 1 名被災地に派遣され活動してきた者がいる。大変苦労したという話も聞いた。国全体で復興をさせていかなければならない。我々一人一人では何も出来ないかもしれないが、出来ることには積極的に取り組んでいきたいと思う。

伊藤親良：ボランティアに行きたいという気持ちはあっても、なかなか一歩を踏み出せない。ここにいる人達の中でもそういう人がいると思う。どこら辺で一歩を踏み出せばいいのだろうか。年金生活が始まったら行けばいいのだろうか。仕事を休んででも若いうちに行くべきなのだろうか。そのタイミングが分からない。アドバイスを頂けるだろうか。

吉崎講師：私の年齢は６７歳である。たまたま昨年まで母親の介護をしていた。母が亡くなってからはする事がなくなってしまった。阪神淡路大震災のときは３日ほどボランティアに行って来たが、何もすることが出来ないで帰ってきてしまった。今回の様な大震災はおそらく自分の人生で起こりうる最後のものだろうと考えた。行ってみて何か出来ないか、この年でも可能性があるのではないかと思い行ってみることにした。きっかけは本当に些細なものだ。自分が今できる事は被災地に行ってみないと分からない。被災地を見て何が出来るかを考えた。現地に行くか行かないかは別として、自分に何が出来るかという事を考える事が重要な事だと思う。

天野裕幸：テレビ等で見たことのない映像をみて驚いた。瓦礫があれほど残っているとは思わなかった。瓦礫の処理方法はどうなっているのか。

吉崎講師：秋田、東京、大阪で受け入れているとのことであるが、受け入れ先は非常に少ない。福島の瓦礫など放射能の問題があるところは別としても、放射能の影響がない瓦礫等、国がしっかり基準を定めなければ受け入れが可能な地域も受け入れるとは言わないだろう。国の体制が非常に遅れている。瓦礫処理の車両が足りていないのも理由の１つだが、一番の理由は瓦礫を捨てる所がないということだ。莫大な量の瓦礫だったので、最初は仕分けを行わなかった。今は木材、金属等を現地で仕分けている。だが、それを請け負う業者が決まっていない。決まっても人手が足りない。悪循環が続いている。

5　閉　　会　竹内主任

＜実施状況＞

社会教育による地域の教育力強化プロジェクト
実証的共同研究報告会を終えて

占冠村教育長　藤本　武

今回、４つの自治体（福島県会津坂下町・島根県邑南町・愛媛県新居浜市別子・北海道占冠村）が１つのプロジェクトに参加し、それぞれの地域の課題に対してどうしたら地域が元気にになるか、熟議をとおしてその解決策の糸口を探そうと、本プロジェクトに参加し実証的共同研究を実施しました。

今回の報告会で感じたことは、４地域の置かれている現状・地域の悩みは異なりますが、共通にているのは、少子高齢化による過疎化の進行に対して、どうしたら良いのかそれぞれの地域で一生懸命模索しながら積極的に取り組んでいる様子が見え、本村もみんなに負けないようにと勇気づけられました。それと同時に、うちの村だけでなく同じような（共通する）悩みを持ってことを知り共感できました。

文部科学省での報告会終了後、２月２８日に役場おいて、小林　甫先生、公民館協会成田えみさん、公民館協会提携講師吉崎文浩さんにおこし頂き、村からは私と村長、副村長が参加し今後にむけての報告会を実施しました。（１３：１０～１７：２０）

公民館協会提携講師の吉崎さんには、２月１３日に公民館事業の一環として占冠村防災セミナーの講師をお願いし、「東日本大震災の現状と防災への教訓」と題して村民を対象に、被災地の現状と課題についてスライドをまじえながら講演をおこなっていただいております。

村での報告会の中では､今までの取り組みの内容・文部科学省での報告内容の説明し、それぞれの立場での村に対する思い課題等について意見交換し、村の活性化に今後どうつなげていくかについて、議論を交わしました。

【一部】

・ボランティア活動をとおした地域のつながり、地域のあり方・今後の村の活性化にむけたアドバイス。
・観光、リゾート、教育の関わり。
・各行政区とのかかわり、今後のあり方。
・村の目標、教育目標、総合計画と関連。

今回の、プロジェクトにより色々な問題や課題が見えてきましたが、今後この解決にむけてどのように取り組んでいくのかが大切で、事は始まったばかりであります。今回は公民館事業ということで実施いたしましたが、今後、課題解決にむけて庁内としてどう取り組んで行くのか、積み残した地域との熟議等々問題は山積しておりますが、幸いなことに今後とも北翔大学・北海学園大学の協力をいただけることとなりましたので、次のステップに繋げていかなければならないと思っております。

占冠のむらづくりに思う

北翔大学教授　谷川松芳

「今日は生涯学習の意義と目的についての話し合いである」これは、北翔大学の谷川ゼミの最初のゼミ授業のことばである。本学に入学し１年次で生涯学習論を学び以降、生涯学習展開論、生涯学習計画論、生涯学習行政論等で生涯学習の専門的分野について学習してきたので今年の谷川ゼミでは、高齢者の生涯学習について検討することとした。人間は生れてから死ぬまでの生涯にわたって学びながら生きていくものであることを再確認し、特に少子高齢化社会の中における高齢者を考えることにした。

北海道は全道的に少子高齢化が進行し、農山村においては地域の人口が激減し今まで行われていた地域活動もできない状況となり地域崩壊、限界集落などと言われる地域が増加している。いつの時代も地域の子ども達や高齢者、心身に障害を抱えている弱者といわれる方々が犠牲になっているのである。特に高齢者は地域がどのように変わろうとも生まれ育った地域の中で一生を過ごしたいと思っている。

そこで北海道の中でも高速道路の整備に伴う産業構造の変化や過疎化が進んでいる占冠村に注目した。学内でのゼミ学習後の 2010 年（平 22 年）9 月 13 日（月）～14 日（火）8 人の学生が 1 泊 2 日の日程で占冠入りをした。内容は占冠村村長、占冠村教育委員会教育長表敬訪問、現地調査１として占冠村の概要、占冠村教育行政の概要、占冠村健康福祉行政の概要と現地調査２として冠村内視察、占冠村内の高齢者からの聞き取り調査を行った。さらに、2 日目の早朝 4 時から自然体験活動として雲海テラスに行き自然がもたらす雲海の一部を見学した。

さらに、第２回占冠村調査として 2011 年（平成 23 年）７月 12 日（火）～13 日（水）4 人の学生が 1 泊 2 日で双珠別地域の実態調査（戸数、人口（農家・非農家）、双珠別地域の高齢者との懇談会、双珠別公民館相川分館長との懇談会及び高齢者対策の実態調査(役場職員からの聞き取り)、村役場職員との懇談会を行った。第３回占冠村調査は 2011 年（平成 23）年 12 月 19 日（月）に双珠別地区住民との語り合い（熟議）として実施した。参加学生は就職活動などが重なり 4 人であった。

また、今回の調査は学生の就職や卒業のための調査にすぎないと熟議でも指摘されたことから、そうではなく都会志向の若者が北海道の自然、寒冷地や山村での楽しみ方を発見するため、2 年間にわたって占冠に通った学生 5 人が一番寒さ厳しい２月に氷点下 20 度の中でタオルまわしやシャボン玉結氷を体験し自然を体感し楽しんだ。

北翔大学の学生による 2 年間の調査から占冠の今後の課題が見えてきた。それは、村民自身が占冠の自然の素晴らしさを自慢し誇りにしていないことである。自然が豊かであるから寒さ厳しい厳冬期を迎え山村であるから空気や夜空が綺麗で、田舎であるから自然のままの四季の素晴らしさを堪能することができるのである。このように都会では到底できないことを占冠だからできることを村民自身が自覚することである。そのためには、今までの村づくりを大幅に見直すことも必要であると思う。それは、行政主導の村づくりから村民の目線による発想と創意を取り入れた村民主導の「占冠のむらづくり」が重要な課題になると思う。

今まで慣れ親しんできた村の手法である行政主導から村民自身が主体的に何かに取り組むようにすることは至難の業ともいえよう。しかし、今回の調査、熟議で見えてきたことは、村民が行政からの依頼でもなく行政懇談会でもない学生による調査や熟議で日頃から思っていることを本音で語ってくれたことである。このように地域住民が本音で語り合えることが社会教育、公民館活動の原点であり、今回の北翔大学、文部科学省の補助事業や熟議での手法を今後の占冠づくりの基本方針にしていかなければならないであろう。

北海道・占冠での活動をとおして見る“熟議”の可能性

北海道大学名誉教授　小林　甫

１．北海道・占冠における諸活動の集成

本プロジェクトの北海道・占冠における活動は、次の 5 つの活動を集成した。第一に、占冠村役場とその行政の改革（村長、副村長、教育長ほか）、占冠地域社会における住民組織の活性化（トマム地区、双珠別地区の住民など）、両者とのかかわりにおける公民館改革の継続と革新への取り組みである（教育長、教育次長、社教主事ほか）。議会の関係は今後の課題である。第二に、こうした動向と並んで外部からの大学生と地域住民・役場職員との対話によるエネルギーの相互交換（北海学園大学内田ゼミ生とトマム地区、北翔大学谷川ゼミ生と双珠別地区）、第三に大学教員等の調査と総括への自主的活動があった（小林甫、内田和浩、谷川松芳）。第四に東北の胎動を占冠に届けた「老兵ボランティア」の道公協提携講師（吉崎文浩）の活動、第五に本プロジェクト事務局（関福生事務局長）との協力と支援である。これらを占冠村・占冠地域社会の新生という一点に、焦点を合わせようとしたのであった。

２．北海道・占冠における熟議の歴史的位置

本年度の北海道・占冠における熟議は、役場熟議と、トマム／双珠別の両地区熟議からなっていた。それぞれの内容は 2 月 20 日の報告会資料（藤本、内田／谷川の原稿）に譲って、ここでは両者間（役場とトマム／双珠別との間）の熟議こそが地域改革の牽引力であることを見ておきたい。――占冠地域は、開拓の斧が入ってから 110 年、占冠村ができてから 80 年余にすぎず、他の 3 地区（新居浜市別子山地区、出雲・邑南町、会津坂下町）に比べ歴史が極めて浅い。過去の因習をもたない反面、歴史の厚みももたない。部落会・自治会など（地域住民組織）の結合は脆弱で、現在は「行政区」という位置づけにある。そのため、村役場という地域自治組織は部落会・自治会等との緊張ある関係性を築きえず、村役場の意思が「むら」の意思のごとくに見える。――こうした構図の革新が占冠村／地域社会の課題であり、今回の試みは両者に熟議反復の必要を知らしめた。事態は動き始めている。

３．学校教育の場における熟議民主主義とその可能性

日本において民主主義は、選挙行為に基づく集計民主主義（Aggregative Democracy）的な理解が主流である。しかし、多数決の意味を問い、意思決定の過程そのものを重視する熟議民主主義（Deliberative Democracy）は、いま、まさに喫緊の課題となってきた。8・15 から 60 数年が経ち、3・11 の深い衝撃のなかで、民主主義の新たな段階への集団的な挑戦が、「日本国民社会」において始まろうとしている。国民社会は、①「国家・経済システム」のレベル、②諸個人の「対人的・集合的結合」レベル、③「中間諸組織・集団」のレベル（①②両者からの諸力のせめぎあいの場）という三層より構築されるが、日本において「リアル熟議」は②の教育現場（小・中学校、高校、大学）から始まった。それはリアル民主主義の一番の基本、《自分の意見を言い、人の意見に耳を傾け、率直に議論する》ことを、実践の場において明確化した。熟議参加者は自己の変革可能性を内在させた。

４．過疎深刻化地域の公民館活動と熟議民主主義の深化

集落消滅の危機をその内部にもつ地域社会／自治体にあっては、住民生活と行政全般における「生活形式の民主主義」という視点が重要となる。デンマーク王国の神学者ハル・コック（1904-63）は、日常生活のなかで他の人たちと共に在る各個人の間の、人間的な関係性としての民主主義の達成と、そのための粘り強い社会的な啓蒙と教育の仕事、民衆自身の主体的な生活実践による相互承認と自己変革と訴えた（『生活形式としての民主主義』1945=2004）。こうした生活上の民主主義と「生活憲法」は、日本農村の伝統の中にも散見される（柳田國男『青年と学問』、宮本常一『忘れられた日本人』『村の若者たち』など）。宮本は公民館の前身として戦前の青年館を挙げるが（小林『教育社会史』参照）、戦後の公民館活動、公民館学習論は「生活形式の民主主義」を積み上げてきた。公民館活動の再起と新生と関わり合うことが、村落生活と熟議民主主義を深化させる。来年度以降の課題である。

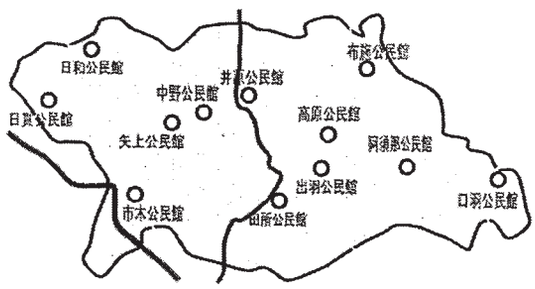
第5章

社会教育による地域の
教育力強化プロジェクト実証的共同研究

邑南町における『熟議』の取組み

研究実績報告書

邑南町の公民館



１．町の概要（平成23年１月31日現在）

○　面　積　４１９．２平方キロメートル
○　世帯数　５，０９７世帯
○　人　口　１２，１１２人

２．公民館関係予算（※平成２３年度当初）

○　人件費　　８５，３６０千円
○　物件費等　　７８，８６１千円（公民館運営委託料４，５４８千円含む）

３．公民館の特色

○　１２館とも、館長（非常勤）・主事（町職員）・事務員（臨時職員）が配置された独立公民館で地域性を生かした活動を展開。
○　公民館活動を円滑かつ自主的に推進するため、全館に当該地域の住民で構成される「公民館活動推進協議会」を設置
○　邑南町公民館連絡協議会を結成し、公民館関係職員の研修（パワーアップ講座ほか）、全町的な事業（ふるさとまるごと博物館事業ほか）にも対応

４．邑南町の公民館

○　羽須美地域
・　口羽公民館（昭和３９年開設）　４０３世帯　８７２人
・　阿須那公民館（昭和２６年開設）　３９６世帯　８９３人

○　瑞穂地域
・　市木公民館（昭和４３年開設）　２１１世帯　４９６人
・　田所公民館（昭和２４年開設）　８１６世帯　１，９０９人
・　出羽公民館（昭和２９年開設）　４１５世帯　９３１人
・　高原公民館（昭和３８年開設）　３７７世帯　９７７人
・　布施公民館（昭和３９年開設）　９５世帯　２２６人

○　石見地域
・　井原公民館（昭和５５年開設）　２８２世帯　７５０人
・　中野公民館（昭和４６年開設）　７７０世帯　１，６２７人
・　矢上公民館（昭和４６年開設）　９３６世帯　２，３９９人
・　日和公民館（昭和４６年開設）　１７３世帯　４４８人
・　日貫公民館（昭和４６年開設）　２２３世帯　５８４人

邑南町の概況

①市町村名

島根県邑智郡邑南町

（平成16年10月に羽須美村、瑞穂町、石見町の3町村が合併）

面　積：419．2㎢

②人　口

平成24年1月末

現在の人口　　：11，915人

65歳以上人口：　4，725人

（高齢化率39．6%）

（世帯数：5，051戸）

③産業別就業率

平成17年10月

第1次産業：25．1%

第2次産業：21．5%

第3次産業：53．5%

邑南町教育の目標

～いきいきと心豊かに学ぶ町を目指して～

☆男女が共に参画する社会づくり
☆生きる力を育む教育の振興
☆郷土を愛する心による地域文化の保存・伝承・創造
☆生涯学習や活動の支援

○　生きる力を育む教育の振興
○　地域を担う人材の育成
○　人権の尊重
○　地域文化の創造

邑南町教育の目標

基本理念

地域を担う人材は地域で育てる

邑南町の願い

子どもは将来の隣人
↓
ふるさとという学校で
『将来の隣人』を育てよう

公民館の特色（邑南町の場合）

◇各小学校区に「施設」があり直営である(独立館）12館

◇地域に密着し、地域のことをよく知る「職員」がいる（館長、主事、事務員)全館３名体制

◇社会教育施設として地域課題と住民ニーズに応じた課題解決に向けた事業を 行っている

公民館活動組織図

邑南町の強み

①社会の要請＝必要課題について関係機関と連携し事業を展開。

②公民館職員が様々な研修を受講できる。

③情報収集・情報発信がしやすい

邑南町の弱み

①公民館主事としての専門性は･･･

②必要課題と要求課題のバランスは･･･

③活動推進委員の役割は･･･

弱みを強み変えるために・・・

公民館主事 → 短期間での社会教育指導者としての知識と技術の習得

活動推進委員 → 部外者から関係者意識へ

→ 地域力パワーアップ

社会教育実践プロジェクト事業の取り組み

●公民館主事のパワーアップ講座　計４回

7／ 6　コミュニケーションスキルアップ講座

10／ 5　公民館事業とマネジメントサイクル

12／ 7　社会教育事業のマネジメントサイクルと事業づくりの実践

2／ 1　事業評価を学ぶ

●公民館活動推進委員合同研修会（ワークショップ）

9／30　「公民館がつなぐ　公民館でつなぐ」

●別子山との交流研修

11／26、27　別子山の宿泊施設へ実施

●主事パワーアップ講座（司内）

4／ 8　職員による自主研修

11／24　高田教授（愛媛大学）による講座

●主事研修の報告会

主事が現場、研修の成果に積極的に参加し、スキルアップをはかる

9月21日に4月から9月までの研修成果の報告会を実施　後期は3月に予定

主事パワーアップ講座

公民館活動推進協議会委員合同研修会

成果として・・・

●研修を終えたところで

目に見える成果は・・・・・。

１８歳のためのはばたき講座

☆邑南町として

○活動推進委員を表舞台に

主事は黒子に･･･根回しをしっかり･･･

○プロセスを大事に継続･･･

ＰＤＣＡからＲＰＴＤＲＦへ

○逆転の発想･･･

もったいないを合い言葉に

何もないじゃなくこれがある！

楽しみから役立つへ！

今日はよろしくお願いします。

邑南町公民館連絡協議会

邑南町公民館主事パワーアップ講座

《概要版》

１．趣　旨

邑南町は、島根県中山間地域に位置し、少子高齢化、脆弱な財政基盤等深刻な課題を抱えている。したがって、地域コミュニティの拠点である公民館には、福祉、防災、産業振興、子育て支援等様々な課題に向けての取組が求められ、公民館主事への期待は極めて大きいが、正規職員であるが故に数年で異動となり、人材の育成と主事としての専門性の継続が大きな課題である。

その状況を打破するために、社会教育指導者としての公民館主事の知識と技術を高め、各公民館が住民とともに“熟議”を重ねる場の創造することにより、地域課題の解決に向けた取組が進められることを期待して本講座を開催した。

２．ねらい

地域の課題解決に取り組む公民館主事のコミュニケーションスキルの向上を図り、マネジメントサイクルに基づいた事業の進め方の手法を身につける。

３．内　容

	テーマ	内　容	時間
第１回	○公民館と公民館職員に関する基礎知識 ○公民館主事に必要なコミュニケーションスキル	○法令や中教審答申等をもとに公民館の役割を確認 ○日常の業務に必要な話す力（会話力）や、聞く力（傾聴力）を高めるトレーニング	150 分
第２回	○公民館事業のマネジメントサイクル ○リサーチの手法	○「ＲＰＴＤＲＦ」のマネジメントサイクルの理解 ○調査シート作りと聞き取り調査の演習	120 分
第３回	○プランニングの手法	○調査結果を活用した事業プランニングの演習	120 分
第４回	○評価の手法	○マネジメントサイクルと評価の関係の理解 ○活用することを目的に設計したアンケート作りの演習	150 分

４．成　果

○４回の研修を終えた翌日と１週間後の２日にわたって開催した「１８歳のためのはばたき講座」で実際に評価シートを使い、アンケートも行ってみた。この講座は公民館主事による寸劇や、プレゼンテーションも交えての４講座であったが、受講者７１人の、アンケート回収率は１００％、設問１「今回の講座内容はあなたが社会に出たときどれくらい役立つと思いましたか？」という問いに対し「大変役立つ」「まあまあ役立つ」という回答が４講とも８５～９６％と高い結果が出て、確かな手応えを感じた。

○４回の公民館主事パワーアップ講座の間には９月３０日に１２公民館合同で活動推進協議会ワークショップも行い、いかに公民館を元気にするか、そのためには活動推進員が当事者意識を持って元気

に動いていなければならないことを話し合った。また、２月２５日には、「おおなんドリーム」学びのつどいを開催し、公民館、自治会、学校、学校支援ボランティアの４つの成果発表と食をテーマにした情報交換会を開催するよう現在準備をすすめている。公民館からは実証！地域力醸成プログラム事業「ふるさとまるごと博物館事業」についてプレゼンテーションを行う。ここでも本事業で学んだ成果を発揮したいところである。活動推進委員やふるさと案内人（みちばた学芸員）など住民がいきいきと子どもたちへの伝承活動や新たな地域活動を産み出してゆけるよう、そして、だれもが誇りを持って暮らしてゆけるよう公民館パワーで元気な町にしてゆきたいものである。

公民館と公民館職員に関する基礎知識

１　公民館の目的と事業

社会教育法の第５章公民館（第２０条～第４２条）を一度は見ておきましょう。

（１）目　的

事業を行い、住民の教養の向上、健康の増進、情操の純化を図り、生活文化の振興、社会福祉の増進に寄与する。

（２）公民館の事業

①　定期講座
②　討論会、講習会、講演会、実習会、展示会等
③　図書、記録、模型、資料等の収集と利用
④　体育、レクリエーション等の集会
⑤　各種団体、機関等の連絡
⑥　住民の集会、その他の公共的利用

（３）公民館の禁止行為

①　営利事業（援助を含む）
②　特定政党の利害に関する事業（選挙における特定候補者支援を含む）
③　特定宗教の指示

（４）公民館の運営評価

努めなければならない

２　公民館職員（主に主事）の仕事

（１）地域を知る

地域住民の実態を知る。

（２）地域課題をつかむ

地域住民の思いや願いをつかみ、どのような問題を抱えているのかをつかむ。

（３）事業を企画・運営する

事業の企画・運営とは、①地域課題の把握→②学習課題の設定→③学習機会の提供→④学習成果を活用する場の提供という一連の業務をさす。

３　公民館事業の種類

（１）地域の生活に根ざした事業

憩いとふれあいの場の提供、つどいの場の提供、季節の行事など

（２）住民の教養を高める事業

趣味や教養の講座、講演会、用具の貸出など

（３）地域の輪をつくる事業

交流事業、ボランティアによる住民参加など

４　公民館事業の構造

公民館の事業は、次の４つの段階に区分できる

1	学習準備の段階	住民に興味・関心を持ってもらう	広報、展示、情報提供など
2	学習の基礎を形成する段階	学習の機会を提供する	講座、講演会、研修会の開催など
3	積極的な学習を推進する段階	自主的な学習やグループづくりを支援する	会場や資料の提供など
4	学習の成果を還元する段階	学習を生かす場や機会を提供する	発表の場、活動の場の提供など

５　公民館職員（主に主事）が身につけておきたい技能

（１）人と関わるために必要なコミュニケーションの技能

①　ホスピタリティの技能

②　コンセンサスを支援する技能

④　カウンセリングに関する技能

（２）情報を収集する技能

（３）情報を整理し、課題を抽出する技能

（４）学習課題を創造し、事業を企画する技能（発想力）

（５）事業を運営する技能（計画力、実行力、組織経営力、評価・分析力）

（６）情報を発信する技能（表現力、デザイン力）

公民館事業とマネジメント

流行に乗るという訳ではないのですが、公民館の事業運営を「マネジメント」の考え方にあてはめて考えてみることにしましょう。

↓

「マネジメント」＝「目標、目的を達成するために必要な要素を分析し、成功するために手を打つこと」という考え方が一番わかりやすいと思います。

↓

「マネジメント」の基本的な流れとして「ＰＤＣＡサイクル」が一般的になっているようで、平成 20 年の社教法の改正で公民館の評価が努力義務としてしめされたことから、公民館事業にも「ＰＤＣＡサイクル」を当てはめて考えようという動きがありますね。

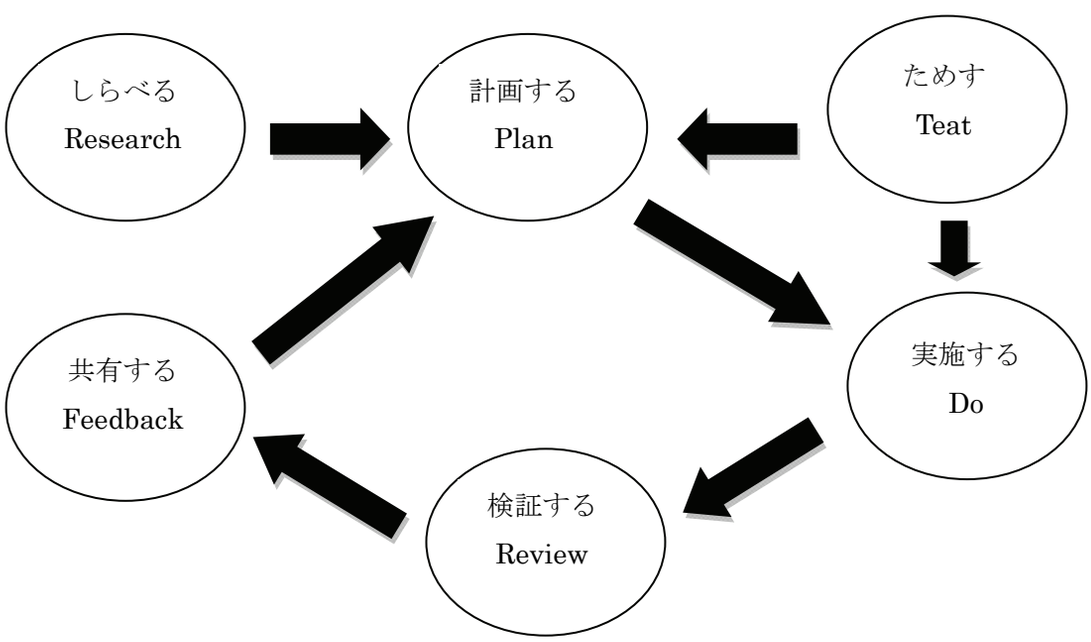
↓

「ＰＤＣＡサイクル」は、「計画（Ｐｌａｎ）」「実施（Ｄｏ）」「確認・評価（Ｃｈｅｃｋ）」「改善行動（Ａｃｔｉｏｎ）」を連続して行い、サイクルを確立しようというものです。・・・が

↓

実際の「マネジメント」では、「ＰＤＣＡ」意外にも重要な作業がありますので、ＩＩＨＯＥ［人と組織と地球のための国際研究所］の川北秀人氏の考えを参考に「マネジメントの基本サイクル」を考えてみましょう。

（１）マネジメントの基本サイクル



（２）マネジメントの基本サイクルを活用して事業進める上で必要な“チカラ”

Ⅰ 事業の基礎をつくる	①目的・目標をしぼる	・発想力 ・情報収集力 ・表現力	
	②調べる	・発想力	・調査の技法
	③ニーズを確かめる	・表現力	・
	④会議を運営する	・組織運営力 ・表現力	・資料作成の技法 ・会議の技法
	⑤原因を確認する	・発想力 ・分析力	
	⑥事業を振り返る	・発想力	・評価の技法
Ⅱ 事業を伝える	①事実に基づいて見通す	・発想力 ・分析力	
	②計画する	・発想力 ・表現力	・計画立案の技法
	③協力を募る	・関係力 ・表現力	
	④体制を作る	・関係力 ・組織暗影力	
	⑤経費管理をする	・計算力	
	⑥協働する	・関係力 ・表現力	

Ⅰ－②しらべる

かぞえる	量として把握する	・単位のついているものを数える（人数、個数、件数など） ・全体像を概算する ・不足数を逆算する
くらべる	時間、場所、タイプごとに比較する	・過去、現在、未来を比べる ・異なる地点、場所を比べる ・特徴や属性ごとに比べる
たずねる	「かぞえにくい」「くらべにくい」ものは相手に聞いてみる	・自記式調査法（聞き取り調査、インタビューなど） ・他記式調査法（アンケート、インターネット調査など）

【注意】協力者へのフィードバックは必須！

公民館主事スキルアップ研修会　課題シート［計画編］

「まちづくりアンケート」を実施した結果、住民の多くが地域環境の現状について「※※※（①）」に課題意識を感じていることがわかった。
また、「まちづくり活動を促進するためにはどんなことが重要だと思うか」という問いに対して、「☆☆☆②」と回答した住民が多かった。
さらに、「あなたが思う望ましいまちづくりの進め方はどのようなものか」という問いに対して、回答した内の６割の住民が「地域の住民が主体となって進め、行政が支援する」と答えている。

上記の状況を踏まえて、来年度の公民館事業の企画を立てましょう。

（設定①）「※※※①」は、下表の中から選んでください。（複数可）

	犯罪からの安全性・防犯や見守り活動など		ごみ収集の状況
	高齢者や障害者を対象にした福祉サービス		日常の買い物の利便性
	交通事故からの安全性		公園や緑地の利用のしやすさ
	地震・水害など自然災害からの安全性		自主防災組織の体制
	身近な生活道路の整備状況		地域コミュニティの人間関係
	空気や山、川などの自然環境		子ども達の健全育成
	病院や診療所などの医療機関		

（設定②）「☆☆☆②」は、下表の中から選んでください。（複数可）

	まちづくり活動の情報を提供すること
	まちづくり活動に係るリーダーの育成や確保
	まちづくり活動についての意識啓発や研修会の開催
	まちづくり活動への財政的な支援制度の整備
	まちづくり活動を行なう際の会場や備品、消耗品の提供
	行政職員や教員などのまちづくり活動への参加協力
	他の模範となるまちづくり活動を行なう団体への表彰

（設定③）次の条件を満たしてください。

① 事業範囲を単館公民館の域内としてください。
② 予算を含め、企画書の内容は、実現が可能なものにしてください。
③ 事業の内容に学習の要素を必ず入れてください。
④ 事業の内容は、社会教育法に示された公民館の事業の範囲内としてください。

「評価」を学ぶ

※評価には、「事業評価」と「運営評価」がありますが、ここでは「事業評価」に絞って研修します。

事業評価は・・・その事業に点数をつけるものではない。次の事業でより良い成果を得るために行うものである。

事業評価は・・・事業全体で行うものである。

（１）事業全体で行う評価

計画する	企画を考える	企画者のアイディアや事業に対する思いについて依頼者や関係者に意見を求める。
	計画書を書く	ねらいと内容が合っているか、手法や進め方は効果的（効率がよい）か、コストは適切か等を第３者に吟味してもらう。
ためす		計画通りに実施できたか【→結果によって修正】
実施する		「良い結果」「悪い結果」の両方を運営に関わった人に記録してもらう。数日間にわたる事業の場合も、１日ずつ記録に残す。
検証する	事業の直後	参加者からアンケートや聞き取りによって情報を集める。
	しばらくたってから	抽出した参加者への追跡調査を行い、成果がどのように生かされているか調べる。

（２）「実施する」時の評価記録

	予測できなかった		予測できた		
良い成果					良い成果
悪い成果					悪い成果
	理由	内容	内容	理由	

（３）自己評価の４つの点

①　視点・・・ふりかえりや評価の対象となる項目

②　配点・・・１００点を振り分ける

③　採点・・・事業の最中または事業後すぐに

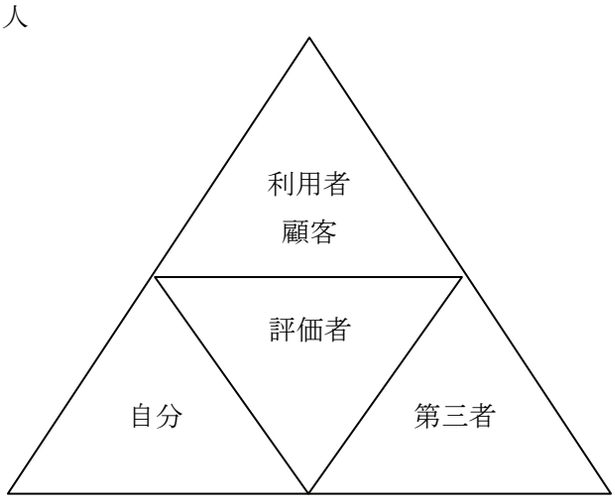
④　改善点・・文章化（箇条書き）して記録に残す

（４）評価シート

［例］

項目	設問	配点	採点
目的・目標の設定			
プログラム・デザイン			
準　備			
スタッフ・組織・ボランティア			
安　全			
コミュニケーション			
広報活動			
環境への配慮			
予　算			
評　価			
	合　計	１００	

（５）評価する人



（６）活用することを目的に設計したアンケート

第３回資料 ①

①テーマ：

②行政の願い：

③住民の願い：

④現状：

⑤公民館の願い：

⑥めざす姿：

⑦なにをするか：

⑧資源（人）：

⑨資源（もの）：

⑩資源（こと）：

⑪予算：

第３回資料 ②

⑫事業名：

①テーマ：

②行政の願い：

③住民の願い：

④現状：

⑤公民館の願い：

⑥めざす姿：

⑦なにをするか：

⑧資源（人）：

⑨資源（もの）：

⑩資源（こと）：

⑪予算：

平成 23 年度「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」における実証的共同研究

社会教育でつくるふるさとの未来予想図プロジェクト事業
～“熟議”で地域に新しい風を起こそう～

邑南町まちづくりアンケート調査（ご協力のお願い）

皆様には平素からまちづくりにご協力ご支援をいただき、厚く御礼を申し上げます。

今年度、邑南町公民館連絡協議会では文部科学省の委託事業**「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」における実証的共同研究**に取組み、将来のまちづくりをみんなで共に考え、実践していきたいと考えております。つきましては、出羽地区を対象に、皆さんのお考えを知るためのアンケート調査を行なうことにしました。お忙しいところ恐縮ですが、調査の趣旨をご理解いただき、率直なご意見をお聞かせ下さい。よろしくお願いいたします。

平成２３年１１月１３日

邑南町公民館連絡協議会　会長　吉川　正

（記入上の注意）
お答えは設問ごとの指定にしたがって〇を付けたり、必要事項を記入してください。
ご記入いただいた調査票は、出羽公民館に提出して下さい。

問１．あなた自身のことで該当するものに〇をつけて下さい。
（１）あなたの性別　１　男　　２　女
（２）あなたの年齢　１　２０代以下　２　３０代　３　４０代　４　５０代
５　６０代　６　７０代　７　８０歳以上
（３）あなたの居住地　１　出羽地区内　２　出羽地区外
（４）現在地での居住年数　１　５年以内　２　１０年以内　３　１５年以内
４　２０年以内　５　３０年以内　６　３０年超

問２．あなたは出羽地区に対して「自分のまち」としての愛着をどの程度感じていますか？
１　とても愛着を感じている。　２　どちらかというと愛着を感じている。
３　あまり愛着を感じていない。　４　まったく愛着を感じていない。

問３．あなたは現在の生活全般に満足していますか？
１　とても満足　２　まずまず満足　３　やや不満　４　とても不満

問４．あなたは次の施設を利用したことがありますか？
１　出羽公民館（いきいいきセンター）　２　健康センター元気館　３　久喜林間学舎
４　久喜体育館

問５．あなたは次の地区の行事、ボランティア活動などを知っていますか？
知っているもの〇をつけてください。（複数回答可）
１地区民運動会　２招魂祭　３まんぷくまつり　４自然観察会　５お月見コンサート
６代官まつり　７銀山まつり　８みずほ夏まつり　９新年互礼会・新春走ろう会
１０敬老会　１１バレーボール大会　１２ソフトバレー大会　１３空き缶拾い

問６.あなたはこれまで次の地区の行事､ボランティア活動などに参加したことがありますか？
（複数回答可）
１地区民運動会　２招魂祭　３まんぷくまつり　４自然観察会　５お月見コンサート
６代官まつり　７銀山まつり　８みずほ夏まつり　９新年互礼会・新春走ろう会
１０敬老会　１１バレーボール大会　１２ソフトバレー大会　１３空き缶拾い

問７．問６のすべてに〇が付かなかった方にお聞きします。あなたが「参加したことがない」と答えられた理由はなんですか？（複数回答可）
１　時間に余裕がない　２　どんな活動が行われているか知らない
３　参加するきっかけがない　４　一緒に参加する友人がいない
５　関心がない　６　体が丈夫でない
７　人間関係がわずらわしい　８　自分にあった活動がない
９　その他（　　）

問 8. まちづくり活動を促進するためにはどのようなことが重要だと思いますか？
（複数回答可）
１　まちづくり活動の情報を提供すること
２　まちづくり活動に係るリーダーの育成や確保
３　まちづくり活動についての意識啓発や研修会の開催
４　まちづくり活動への財政的な支援制度の整備
５　まちづくり活動を行なう際の会場や備品、消耗品の提供
６　行政職員や教員などのまちづくり活動への参加協力
７　他の模範となるまちづくり活動を行なう団体への表彰
８　その他（　　）

問 9. あなたが思う望ましいまちづくりの進め方はどのようなものでしょうか。
（複数回答可）
１　地域の住民と市や県、国などの行政と対等の立場に立ち進める。
２　地域の住民が主体になって進め、行政が支援する。
３　行政が主体になって進め、地域の住民が協力する。
４　地域の住民が進める。
５　行政が進める。
６　その他（　　）

問 10. あなたはこれからも出羽地区に住みたい、住み続けたいと思いますか？

1　これからもずっと住み続けたい。これから住みたい。
2　どちらかといえば住み続けたい。これから住みたい。
3　どちらかといえば住みたくない。
4　住みたくない。できれば他の地域に引っ越したい。
5　どちらともいえない。

問 11. 出羽地区で行なわれている様々なコミュニティ活動やボランティア活動について、あなたはどのような意識をお持ちですか？

1　自分達のまちや地域を住みよくするために、自ら進んで参加する。
2　自分から進んでまではやらないが、働きかけがあれば参加する。
3　あまり関心がないので、熱心な人にまかせる。
4　参加するつもりはない。
5　その他（　　）

問 12. 地域活動を進めるためには経費が必要になります。その財源についてどのような形が望ましいと考えますか？（複数回答可）

1　公民館の予算など、公費ですべて負担すべきである。
2　公の予算と住民の負担を合わせて行うべきである。
3　様々な助成制度などに応募し、財源を確保すべきである。
4　住民の寄付金制度など、新しいシステムをつくって予算を充実すべきである。
5　無理に予算を集める必要はない。
6　その他（　　）

問 13. あなたが出羽地区を自慢したいと思うことを 3 点記入して下さい。

（1）

（2）

（3）

問 14. あなたが出羽地区について嫌いなこと、心配なことがあれば 3 点記入して下さい。

（1）

（2）

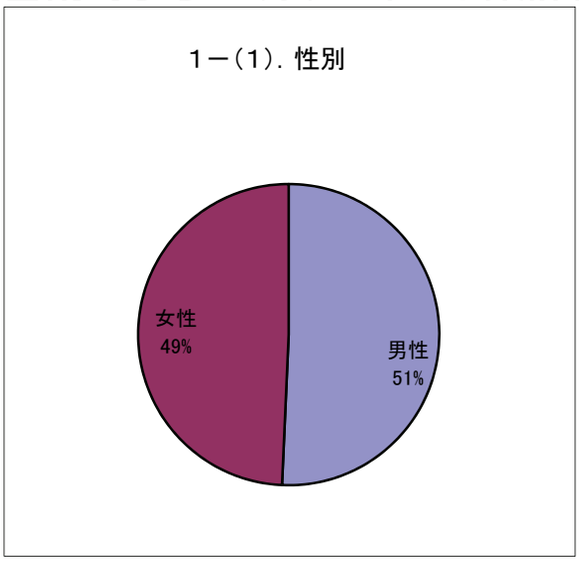
（3）

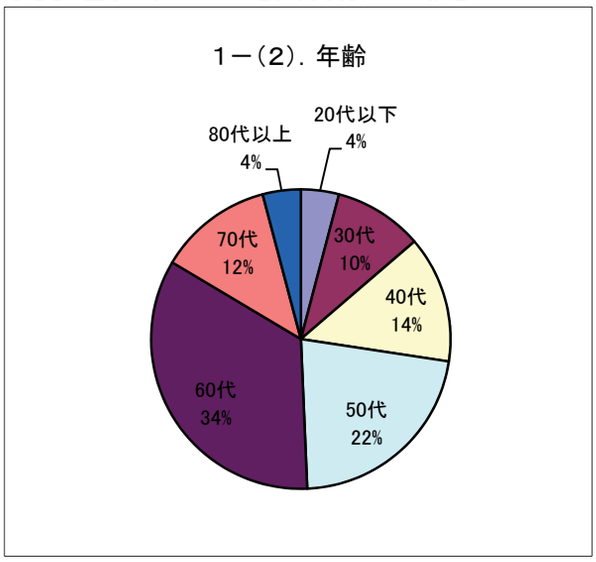
問 15. 出羽地区の地域環境の現状について、あなたはどう評価していますか？

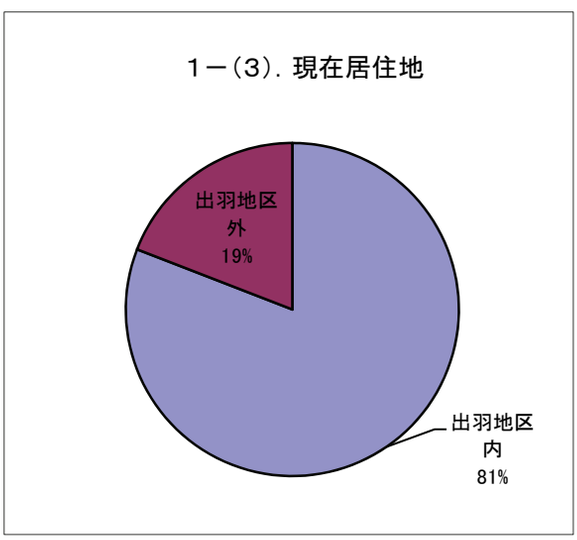
項　　目	大変よい	よい	ふつう	悪い	特に悪い
犯罪からの安全性・防犯や見守り活動など	5	4	3	2	1
高齢者や障害者を対象にした福祉サービス	5	4	3	2	1
交通事故からの安全性	5	4	3	2	1
地震・水害など自然災害からの安全性	5	4	3	2	1
身近な生活道路の整備状況	5	4	3	2	1
空気や山、川などの自然環境	5	4	3	2	1
病院や診療所などの医療機関	5	4	3	2	1
ごみ収集の状況	5	4	3	2	1
日常の買い物の利便性	5	4	3	2	1
公園や緑地の利用のしやすさ	5	4	3	2	1
自主防災組織の体制	5	4	3	2	1
地域コミュニティの人間関係	5	4	3	2	1
子ども達の健全育成	5	4	3	2	1

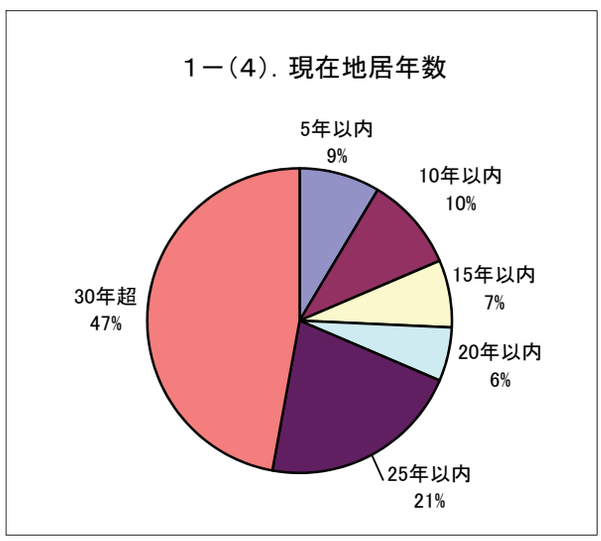
問 16．その他ご要望、ご意見があれば何でも記入してください。

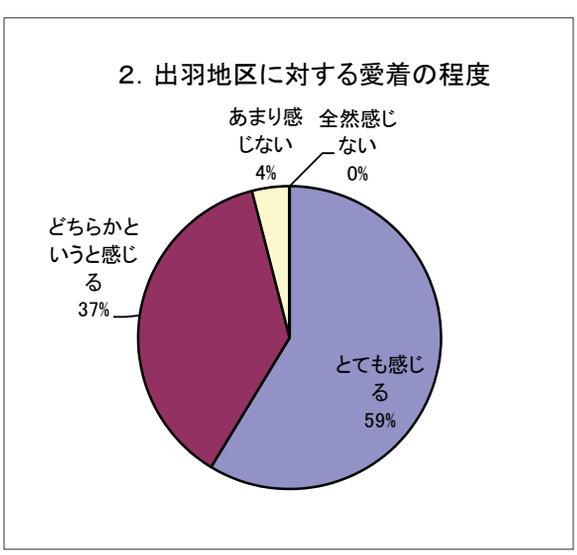
邑南町まちづくりアンケート集計表（出羽地区）　【回答数　75枚】

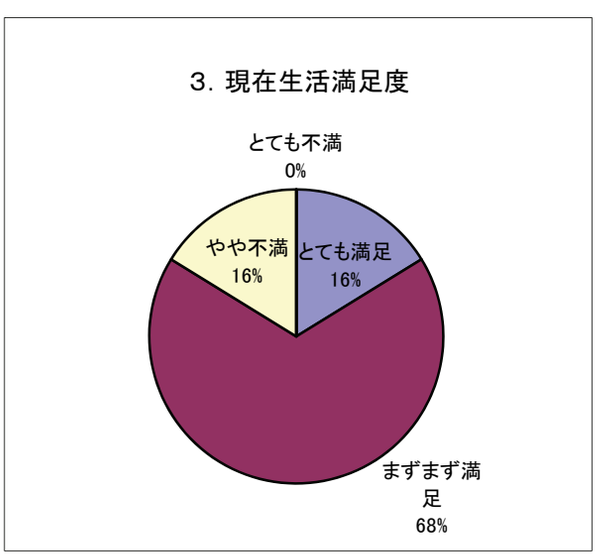


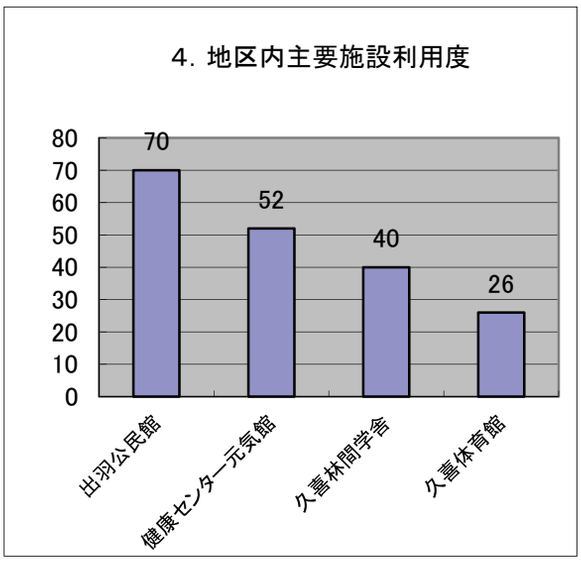


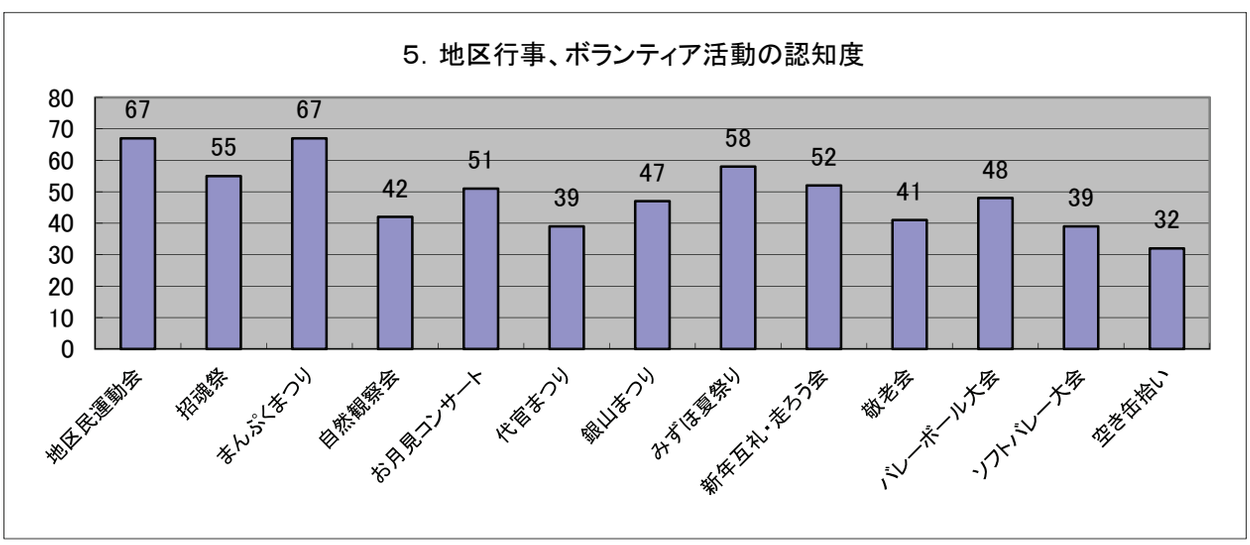


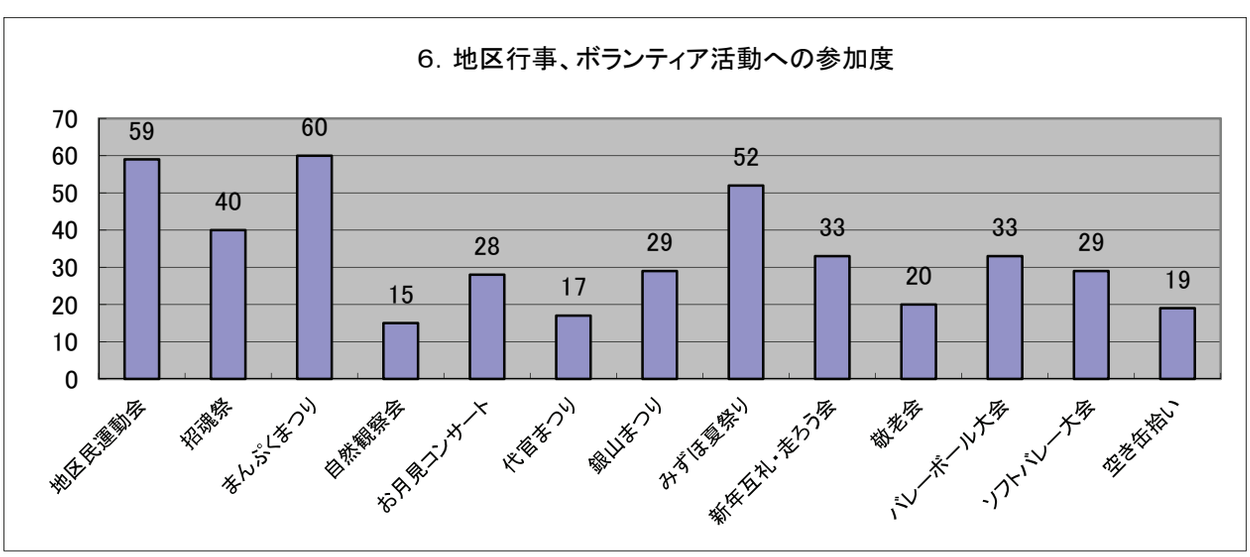


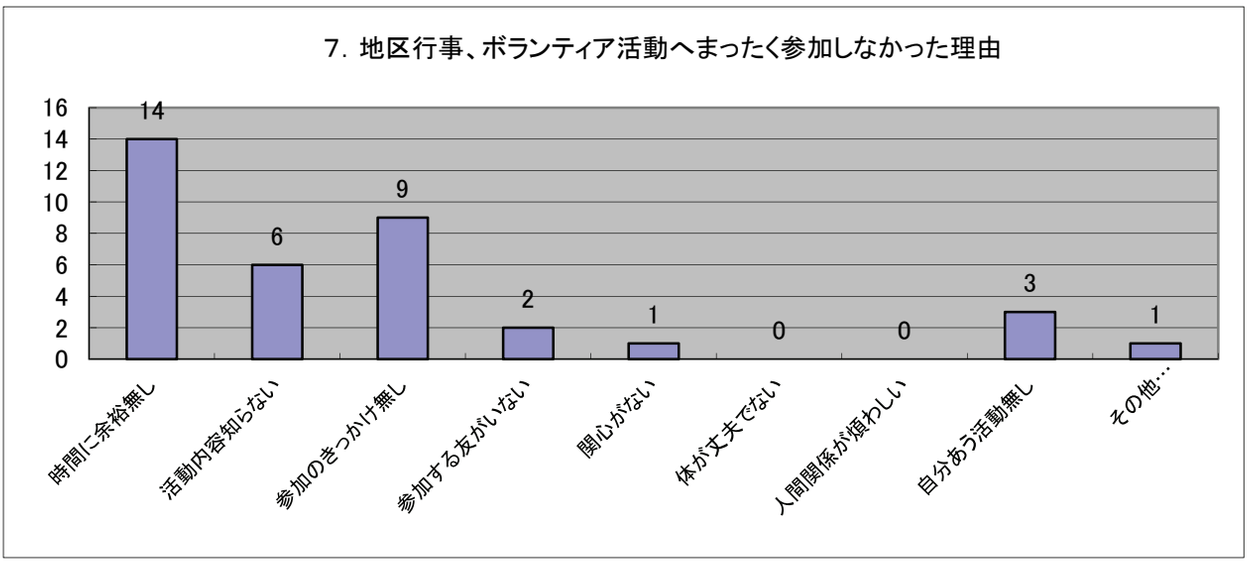


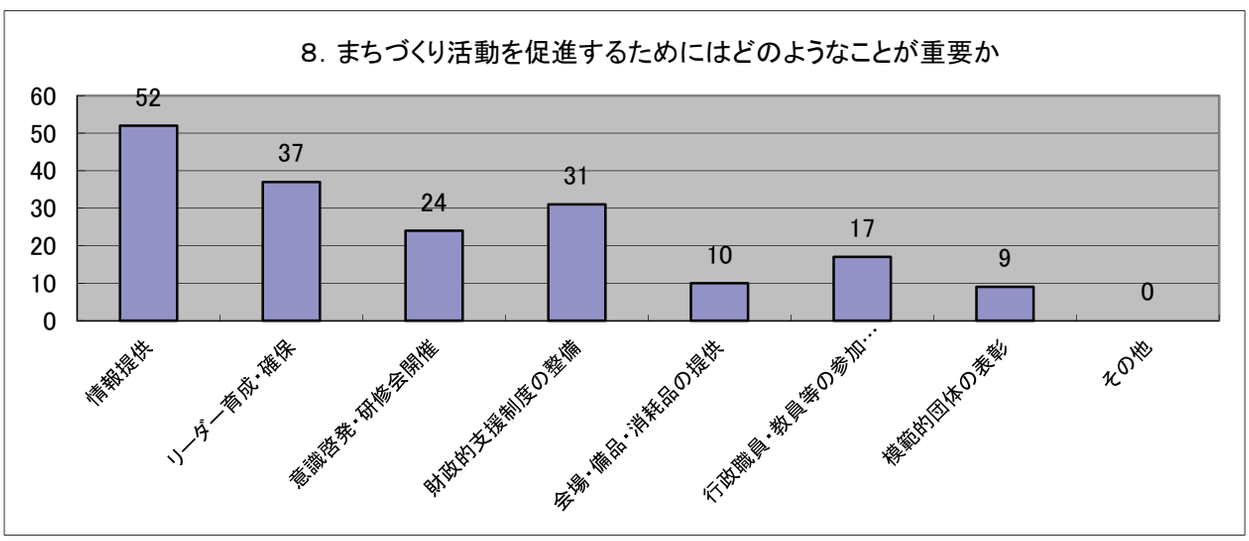


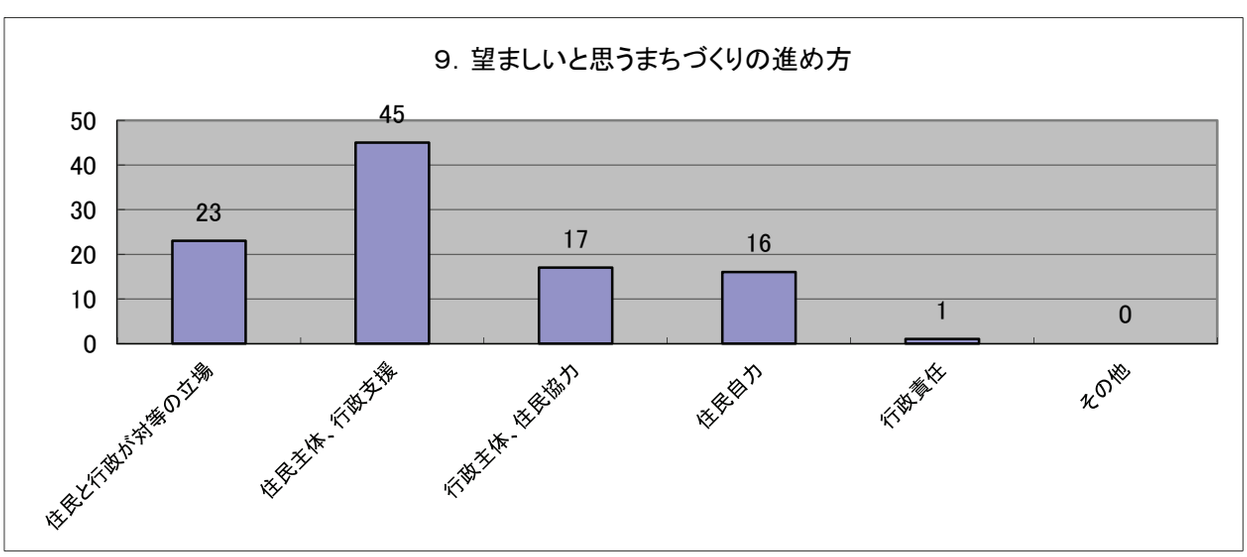

4. 地区内主要施設利用度
80
70
60
50
40
30
20
10
0
70
52
40
26
出羽公民館
健康センター元気館
久喜林間学舎
久喜体育館

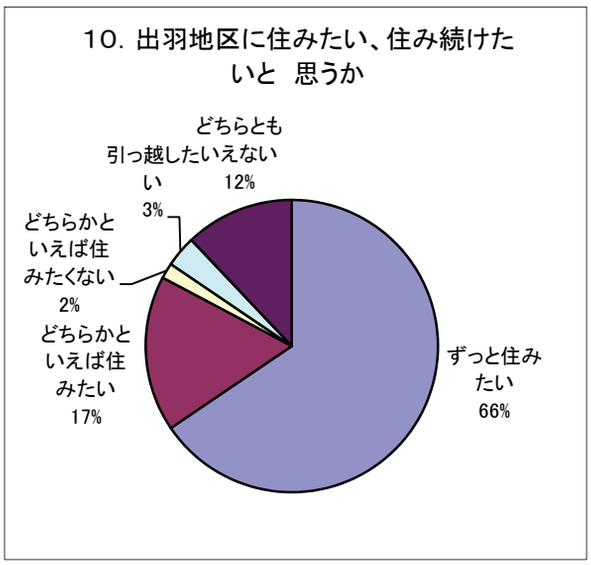

5. 地区行事、ボランティア活動の認知度
80
70
60
50
40
30
20
10
0
67
55
67
42
51
39
47
58
52
41
48
39
32
地区民運動会
招魂祭
まんぷくまつり
自然観察会
お月見コンサート
代官まつり
銀山まつり
みずほ夏祭り
新年互礼・走ろう会
敬老会
バレーボール大会
ソフトバレー大会
空き缶拾い

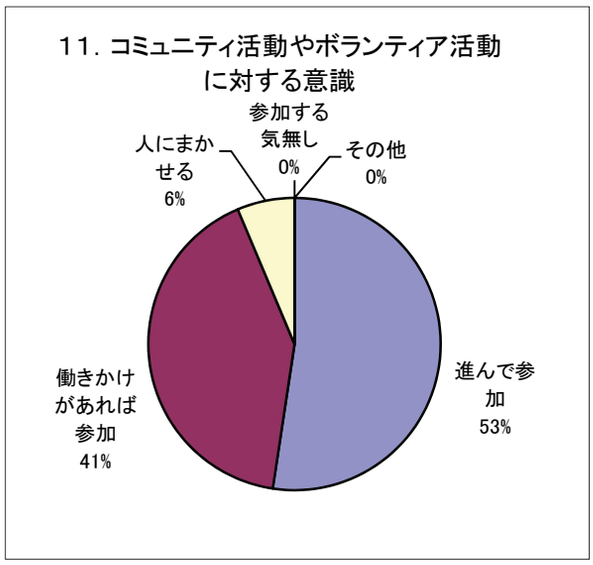

6. 地区行事、ボランティア活動への参加度
70
60
50
40
30
20
10
0
59
40
60
15
28
17
29
52
33
20
33
29
19
地区民運動会
招魂祭
まんぷくまつり
自然観察会
お月見コンサート
代官まつり
銀山まつり
みずほ夏祭り
新年互礼・走ろう会
敬老会
バレーボール大会
ソフトバレー大会
空き缶拾い

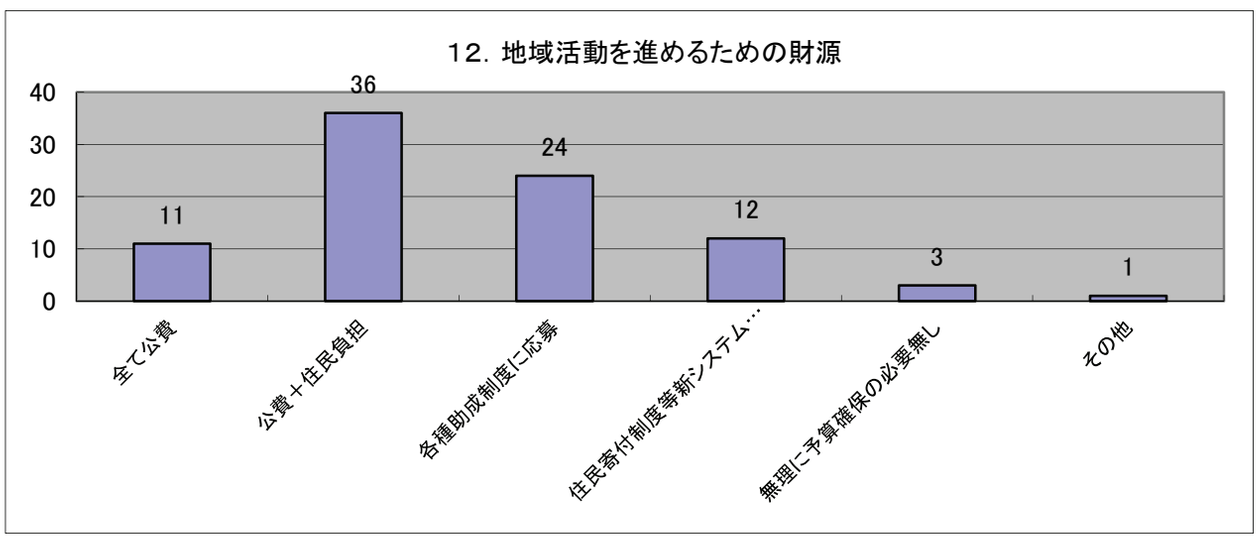

7. 地区行事、ボランティア活動へまったく参加しなかった理由
16
14
12
10
8
6
4
2
0
14
6
9
2
1
0
0
3
1
時間に余裕無し
活動内容知らない
参加のきっかけ無し
参加する友がいない
関心がない
体が丈夫でない
人間関係が煩わしい
自分あう活動無し
その他…


8. まちづくり活動を促進するためにはどのようなことが重要か
60
50
40
30
20
10
0
52
37
24
31
10
17
9
0
情報提供
リーダー育成・確保
意識啓発・研修会開催
財政的支援制度の整備
会場・備品・消耗品の提供
行政職員・教員等の参加…
模範的団体の表彰
その他


9. 望ましいと思うまちづくりの進め方
50
40
30
20
10
0
23
45
17
16
1
0
住民と行政が対等の立場
住民主体、行政支援
行政主体、住民協力
住民自力
行政責任
その他


10. 出羽地区に住みたい、住み続けたいと 思うか
どちらとも引っ越したいえない 12%
どちらかといえば住みたくない 3%
どちらかといえば住みたい 2%
ずっと住みたい 66%
17%


11. コミュニティ活動やボランティア活動に対する意識
参加する気無し 0%
人にまかせる 6%
その他 0%
働きかけがあれば参加 41%
進んで参加 53%


12. 地域活動を進めるための財源
40
30
20
10
0
11
36
24
12
3
1
全て公費
公費＋住民負担
各種助成制度に応募
住民寄付制度等新システム…
無理に予算確保の必要無し
その他

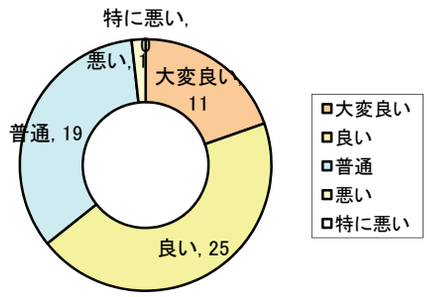
13. 出羽地区を自慢したいと思うこと、3点

・出羽川 ・夏祭り ・ まんぷく祭り ・ やる時には協力してしっかりする ・ 自然が守られている ・ 公民館活動が充実 ・ 地理的な地点 ・ いざという時に一つになるのが一番いい ・ 出羽牛馬市が有った ・比較的活気がある ・ 何事に対しても協力してもらえる環境 ・ 何かをやるとなれば熱くなるところ ・ 若い人が比較的多く地域行事に参加している ・ 自治精神が富んでいる ・ 地域力 ・ かっぱ亭 ・ 出羽地区民気質 ・ 農産物が豊富 ・ 地域自然の地域を活性化しようという意識が強い ・ 久喜銀山 ・農産物がおいしい ・ 人が集まりやすい ・ 穏やかで良い町 ・ 自然がある ・ 住みやすい ・ 旅行村 ・ 町を走る県道がある ・ 福祉施設が有る ・ 自然が沢山ある ・ 団結力 ・ 子供を大切にする(よその家の子も) ・ 集落ぞれぞれ地域性があり仲が良いと思われる ・ 行事などで地域が一体となるところ ・ 老人が元気でいきいきしているところ ・ 人々が暖かい ・ 他地区から来られて定住されているのは住みよい証拠 ・ 他地区に比べて協力する人が多い ・ 地理的に便利が良い ・ 親しみやすい環境 ・ 志都の岩屋 ・ 地域住民が協力的 ・ 声をかけやすい ・ 行動力 ・ 協力すること ・ 住民のやる気 ・ 助け合い ・ 仲間づくり ・ お互いに地域の人が助け合っている ・ 自然 ・ イルミ ・ 神楽 ・ 人情 ・ 住民が一つの行事に参加が出来るこ

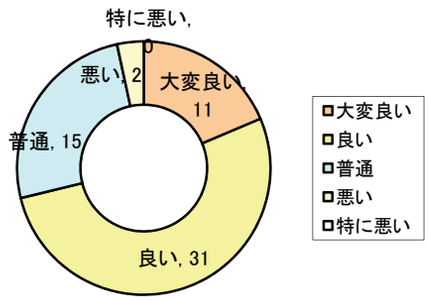
14. 出羽地区について嫌いなこと、心配なこと、3点

・若い人が少ない ・ 高齢の方へのフォロー ・ 世代を越て技術や知恵を伝えていく機会が減ることが心配 ・ 新しいことの実行がなかなか進まん・ 行政の意向が多い(大なり) ・ 足りない事に無関心 ・ 進化をもっとはっきりさせるべき ・ こどもが少ない ・ お金が少ない ・ 町住宅に入っている者が行事などに参加しない ・ 高齢化 ・ 少子化 ・ 講中に人が少なく大変なのにやめられない ・ 行事が多いkoto ・ 利便性のよいコンビがほしい ・ 後継者が少ない ・ 商店での買い物客が少ない ・ 良い事も悪い事もすぐうわさになること ・ 若い人が住む(住居、職場)ところが少ない ・ 夜の外灯が少ない ・ 若者定住 ・ 銀山祭りは良いが締め付けはいやだ ・ 老人がもっと参加出来ること ・ 若い人がもっと参加出来ること ・ 空家が目立つようになった

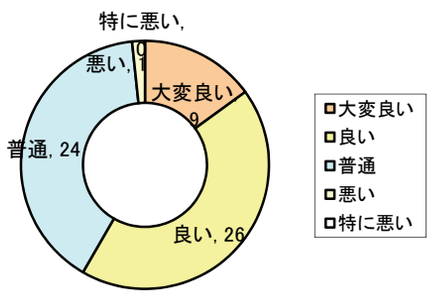
15．地域環境評価
防犯見守り活動



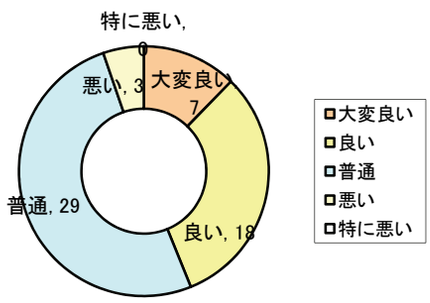
15．地域環境評価
社会的弱者対象福祉サービス



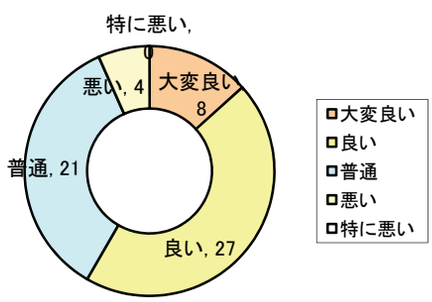
15．地域環境評価
交通事故からの安全性



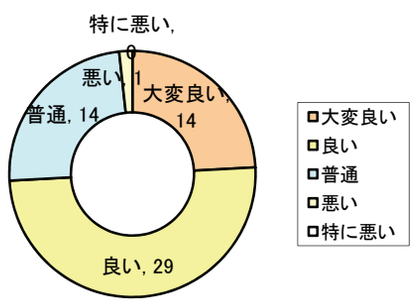
15．地域環境評価
自然災害からの安全性



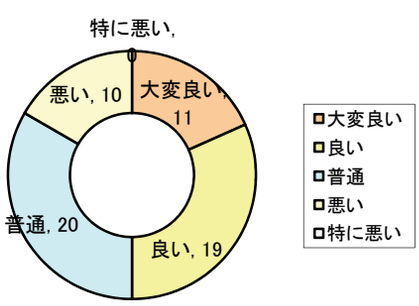
15．地域環境評価
生活道路の整備状況



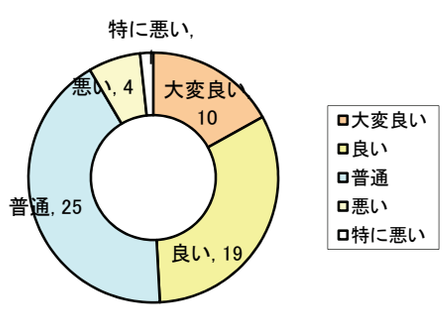
15．地域環境評価
空気、山、川　自然環境



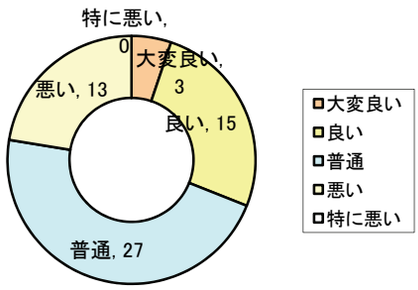
15．地域環境評価
医療機関



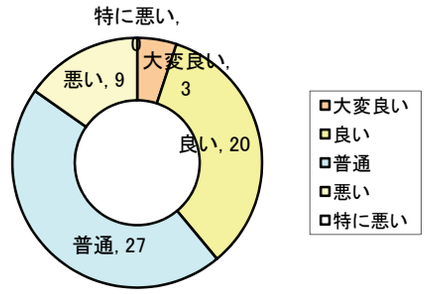
15．地域環境評価
ゴミ収集状況



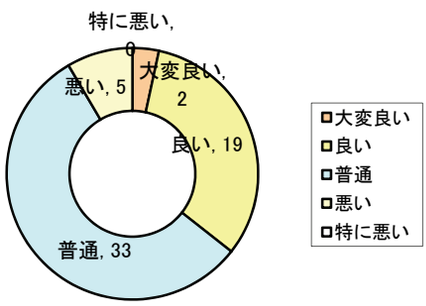
15．地域環境評価
日常的買い物の利便性



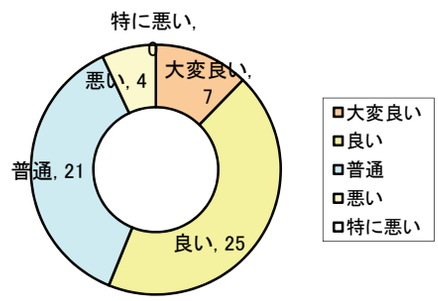
15．地域環境評価
公園、緑地の利用のしやすさ



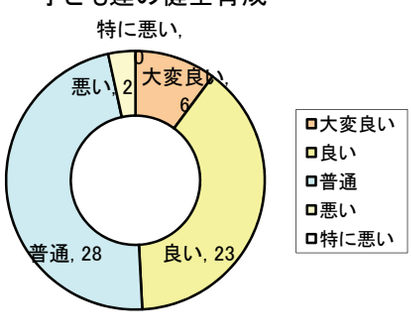
15．地域環境評価
自主防災組織体制



15．地域環境評価
地域コミュニティの人間関係



15．地域環境評価
子ども達の健全育成



16．その他要望、意見

・いきいきセンターの行事等毎回道路面からでもよく見えるようになればよいと思う。車がいっぱい入っているが何事かと思って通っている
・大きな時計台がほしい
・色々と車の便利性など（タクシー）考えて下さっているようで老人には有りがたい事です
・老人も甘えを少しして、少しでも若い人たちの負担を少なくする様に努めたいと思っています

平成 24 年 3 月 発行

熟議で元気な地域づくりネットワーク